
フィロソフィア／Philosophia

on

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フィロソフィア／Philosophia

【Nコード】

N5928P

【作者名】

on

【あらすじ】

フィロソフィア／Philosophia——それは巨大なオンラインゲームだった。そのはずだった。しかし今、私の前にあるのは、どう見ても現実だ。

人、魔物、獣人、エルフ、そして悪魔……多くの出会い、そして多くの冒険に関わり合い、英雄は、自身の生を見つめなおす。

見知らぬ世界で生まれ変わった人間、いや、最強の悪魔の物語。

プロローグ フィロソフィア／Philosophia（前書き）

とある小説に感化されてやりました。反省はしていません。他にも書いてますが、そっちと違ってこれは息抜きです。

勝手適当に書いてます。

ちょっと残酷な表現もあるのでお気をつけて。

尚、この話はチート、主人公最強、ご都合主義、ハーレムなどの要素を含みます。

嫌いな方は見ないでください。

ブローグ フィロソフィア／Philosophia

皆さんは、「Massively Multiplayer Online Role-Playing Game（マッシュブリー・マルチプレイヤー・オンライン・ロール・プレイング・ゲーム）」というものをご存知だろうか？

簡潔に説明すれば、「多人数同時参加型オンラインRPG」などということができるもので、オンラインゲームの一種である。

RPG的要素、つまりキャラクターの成長要素、アイテムなどリソース管理、ファンタジーなど物語演出、世界を探検する冒険、これをオンラインで行うことで、思考する人と人との駆け引きなどが盛り込まれた、画期的なゲームといえるだろう。

日本ではかなり人気の高い種類のゲームで、「MMO」や「MMORPG」などと略されることが多い。

そういったゲームの一つとして産声を上げたのが、「フィロソフィア／Philosophia」だった。

フィロソフィアは、正に英雄体験をその根本に抱えるゲームである。三人称視点を排除し、アクションRPGの要素を盛り込み、あたかも自分がその世界にいるように錯覚する。そして天井知らずの自由度、善も悪もプレイヤー本人が決め、その世界は正しく小さな世界だった。

無論、現実ではなくあくまでデータの世界である。そこにある力は、現実では実現し得ないものが採用されている。

魔法、スキル、アビリティ……それらはゲームに慣れ親しんだものなら当たり前のように用いられる用語ではあったが、フィロソフィアにあってはその中身の濃さが半端ではなかったのだ。

有体によれば、ゲームの中では、それらを作成することすら可能だ

ったのだ。

魔法を例にとって見よう。世界には多数の言霊が散らばっている。それらはモンスターが持っていたり、人間が持っていたり、その辺に落ちていたり。入手方法は様々だった。とにかく多様な言霊、即ちキーワードを集めることができた。

ある程度の分量のキーワードを集めたならば、次に行うのは作成、『魔法作成／マジックメーカー』である。

これはキーワードを自由に繋ぎ合わせることで、千差万別の効果を生み出すというシステムであった。

言霊の組み合わせは天文学的なものに上りつめたが、その組み合わせの数だけの魔法が産まれた。

例えば、『焼き尽くせ／ファイアボール』という火に属する魔法があった。これ自体は魔法職であればまず最初のレベルで覚えられる簡単で弱いものであったが、他にも『尽く焼き尽くせ／ファイアボール』、『遍く焼き尽くせ／ファイアボール』、など、キーワードによっては微妙に威力や範囲が変わることさえあった。さらに魔法はレベル上昇やジョブから覚えていくのが基本ではあったが、言霊を弄ることで新たな魔法を覚えることもあった。『全てを焼き尽くす／フレイム』などはその代表的なものとして、プレイヤーたちに知られている。

ゲームでありながら、プレイヤーの国語センスと語彙力が試されるものであった。

そしてこのような自由度は、魔法の範疇だけに留まらない。道具作成、商売、スキル……あらゆることに応用され、実装されていた。

無論この組み合わせをコントロールしているのは、人の身では難しいことである。これを可能にしているのは、「フィロソフィア／Philosophia」を作った会社、「レナード&マーカス／R&M」という会社のオフィスビル、その4階にひっそりとたたずむ

メインコンピュータの自動演算システム、通称『神』であった。

『神』はペンタゴンのサバールームもかくやというほどの規模を誇っており、それは正に神と呼ぶに相応しい充実振りだったといえる。

開発スタッフは戯れに、このコンピュータ一つ一つに名前をつけた。

青いサーバマシンは、【ヘルメース】。それは、現実存在する神を参考に作られた。

即ち、フィロソフィアの中に知の神ヘイルメスが誕生した瞬間であった。

スタッフは次々と神々を作った。【アフロディテー】、【アレス】、

【アルテミス】……それらは全てがある分野をコントロールする神となったのだ。スタッフの想像力は膨らんだ。それに対する神々も作り上げられた。むしろこちらの神々にこそ、スタッフのオリジナルティが注ぎ込まれたのかもしれない。

【暗黒神オーバールゴア】、【魔神ゲルニカ】……。

そして、世界である以上、国家、人種、一人一人の生命が存在しなければならなかった。

魔法国家『モルガナンテ』、騎士国家『パラデオン』……。隆盛を極めた人間国家群だった。

しかしそれは何も人間だけではない。

獣人、竜神、亜人、翼人、天族。

多くの種族の、その人生が、フィロソフィアにはあった。

そして、それを脅かすものもまた存在する。魔物、魔人、魔族、ア宁德ッド、竜……そして魔王。

彼らは決して悪ではない。ただ、人やその他の種族に比べて相容れぬことが多い、そのような存在なのだ。

それら全てを呑み込んで、フィロソフィアは栄えた。それはゲームの中においても、また外においても。

圧倒的なユーザー数、中毒者、社会問題。よくも悪くも、フィロソフィアは時代の寵児だった。

だが、盛者必衰。多くの自由を持って、多くの文化と歴史を生み出し続けたこのゲームは、しかしある日その活動を停止せざるをえなくなった。

力と破壊の神、悪しき巨人【ゴルガル】の加護を受けた第七魔王【ロホガレ】率いる、第七魔王軍。

人の大陸から次元を飛び越え、暗き種族が住む世界、『ゴナール』の西端に潜む彼らの中でも、筆頭存在。

ダーク・ヒーロー

【闇の英雄】の忌み名を持つ者、『ヒーロ』と呼ばれる闇の騎士が死んだことで、史上最高のMMOと呼ばれた『フィロソフィア／Philosophia』は終わった。

勿論、ゲームの中で彼が死んだ、というよりもバグが起き、停止したことは仕方がないただの故障だったかも知れない。

だが、このコントローラーとヘッドマウントディスプレイ型のゲームをプレイすることで、心停止状態になってしまった者がいたのは、このゲームの刺激が強すぎると世間から叩かれるに、充分な理由であった。

世界は、そのとき終わった。

しかして、世界は動き出す。

「被害者は、新山英雄^{にいやま ひでお}28歳。

職業は会社員。大学を優秀な成績で卒業、スポーツ万能で成績優秀、人当たりも悪くはなかった。当時の友人は語る。家族は既になく、親戚も……」——著名な週刊誌

1話 右手に剣を、左手に首を

豪奢、とはとても言いがたい城がある。

古びて埃がつもり、壁は崩れ、装飾は朽ちている。

ところどころには人骨すら落ちており、それがこの城が安寧や平和とはほど遠い場所であることを教えてくれる。

作りそのものはしっかりしていた。

よほど堅固に築城されたのであろう。

この城は既に人であれば数代にも渡る時を刻んでいたが、尚その本質を失ってはいなかった。

そんな城の王の間に、一人の人間が座していた。

玉座に足を組み、肘掛で頬杖を着いていた。

中肉中背、といって良いのか。

肉厚で漆黒、金の装飾を施された鎧を着込み、赤いマントを羽織った姿は、正に戦について思案する王のようにも見えた。

王のように、彼から数歩先にいるものたちを、見下ろしている。倒れている人間たちの死体——或いは、死体のデータを。

彼は、王ではなかった。

それは、誰が一見してもわかる。

首がない。

性格には、首はある。ただ、あるべき場所にはなかった。

首は、彼の膝の上に乗っているのだ。

驚くほど肌の白い顔が、漆黒に金縁の兜を被っていた。

兜は目以外の全てを隠すようにできており、その容姿は判然としない。

何も知らぬものは、それを美しくオカルトめいた蠟人形とも思いかもしれない。

だが、彼を知るものは、その鎧姿さえあれば、その身を震わせて逃げるに十分な相手だと知っていた。

彼こそは種族『悪魔／デュラハン』、ジョブは『バルバス（地獄の大総裁）』、ゴナⅡダールーの魔神72柱の1柱で、序列5番の実力者であった。

悪魔はフィロソフィア内においては、最高クラスの種族である。

それは条件においても、能力においてもそうだ。

悪魔になるには、まず極めて高い難易度のクエストを、単独でクリアする実力が求められる。それは探索であったり、討伐であったり、生贄や供え物によって達成できたりした。

勿論そのクエストを出すのは悪魔であるので、その内容は忌まわしい。

古の魔王の居城を探索せよ。人間の英雄を討伐せよ。生贄を100人捧げよ。伝説的アイテムを納品せよ、などという悪魔めいたものが主などころであった。

それを成してジョブチェンジし、初めて悪魔になることができたのだが、熟練プレーヤーから「悪魔の難しさ」と言われる所以は、何も悪魔になる前だけが難しいということではないと教えてくれる。初期に選べるジョブから高クラスジョブになる場合、ほとんどの場合がレベルダウンや能力ダウンといった副作用を伴うのだが、悪魔種はその中でも数少ない、レベル初期化種族である。しかも、それまでに覚えたスキルやアビリティすら弱体化されるという徹底ぶりであった。

その厳しさゆえに、人気のある種族ではなく、玄人向けのジョブとして認識されていた。

しかし、そこから這い上がり、高いレベル悪魔へと昇りつめたプレイヤーは、極めて大きな恩恵に預かることができた。

一例を列記する。

インキュバス…異性への魅了。異性からの直接攻撃を35パーセントカット、間接攻撃を48パーセントカット。飛行。闇魔法。

ジン…無属性直接攻撃無効化。精霊魔法使用。属性付与。毎ターン再生効果発動。

ラミア…女性（雌）ユニット限定。睡眠、魅了無効。子ども型ユニットへの先制攻撃権、対子どもユニット時攻撃力60パーセントアップ。

これらは悪魔職の中では下位と言われるものであったが、それでもその能力は他のプレイヤーの脅威であった。

それだけに、さらに高難度条件を持つ、上位悪魔類に関しては、最早チートと掲示板で騒がれるほどの能力を有していたのだ。

そしてこのデウラハン、ヒーロは、そんな悪魔たちの中でも恐るべき実力を持っており、最強の悪魔たちに贈られる称号、【魔神】において第5柱という序列を持っていた。序列とは、神たるCPUがステータスと数字から作為に選り出された悪魔プレイヤーたちに贈られた強さの順位である。

悪魔ユニットによっては、その戦歴やステータス特徴に応じて、彼らの暗黒神から称号だけでなく、強力なアイテム、場合によっては新しいジョブすらを開放される場合があった。

その一つが『バルバス（地獄の大総裁）』である。

バルバスたるヒーロは、何も眠っているわけでも、死んでいるわけでもなかった。何度も何度も、ある行動を行っていたのである。

何故だ、何故コールできない。これがヘッドマウントディスプレイの故障ならば、GMゲームマスターコールはあってもおかしくない。魔法は使用できたのだ。《報告／メッセージ》も使用できるはずだ。

ヒロはユニークNPCでもなければ、モンスターでもなかった。その中身は、れっきとした人間である。そう。

昨日、いつもどおりパソコンの電源を立ち上げ、ディスプレイを着装し、コントローラーを握った。

昨日のクエストは、自身が上役から任されているこの城を冒険者から守護することだった。

冒険者は8人だけ。

一定のレベルの善性ユニットの中から、ある地方にいるものをランダムで選出した特別イベントだ。

ヒロはそれをあっさりと撃退した。

自分のレベルとこのチートボディに迫るほど強力なパーティだったが、しかしこの城はこう見えて多くの魔法的效果がある。

自陣で負けるほど、弱くはないのだ。

しかし奇妙なことがおこった。

コントローラーを握って戦っていたはずなのに、時折奇妙なノイズが入った。

よくわからなかった。風邪でも引いたのかと思ったが、現実はもつと恐ろしかった。

ディスプレイに映っていた画面は、いつの間にか目の前に直接ある。感じていた暖房の風は、どこか無味乾燥な廃墟の風邪に。

目の前で行われていた、今更マンネリ化した戦闘は、今、自分の体

で行われている。

体は勝手に動く。

脳が命じ、指が動き、コントローラーがそれを伝えるはずだった。今は脳が命じ、体が動いている。

何故だ。

ロールプレイのし過ぎで、脳が狂気に陥ったのか。

これは妄想なのか、それとも、現実なのか。

判断のつかぬまま、気に入っている装備、限定条件武器『首狩剣／ヴォーパルソード』の、その肉厚で長大な刃を、目の前のNPCにたたきつけた。

肌を感じる熱い熱い液体。ねっとりとした感触。

そこまで感じて、後は覚えていない。

ただかろうじて分かるのは、冷静を装って玉座に座り、いつも家でおこなっている姿勢で、ゆっくりと意識を失っていったということだ。

目を覚まして、何も変わっていなかった。

むしろ、この無骨な体を、現実の自分よりも一回りは大きい体がより強く自分に馴染んでいることを実感しただけである。

今では、簡単に魔法を行使できる。

空気を吸う、自転車を操るのと同様に、脳と体の両方が理解している。

思いつく魔法は、全て使用できた。ただ一つ、使用できないのはGMに関わることであった。恐ろしいことに、他のプレイヤーへの連絡はできるようであった。

先ほどもとで使ってみて非常に驚かされた。まさか繋がるとは思わなかったのだ。

これは中級魔法《連絡／コール》である。小さな魔力——恐らくはマジックポイントMP——の消費で扱える、いわばメールであった。

それを内容の無いまま、リストの一番上のプレイヤーに送ってしまったのだ。

まるで慣れ親しんだ行動であるかのようにそれをこなしてしまったが、リアルでも友人である男がリストの一番上であったからだ。

そいつは同じ悪魔であり、『人狼／グラシャⅡラボラス』の特殊種族、ジョブを持った【タヌキ】という男だった。

だったのだが——

自身の頭の中にあるリストには、どうしてもタヌキとは表示されない。

頭の中にあるリスト、という時点で既に人知を超えた事象ではあるが、このリストそのものが最早恐ろしい。

バルバトス、ブエル、シトリー、バティン、グラシャⅡラボラス、ガープ、フルフル、マルコシアス……

何だ、悪魔ばかりじゃないか。

薄々現状は呑み込め始めた。

自分が何で、どんな存在なのか。

ここがどこなのか。

ゲームの中か、或いは全く似ているだけの、別の世界なのか。

ヒイロは玉座でぐったりとうなだれた。

どうしてこうなった。

ここで並の人間ならば恐怖するか、発狂するか、何か一騒動あるだろう。

だが、ヒイロは違った。

彼は現実の世界にそれほど執着がなかった。淡泊な男だった。惰性で生きていたとっていい。

それに加えて、この体に影響を受けているのか、心の奥に攻撃的な

衝動や、恐ろしく強気な自信があるのが分かる。

それが彼を疲れさせてはいても、狂うことをさせなかった。

しばらくそのままになっていると、急に頭の中で声が響いた。

冷静であつたからこそ、彼は声を出さずにすんだ。

これが、伝達――？

『どうした？ バルバス』

頭の中に語りかけてくる声。自分の頭の中に、どこか遠くから糸電話の糸が伸びているようなイメージがある。

物語やゲームでこういった際の鉄板は、心の中で語りかける、だろうか。

そんなことを考えながらも、この体はやはり勝手にそれをこなす。

『グラシャⅡラボラス？』

『そうだ。何だ、先ほどの？ 驚いたぞ、お前が負けたかと思つた』

そうだ。無言とはいえ、糸、或いはパスを一時的に繋いだのは確かだ。メールなら送信するまでは問題ないが、この世界では既に相手にも送るということを察知されてしまうのだろう。これは忘れられない事実ではないか。

『いや、少し、聞きたいことがあつてな』

『何だ、お前が珍しいな。言ってみろ』

声を聞く限りでは、とても理知的な存在のように思える。

『タヌキを知っているか？』

『タヌキ……あの、人間の世界の懦弱な生物か？』

『いや……そうか、いいんだ。他に透、クリス、五本松、タブレット。聞き覚えは？』

なるほど、声は出ていなくても相手の困惑した様子はなんとなく伝わってくる。これが先ほど相手にも伝わってしまったのだろう。

『クリスならば……確か騎士の国『ドムドーラ』にいる、女騎士でなかったか？』

『そうか、よくわかった。少し気になったことがあったただけだ。すまなかった』

『いや、ならばいいが……そういえば、冒険者はどうした』

冷や水を背中に流された気分だった。

だが、冷静に返す。

『皆、目の前に倒れている』

『そうか。中々の相手と聞いていたが、さすがは第5柱バルバス。私も負けぬようにせねばな』

素晴らしい残して伝達をカットした相手は、悪魔らしからぬ実直な感覚を覚えた。

しかし、最後の言葉はショックだった。人。

やはりこれは、人なのか。

倒れている人間に近づいていく。

ここにいるのは3人だが、女1人、男2人。

全員が斬撃による即死。

痛々しい傷から、男二人は内臓が飛び出ている。

吐き気を催しもしない自分に嫌な予感を覚えながら、脈を計ってみる。

あるわけがない。

もう、死んでいる。

手に、冷たく、固まっている感触がある。

そうだ。感触がある。

私はゆっくりと天を仰いだ。

汚らしい天井を、蜘蛛が這う。

もう、人間ではない。

少し考えればわかることだった。

私の首は、私の左手に抱えられているのだから。

2話 悪魔の従者

窓の外から見える大地は不毛だ。

乾き、薄汚れ、何もない。空は曇り、荒れ、澱む。

それでもどこか落ち着くのは、この魂が完全にこの体に馴染んでしまったからかもしれない。

小脇に自分の頭を抱えて、視界が通常ではありえないことにも、慣れた。

もつとも、この体に魂があるのかどうかは分からないが。

状況を把握し、一応は落ち着きを見せたヒイロは、しかし次の行動に戸惑っていた。

ゲームの知識は豊富にあるが、このフィロソフィアにおいては巨大なビルのワンフロアがサーバー専用ルームとなるほどの容量がある。そしてその容量は、この世界の広さを表しているともいえる。

例えばゲームの世界なのとしても、ヒイロにも分からないことは多くあるし、そもそもここが同じ世界なのかも分からなかった。

まずは、情報だな。

ヒイロはそう判断すると、玉座に取り付けられていた鈴を鳴らした。魔法的なアイテムなのだろう、城の隅々まで響いたような感覚がある。

ゲームでは単にコマンドとして『従僕を呼ぶ』というものがあつたが、それらはこのような形で代用されているようだった。

それらを知識では知らず、感覚で理解している、というのは、何とも奇妙な感じだ。

すぐに玉座の間の扉を開き、一体の悪魔が入ってきた。
彼にとっては顔なじみの存在である。

「ペイモン、参りました」

「ああ」

彼、或いは彼女はペイモン。女性の顔をして男性の胴体を持ち、下半身は駱駝の、有力な悪魔。

と、ステータス図鑑には書いてあったはずだ。

なるほど、馬にしては多少細く、毛の多い下半身だ。

ディスプレイでは分からなかった細かい部分が、今なら分かる。

顔はかなり美しいといっているだろう。さすがは悪魔である。黒髪に金色の瞳を持っており、その表情はどこか強気だ。

目の鋭さがそう感じさせるのかもしれない。

胴体は男性的で屈強、なかどうかはわからないが、シャープだ。

それを包むのは高級な生地と思われる衣服で、黒色が彼、或いは彼女の醸し出す鋭さによく似合っていた。

無論、似合うように渡したのだが。

ゲームで、上級悪魔は多くの悪魔やアンデッドなどを味方ユニットとして使役でき、装備すら与えることができたが、一部の悪魔は専用のユニークNPCを所持していた。

バルバスのユニーク従者が、このペイモンである。

彼女――便宜上彼女と呼ぶが、彼女はバルバスに忠誠を誓う有力な悪魔で、無指示の状態でも高レベルプレイヤーたちを倒してしまうほどの能力があった。

彼女は人間にとっては恐ろしい存在なのだが、主である自分には美しい笑顔を向けてくれている。

色々試すには丁度いい相手かもしれない。

「戯れに問う」

肩が凝ることだが、あくまでこちらは大悪魔であるという意識を持って、ロールプレイする。

急な態度の変化に、怪しまれてはならない。

極端に言えば、このペイモンが味方であるかどうかも分からないのだ。

もったも、戦っても負けることはない。それは体が理解していた。

「汝の忠誠はどこにありや？」

「無論、私の前におられる方です」

にっこりと笑う顔は大変可愛らしい——ではなく、一辺の濁りも感じさせない。

「それはなぜか？」

「偉大なる力を持ち、偉大なる知性を持ち、偉大なる戦果を持つお方だからです」

背中がむずがゆくなるほどの褒め言葉だ。彼女のうつすらと上気した頬はそれが本気であることもほのめかしている。

ゲームでもとても世話になった。時には壁になり、時には援護魔法を、補助魔法を……とても大事な存在ではあるが、全ては次の質問しだいだ。

「では、汝の前に魔王ロホガレ様……いや、ロホガレ殿がやってきた。汝を破格の待遇で臣下にと望んだ。汝の選択は？」

目の前の悪魔は、少し呆気にとられたようだった。

その顔もまた生気に溢れ、とてもゲームとは思えない。

まず間違いないだろう、ここは現実だ。

少し思案している間に、ペイモンは一言断って、一步二歩と近づいてくる。

すわ戦闘か、と思ったが、どうもそんな雰囲気でもない。

ペイモンには、妖しげに上気した、そう、うっとりとした表情が浮かんでいる。

「……無論、お優しく、お強く、私を気にかけてくださる、あなた様の下にあります」

そういうとペイモンは四つの足を器用に折りたたみ、恭しく私の足を両手で包み込むと、その先端に口付けをした。

妖艶な表情のままである。

これは。

今度は私が呆ける番だった。

膝の上にある俺の顔を、凝視してくるペイモンの顔は、全く女の顔をしていた。

「あ、ああ、ありがとうペイモン。君のその言葉を聞けて、私も嬉しく思う」

そういうだけで、この女は嬉しげに身を震わせた。

「勿体ないお言葉。このペイモン、喜びのきわみにございます」

その後周辺の地理や世界の状況について軽く質問をして、死体の処理を命じると一旦下がらせた。

このやり取りを少し不思議には思っていたようだが、感謝を口にする感激した様子で冒険者の死体を引きずっていった。

どうやら、私への忠誠度は、少なくともペイモンに関してはよほど無様な様を見せない限り問題なさそうだ。

あまり強圧的に魔王的なロールプレイなどはできそうもなかったから、ありがたい。

それにペイモンのおかげでわかったことも多い。

今は太陽暦466年、寒き月の中、十を数えたあたり。

ここはゴナール^{ゴナール}の西端、力と破壊の魔人を称える魔王の領土、そのさらに北端に位置する、大悪魔バルバスの城。

魔王ロホガレの領土には、詳しくは知らないが人間たちの世界『ソード・ライン』と繋がる門があり、先の冒険者はそこから迷い込んだのだろうということだった。

ありがたい情報だが、困ったこともわかった。

どうやら私は、元には戻れないかも知れない。

私がつい先日までゲームの世界でデュラハンとしてPKに猛威を振るっていたときは、ゲーム内時間で太陽暦523年。
プレイヤーキラー

太陽暦466年といえば、第七魔王領に癒しと慈愛の女神【ラトウィヤ】の信者たちが門を開き、そこから【太陽の王子】の軍勢が攻め入った年、『太陽の戦争』のイベントの年だ。

そこで魔王ロホガレは倒れ、第七魔王領は制圧こそされなかったが、中立地帯、無法地帯へと姿を変えてしまったのだ。

私はまだ悪魔になったばかりだったが、何とか城に引きこもってやり過ごし、消滅、つまりはデュラハンとしてキルされ、能力を恐ろしく下げられるというペナルティとは無縁だった。

しかし多くの悪魔たちが涙を呑んだ戦いだっただとも聞いている。これはまずい。

ゲーム内と同じ要領でクエストが進行していけば、悪魔を退治するようなイベントは盛りだくさんにある。

もし、もしこのままイベントクエストが起こり、バルバスが狙われるようになり、死んだとしたら。

それは、能力のダウンだけで済むのだろうか。

私は知らず息を呑んだ。

嫌だ。

人間としての精神と、悪魔としての肉体が悲鳴を上げる。

掴んだ肘掛が、みしりと碎け散った。

死は怖い。それは、生物なら当たり前の考えだ。

それは、悪魔とか、人間とか、そんな問題じゃない。

体の中の悪魔が、問いかけてくる。

私に、死の恐怖と、悪魔の流儀を吹き込んでくる……。

頭を振って、奇妙な感覚を打ち消す。

どうやら、悪魔の体になってから、私は少しナーバスになっているらしい。少し冷静にならねばならない。

まず、今がゲームとも時間の流れが違うというのは、この現実が今病院で寝てこん睡状態の私の妄想か、本当に精神がこのデュラハンになってしまったのか、という点について、激しく後者を裏付ける話だ。どこかで聞いたが世の中の漫画やゲームというのは異次元にある世界の情報を、クリエイターが無意識に脳で受信しているから、という説があった。

或いは、それが現実なのかもしれない。

であれば、ここを現実と思い定める。

すると私は、非常にまずい立場におかれていることが分かる。

現実であるなら死も起こりうるだろう。

そうになると、この城と、私のロホガレ陣営所属という状況がよくない。

ロホガレは魔王の中では弱いのだ。

彼は力と破壊の神を崇める魔王だ。

その本質は暴力、つまりは物理攻撃である。攻撃のみを見ればそれは魔王に相応しく、上級プレイヤーでも即死級のものがあるが、残念ながら上級プレイヤーがいわゆるガチンコで戦うことはまずない。上手いものほど、搦め手か、それか補助能力を上手く使いこなす。状態異常にかかるということで掲示板でネタにすらなったロホガレは、人間側プレイヤーどころか悪魔側にとっても、まず負けることを宿命付けられた存在だった。まあそれはいい。私は別にロホガレに恩も忠義も抱いてはいないのだから。

しかし一番の問題は私だ。

私は当然、『異世界の門』の位置を知っている。生憎と、私の城は、ユニーク悪魔たちの中でも門から三番目に近い。以前のイベントでは、ロホガレ領のユニーク悪魔12人のうち、生き残ったのは4人しかいなかった。私より門に近い二人は、両方ともこのイベントを最後に悪魔側でその姿を見ることはなかった。

確かに悪魔は強いが、敵が多すぎる。

人間という種族はその人物が何を目指すかで敵味方がころころ入れ替わる。獣人側につくこともあれば、悪魔側につくこともある。

だが、悪魔の味方はいない。悪魔という種族は、潜在的にあらゆる種族が敵なのである。

これが厄介だった。買い物一つするにもこそそと変身魔法を使うか、雇った人間やその他の善性種族を使わねばならなかった。

別に悪魔が全員悪人というわけではない。

ただ、悪魔を加護する神々が、その他の全ての種族の神々と敵対しているというだけである。

友好的Ⅱ中立。

敵対的Ⅱ不倶戴天。

それが悪魔族だった。

唯一の例外が、魔物や同じ悪魔である。

彼らは主義主張を持ってはいるが、最終的には力でひれ伏せさせる

ことができた。

時には悪魔同士戦うこともあったが、勝てば相手を部下にすることも容易かったのである。

私も昔は多くのモンスターNPCを部下にしたものだった。

特に私は大悪魔バルバス。

ユニークアビリティとして、【ブラックレギオン悪魔の軍団】がある。

これは私に忠誠を誓った存在に対する命令権と、能力の底上げを可能にする能力だ。

私の最大支配下数は36匹。これがあつたおかげで、戦争においても私は最高クラスのプレイヤーたちを阻み続けることができた。

そこまで考えれば、自然と方針はできた。

まずは軍団作り、そして情報収集である。

思い返してみれば、私は自分のこともあまり知らない。どの程度人に知られているのか、どの程度の存在と認知されているのか。どの程度強いのか。どの程度のアイテムや装備があるのか。配下のモンスターは誰がいるのか。

やることは多いが、生きようとするバイタリティが湧いている今、それはむしろ心地いいことだ。

とにもかくにも、私は生き残るために、この悪魔の身を有効に活用していくことを決めたのだ。

3話 ミノタウロスの女の子

自分の頭が自分の手の中にあるというのは、ひどく面白い。
ぼんぼんと転がすと自分の視界が跳ね回り、頭を床に向ければ逆さの世界を体験できる。

ふと廊下の窓を覗けば、うつすらとした蠟燭の明かりによって反射された自身の姿が確認できる。

漆黒に金縁の全身鎧を身につけ、巨大な剣を背中に差した、外人然としてかつ貴族風の男だ。

ただし、その首から上は、小脇に抱えられていたが。

顔はそれほど悪い男ではない。

どちらかと言えば外人よりもアジア系とのハーフに近く、親が国際結婚だった以前の顔に遠からずといったところだ。

違いは染色していないのに色素の薄い灰色の髪と、青い目、そしてがっしりとした体躯と長身だろうか。

まあこの窓ガラスでは分からないが、もう一つ、恐ろしいほどに青白い顔色というのもあるのだろうか……。

私が今向かっているのは、城内の宝物庫だ。

本来ならばペイモンに案内を頼んでもいいのだが、ああも素直に慕われるとむずがゆいものがあるし、正直彼女の前でぼろを出さない自信がない。

うつすらと記憶はある。彼女とどう接していたのか、どんな出会いだったのか。だが、その記憶はゲームの内容だったのか、この体の記憶なのか、酷く曖昧だ。混濁しているといって差し支えない。

なので私は臆病な心を堂々と認め、一人で宝物庫、つまりアイテムボックスに向かっているのだ。

それというのも、全ては生き残るためだ。

現在の私の装備は、それほど強力なものではない。

デュラハンの初期装備、『屍人の鎧／デッドアーマー』一式に、戦闘中に使い魔や精霊を召還することが出来る『召還の指環』だけだ。攻撃こそデュラハンと死神種の限定装備、『首狩剣／ヴォーパルソード』があつたが、これはデュラハンにクラスチェンジする前から所持していたものだった。

つまり、ここがゲームの世界であるならば、いってみれば『最強装備』に自然になった状態ではないかと思う。

となれば、私が苦勞して集めた、時間で買ったとも言えるアイテムたちは、どこへ行ったのか。

もし残っているならば、もっとも可能性が高いのは、この城の宝物庫であるのは自明だ。

勿論、時期的に言えばない可能性も高い。いや、むしろ私は、ないのでないかと考えている。

それでもゲームと現実のギャップを埋めるのに役に立つだろうし、他の施設も見てもよいと思うっている。

この城は、私のものなのだから。

M M O R P G の中ではよくあるシステムの一つだが、他のゲームでは『ホーム』や『ギルド』、『ハウス』などと呼ばれていたと思う。それがフィロソフィアでは、ここ、私の城なのだ。

私はここでアイテムをつくり、装備を整え、ここから冒険に出発し、ここに戻ってくる。

『バルバス』がここにすることは他のプレイヤーに『公開』していなかったから、イベントクエストを受けない限りはここで戦闘は起こらなかった。

正しく、私の安心の『ホーム』、万全な『ハウス』だ。

だからこそ、ここはしっかりと整備しておきたい。
せめて門番くらいは置きたいものだと思いますが、私は一際豪華な扉の前に立った。

獅子の紋様、金の装飾、180はゆうに超えるだろうデュラハンの上背の、遙か先を行く巨大な扉。

正しく、ゲームの通り。アイテムボックスだ。

さて、中はどうなっているか。

そう思い扉に手をかけたところで、私が触れる前に扉が開いた。

「何？」

「侵入者だね」

思わずぎょつとしてしまった。

扉の隙間から私よりも巨大な腕が出てきたのだ。それに、位置が高い。200は越えるか！

飛びずさった私を尻目に、その腕はゆっくりと扉を押し開けていく。開ききった扉かの奥には闇、そして闇の中から出てきたのは。

「でもほんと、どれくらいぶりの侵入者だろ」

それは女性だった。ただし、物凄く、でかい、がつく。

一見すれば巨大な人間の女性。

黒いショートカットをザンバラにして、目が大きく、口元もだらしなくゆるんで、どこか幼い。

しかし私は視線をずらさざるを得なかった。

……目のやり場に困る。

女性は、胸がばっくりと開いた革鎧と、パレオかミニスカートのよ
うな腰巻きをしているだけだった。

それ以外の場所は、ほとんど露出している。

これで実際に胸がちよつとお目にかかれないサイズだから困る。特にパレオの下や背中に柔らかそうな毛がぼーぼーと見えてしまっているのが――。

はたと気づいた。ぼーぼーの毛だと？

そうだ、こんなモンスター、見たことがある。

あまりに人間離れしているのに、今ここにある映像が現実的過ぎて、理解しきれていなかった。

私は今、初めてペイモン以外のモンスターを、生で見たのだ。

こいつ、イベントクエストでのみ出てくるあの『ミノタウロス（雌牛獣人）』か！

よく見れば、人間なら耳のあるべき場所に牛の耳が、そしてそのすぐそばに綺麗な2本の角が生えている。

ミノタウロスはにっこりと笑うと『大斧／グレートアックス』を振りかぶりながら宝物庫から出てきた。

「久しぶりなんだ、楽しませてよ」

「君は――！？」

どごとと音がして、私は廊下を一足飛びで4メートルは飛んだ。が、今はそこは驚くところではないだろう。

老朽化していたとはいえ地面が陥没している。

アックスの着弾地点周辺60センチぐらいが無残に割れ砕け、その飛礫がここまで飛んできている。

私の身体能力にも驚くべきなのだろうが、その交通事故でもお目にかかれないような惨状に、しばし思考が停止した。

「ありゃ、汚しちゃった……あいつ……じゃなかった、ゴシュジンサマにしかられちゃうよ」

舌を出して憚然とする様子は大層可愛らしいが、その巨体と剛力は洒落にならない。

ミノタウロスの女性版とも言えるべきモンスターで、ある筋のスレツドでは大層話題になったらしいが……。

確かその能力値的には通常の『ミノタウロス（牛頭獣人）』とほぼ同等で、STR（力）ではやや劣り、その分AGI（俊敏）が高いはず。

中級レベルのプレイヤーの多くが、ミノタウロスよりも早く行動してくる彼女に撃破されレベルダウンを喫していたのだ。言ってみれば中盤の強敵。

それがまさかこんなところで出てくるとは。

思考のまとまらないうちに、いい笑顔の彼女が前へ出てくる。

「でもよく避けたなく、結構本気で打ったんだけど？」

にこりというよりはにつかと笑う。八重歯が彼女の体躯と顔の幼さのギャップを際立たせる。

「楽しめそうだね。僕はパシパ。ミノタウロスの女の子さ」

話し方はとても可愛いと思うが……出来ればグレートアックスを振り回しながら近づいてくるのは止めて欲しい。

私が一步後ずさると、彼女は不服そうに頬を膨らませた。

「もう、折角のお誘いを断る気？」

「まずは話をしないか？ 色々誤解があるようだが……私は宝物庫荒らしではない」

「そう？ でも上からデュラハンの人に来るなんて連絡来てないか

らね」

今までと少し違う表情で、彼女は微笑んだ。

あでやかで、つやか。

ぺろりと出した長い舌で、人差し指と中指を舐めると、グレートアックスを両手で握りこみ、その大きな腕に青筋を浮き出させる。すごい迫力だ。

ああ、分かっている。

この戦いは、逃げられない！　というやつだ。

私は死にたくはない。

背中からヴォーパルソードを引き出し、正眼に構える。

正直でたためだ、結局は、この体の能力に頼ることになるだろう。

勿論、私は片手で頭を掴んでいる。

剣も、片手だ。

……これで勝てるのだろうか？　やはり逃げるべきだろうか。

その刹那、目の前にミノタウロス娘——パシパが迫っていた。どうやら考える間も与えられないらしい。

やむを得ない。

南無三！

笑顔で打ち込まれたグレートアックスに、ヴォーパルソードをたたきつける。

紫電が走った。

そう表現するのは、自画自賛が過ぎるかもしれないが、現実には、そう見えたのだ。

私の右腕の筋肉が盛り上がり、彼女の豪腕と拮抗している。

彼女の顔も驚いているのが、私も抱えられた顔で見えた。

「そんな……僕とともに打ち合うなんて……普通のデュラハンにできるはずが……くっ」

彼女には分からないことだが、私としてはある程度予想はしていた。無論自信はなかったが、結果的に上手くいったようだ。

フィロソフィアでは、同じモンスター種族内でも能力にある程度ばらつきがある。ノーマルミノタウロスは、ゴナⅡダⅡルの門近辺ではレベル15程度。通常のヒューマンで単独ならば、レベル30は必要な相手であり、そのSTR値は45から60。

しかし上級クラスチェンジ後は、レベルが1から5まで下げられる。多少なりともクラスチェンジ前のステータスが考慮され、ボーナス値がプラスされるが、それでも本来ならばこのレベルの相手には、初期ステータスではどうあっても勝てないのだ。

だが、この身は悪魔。

悪魔はあらゆる条件的に不利であるが、その代わり、初期ステータスが断トツで高いのだ。

その分成長はあまりせず、レベルもほとんど上がらないのだが……。今はこの特徴がありがたい。

私の初期ステータスはもうおぼろげだが、ヒューマン時のボーナスを含めれば、STR80近いものがあったはずだ。

必死でアックスを押してくる彼女には悪いし、ずるいと思うが、私も死にたくはない。

ここは行かせてもらう。

「がっ!？」

ずしんと音を立てて、巨体が数歩下がった。
私のヴォーパルソードが、彼女を押し切った。

「おお！」

脇から発せられた私の気合が廊下に響き渡る。
その勢いで切り込み、ヴォーパルソードを振り下ろす。

「なあっ!？」

パシパはAGI値に関しては私と変わらないのだろう。私の攻撃を
あっさりとアックスで受け止めるが、彼女の足は床に沈んだ。

「ど、どんだけ馬鹿力なんだ……僕はミノタウロスの村では、男に
も負けなかったのに！」

どうやら彼女は極めて高いSTR値を持っていたようだが、それで
もマックス60では、私には及ばない。

私は体の内から湧き上がる闘争本能に身を任せることにした。
ヴォーパルソードを押し込むのをやめ、瞬時に体を回転、横から叩
きつける。

パシパは苦悶の表情で何とか受け止めるが、それでも体が引きずら
れるのを止めることはできない。

苦し紛れに振るったグレートアックスが、壁を粉碎する。

だが私の強固な甲冑はその飛礫を受けて一切怯むことはない。

どうしたことだ……決して体温の上がらぬ、この体が、熱い。
戦いを求めているのか、これは。

私は……今まで、まともに喧嘩もしたことのない人間だった。弱虫だったとは思いたくないが、冷めた人間だったのは確かだ。それがどうだ、今はこんなにも興奮している！

私はそのまま甲冑で体当たりを仕掛けた。

パシパはそれをグレートアックスの柄で受け止める。苦しそうな表情だが、しかし目は笑っていた。

「こんな力持ちがいたなんて……世界は広いや」

「そうか……降参しないか？ 命も尊厳も自由も保障するが？」

「あはは、面白いことを言うね……でも、仕事だからね」

まだまだ獰猛な笑みを崩さない彼女に、私も覚悟を決めた。

「そうか……恨むなよ」

「勿論だね」

私はヴォーパルソードを下げて構える。

彼女もそれを見て身構えるが――。

ひゅっ

「え？」

私の目に映るのは、汚れた廊下、薄暗い光を反射する床、燭台、驚き見上げるパシパ……。

そうだ、私は飛んでいる。

私の首は、飛んでいる。

「チェックメイトだ」

私の体は、自由になった左手で、パシパのグレートアックスを掴んでいた。

「あっ」

無防備になったパシパに、私は無慈悲に、私がデュラハンである証、首狩の大剣を振り下ろした。

ごんっ

「きゅう」

私のヴォーパルソードは、その平らな腹をパシパの頭に乗せていた。パシパは奇妙な声をあげてふらふらと数歩歩くと、ぱたりと倒れてしまった。

パシパが倒れこむと同時に、ペイモンが慌てて走ってくるのが見える。

私はヴォーパルソードを地面に突き刺し、天を仰いだ。

やれやれ、ともかくこの場は何とかなったか。

心地よい疲労感が、体の中をずっと駆け抜けていく。

私はため息をつくとき、とりあえず落ちてきた自分の頭をゆっくりと受け止めるのだった……。

4話 最後のバルバス

人間や獣人、エルフ、ドワーフ……あらゆる中立から善性に傾く、知性ある種族というのは、父なる時空神【オーデル】と母なる大地神【アーリマ】の間に産まれたという。オーデルは時間と力を司る神であり、アーリマは大地と知性を司る神でもある。

『ヒト』とくられる全ての種族は、彼らの祝福と恩恵を受け生活しているといってもいい。種族的なステータス傾向と、経験を積むことによって鍛えられていく心身の成長、つまりレベルアップは、すべからく神の御業である。功績、功德を積み、それがこの神々に認められたとき、彼らの加護によって肉体の成長やスキルの習得が可能になるのである。

そこに美のヘイルメス、戦いのアレスといった様々な神々が、その人の持つ個性や職業にさらに方向性を与える。オーデルとアーリマは種族としてのレベルアップ——人間ならばバランスよく、獣人ならば力と速さに偏る——を与え、ヘイルメスやアレスは各々を主神と定めるジョブ——ヘイルメスは感性と技術を司り、絵師、吟遊詩人、アレスは力と戦いを司り、戦士、剣闘士——に加護を与え、独自のスキルやアビリティ、ジョブレベル上昇に伴うステータスの増大を行う。

人々はこうして日々己を成長させていく。それは冒険者や騎士といった特殊なジョブから、一般的な農民や商人にまで共通する。加護を受けない人間は存在せず、例えジョブを持たなくとも、生きているというだけで、慈悲深いオーデルとアーリマは小さい子どもたちに加護を与えているのだ。

無論それは、魔物や悪魔と言われる存在にも例外はない。ただし魔物や悪魔は、他の種族とはその主神を異とする。

オーデルとアーリマの下には数多くの子どもたちが産まれた。

それはヘイルメスやアレスもそうであり、その子どもたち、今を生きる人や獣人もそうだ。

しかし、オーデルとアーリマはあるとき異形の子を成した。それが一眼巨人の【キュクロープス】や、五十頭百腕【ヘカトンケイル】という巨人であった。

この2人の神は決して邪悪ではなかったが、オーデルは醜い彼らを軽蔑し、憎み、迫害し、地の底に閉じ込めてしまった。そこはかつて神々の言葉でタルタロスと呼ばれ、今は古代の言葉でゴナールとと呼ばれる場所である。

慈母たるアーリマはその事実を悲しみ、彼らを助けるために一人の邪悪なる神を独力で産み落とした。

それが万物の怪物の神、【テュポーン】である。

テュポーンは母の願いを受けて産まれたが、その性質はアーリマが想像したよりも遥かに凶悪であった。

彼は門番たるオーデルとアーリマの子どもたちを殺戮し、キュクロープスやヘカトンケイルを開放したが、それに飽き足らずタルタロスで怪物たちを産み落とし、オーデルに戦争をしかけた。

アレスを中心として多くの神々がそれに抵抗したが、やがて怪物の群れに押されていく。

焦ったオーデルはアーリマに助けを求め、優しきアーリマはテュポーンを諭し、彼らにタルタロスの大地の全てを与え、代わりにオーデルたちには小さき大地、ガイアを与えた。これが後のソード・ラインである。

このときアーリマは二つの大地を繋ぐ門を開放した。それどころか、より多くの門を開いたのだ。

子どもたちが憎みあうのは仕方がないことだ。だが、そこに差別があってはいけない。

大きな争い、小さいいさかい。神々の壮大で滑稽な物語が数多く起こり、そして消えていった。やがて時代は移る。

アーリマたち神々の時代が終わると、そこには彼らの子どもたちだけが残された。

しかし、神々はいつも見守っている。

そう、小さき怪物たちも、父たるテュポーンと母なるアーリマの加護を受け、テュポーンの子である暗黒神オllバllゴア、大魔神ゲルジガたち、暗き神々の庇護の下にあるのだ。

それはデュラハンのこの身も例外ではない。

オーデルの加護がない代わりに、アーリマとテュポーンから加護を得て魔物としての力を増し、不死者の神である【エキドナ】の加護でデュラハンとしての力を増していくのである。

そして魔物の特殊なところは、あくまで主神アーリマとテュポーンの加護は魔物という存在全てに適用されるということだ。

さらに種族としてデュラハン、ジョブとして悪魔バルバス。

つまり他の種族よりも多く神々の加護を得られるのである。

それゆえに魔物は、人間や獣人が優秀な装備なくして成しえない、強大な力を手に入れることができるのだ。

もっとも攻撃性に偏り、癖の多いスキルやアビリティが多く、制約も多い。

人間や獣人のパーティーなどには、そういった点をつかれることで容易く敗北することもありえるだろう。

その点でデュラハンという種族である私は、極めて幸運だった。

デュラハンは元人間であり、知性、技術、不死性を兼ね備えた珍しい種族だ。中でも特筆すべきは弱点がないということだ。

同じように強力、むしろ一段二段は上の存在である不死者の王、『ヴァンパイアアンデッド吸血鬼』には、不死者共通の弱点、聖なる力、火の他にも流水や十字架、日光といった弱点が多い。

対してデュラハンは不死性を持つ割にその種族は悪魔、弱点は聖な

る力と強力な火だけであり、日中にも特に影響はない。
聖なる力と火に対しても、それをレジストする装備は存外多い。

デュラハンのステータス傾向は、頑強さや腕力に特化して、他の能力は低すぎず高くなく、という程度だ。

スキルは近接中心、アビリティは戦闘補助が多い。

不足といえば遠距離攻撃であるが、これは悪魔バルバスのジョブスキルで補えている。

自分で言うのもなんだが、結構完璧だ。

それもそのはず、私がデュラハンを選んだのは、補助さえしっかりすれば、ソロプレイをこなせる点からである。

フィロソフィアは巨大で難解なゲームだったから、ギルドやパーティーなど腐るほど存在する。

私は折角のゲームなのだから、人と違うことをしてみたいと思った。人間関係が面倒で最低限の人脈で済ませたかったというのもあるが、結果的にこうなっている以上、正解だったのだろう。

当面の問題は次の戦争イベントをどう生き残るかだ。

そこに必要なのは短期的にレベルを上げること。そして城の防備を固めること。デュラハンとして肉体を動かす経験を積むこと。このぐらいか。

そのためにはペイモンの力がある。

ゲームではペイモンが城関係のことは全て引き受けているような口ぶりだったし、周辺情報もペイモンが握っていた。

というわけで私はペイモンから話を聞こうと呼び出したのだが。

「どういう状況だ。これは」

目の前ではペイモンがその美しい顔を見せまいとするかのように、

必死に頭を床にこすり付けている。

隣ではパシパがぐいぐいと頭をペイモンに押さえつけられている。床で潰される胸に関しては目を背けることにした。

つまり、土下座、なのか？

フィロソフィアに土下座の文化があるとは知らなかった。

いや、そも日本のゲームだったな。こういった行動がこの世界がゲームではないと実感させてくれる……。

しかしいつまでも土下座をされているところは酷く居心地が悪い。これが土下座の狙いなのだとしたら、中々効果的といわざるを得ない。

私は大げさにため息をつく、玉座に座したまま話を聞くことにした。

「……で、2人は……もとい、ペイモンは何を？」

私が問いかけると、ペイモンは顔を上げた。

うるうると目が潤み、頬を赤らめ、今にも泣き出さんばかりの表情だ。

彼女のような美女にされると、えもいわれぬ罪悪感と、妙な男性的興奮を覚えてしまう。

私は鉄の自制心で優しく彼女を促した。

「はい……今回の件、私の不徳のいたすところです……」

「悪魔に不徳も何もないんじゃないっ……！」

隣でからかうようにいったパシパの牛の尻尾をペイモンがつねりあげた。

とても痛そうだ。

「……それで？」

「は、はい。失礼しました。ヒロ様が前代のバルバスであったジョユ……【強き呪いのジョユ】を倒したのが10日前のことです」

10日前か。

私は急にヒロになってしまい、正直時間の感覚は曖昧だ。

だがこれではつきりした。

これは私がフィロソフィアでデュランになったばかりの頃、ということだ。

確かに脳裏に思い浮かぶ、中位の『ドルイド』職の老人を切り倒した私。

ただ恐ろしいことに、それはゲームの画面を思い起こしているはずなのに、現実にはデュランの目線で思い浮かぶ。

奇妙だが、私のフィロソフィアのプレイ記録は全てヒロとしてのものに置き換わってしまうらしい。

便利ではあるが、いやがうえにも私の現在を突きつけられる。

「私はその事実を、宝物庫の番人であるパシパちゃんに伝えていなかったのです。失態です」

「まあ、そういうことなんだ、ヒロ……さん？」

「好きに呼ぶといい。呼び名にこだわりはない」

私がそういうとパシパは意外そうに目を丸くした。

「なんだ？」

「うん……随分気安いなと思って。前のバルバスは最悪だったからさ」

パシパは表情がころころと変わって見ていて楽しいが、どうやらこの顔を見るに、本当に最悪だったのだろう。

「さて、私はあっさりと切り倒してしまったからよくわからないな。どんな奴だったんだ？」

「うん……前のゴシユジンサマ、あいつはね、呪いをかけてきたんだ」

「呪い？」

呪いといわれて思い浮かぶのはドルイドの得意分野、《呪い／カーズ》だ。

魔法には幾つか種類があり、例えば有名なところでは攻撃魔法、防御魔法、補助魔法、信仰魔法などがある。

例としてあげたものを見れば分かるだろうが、魔法は基本的には戦闘用だ。それにあてはまらない特殊なものの一つが、このカーズだ。カーズをかけられた対象はネットで『条件縛り』と呼ばれた効果をかけられる。

魔法の使用禁止、物理攻撃の禁止、会話の禁止（一定時間商人や町人との会話を禁止、パーティーでのチャットも制限される）など……相当強力だが、同時に発動にも多くの条件があり、プレイヤーの間ではあまり人気がなかった。

カーズを専門に使うジョブといえばやはりドルイドだが、基本ステータスが涙が出るほど弱いために、まずパーティー専用プレイ専用のジョブだ。

ジョユとやらには悪いが、デュラハンを初めとするアンデッド系種族には、呪いはかかりが悪い。呪いや疫病への耐性が初期値でも人間の倍はあるからだ。

「あいつ……ジョユのやつにこの近くで出あったのが運のつきだったんだ。僕がかけられたのは《門番／ゲートキーパー》だった」

なるほど、門番の呪いは、ドルイドがよく使うカーズスペルの一つ

だ。

プレイヤー

フィロソフィアは、PKが許されたゲームだが、PKとして特徴的なのは、相手の『ハウス』或いは『ホーム』といった本拠地に攻め入ることができたということだ。相手の本拠地を落とせば、そこに保管されているアイテムの20パーセントをランダムで奪うことが出来た。そこには、『善性』か『悪性』かといった、『クオリティシステム』という、プレイヤーが善悪どちらに傾いたロールプレイをしているかということも大事な要素になっていたために、プレイヤー同士の戦闘は善なる軍と悪なる軍の多人数プレイになりがちであった。

ともかく、本来はドルイドがプレイヤー同士で争うときに、『ホーム』や『ハウス』に特定のモンスターを特定のポイントで必ずエンカウントするように仕向けるスペルだったのだ。

それがこのイベントの設定上使われていたということだろう。

私は当時、ゲームでしばらくは宝物庫に行かなかった。

だからパシパには会っていなかったのだろうが、図らずもこれでゲームとは違い、この世界は現実で、私の行動で結果が変わったことが証明されてしまったわけだ。

「厄介な呪いだよ。僕はあのジョユが死ぬまであの宝物庫の中と扉の前までしか動けなかったんだ。それにペイ姉に至っては、奴隷のように使っててさ、ペイ姉はこの城の図書室にゲートキーパーをかけられたんだ。あいつが欲しい情報が得られるまでずっと閉じ込めて本を読ませるんだ。見つからないと怒って《呪毒／ポイズン》をかけるんだよ！」

パシパはえらく憤慨している。確かに出会ったときのペイモンはぼろぼろで、それに私も多少憤りを覚えたのだが。

それにしてもパシパとペイモンは仲がよかったのか。

そういえばジョユも「50年ぶりの客人」とかいていた気がする。

長い間2人で助け合ってきた関係、ということか。

「いいんです、パシパちゃん、私は『バルバス』に使える悪魔ペイモン。それは定めなのです」

そういつて笑うペイモンはどこか寂しい、ということもないようだ。その笑顔には曇りがない。

同じように思ったのだろう、パシパも訝しげにペイモンを見ていた。

「私は新しくヒロ様という主を得ましたから。ヒロ様がお優しい方でよかったです」

「……ええと」

「よかったね、ヒロ。ペイ姉みたいな人に惚れられて」

「やだ、パシパちゃん。そんな、惚れるだなんて、私はそう、僕として、忠実な部下として……」

待て、出会って10日なのだろう。何故そんなベタな反応が出るのだ。

くねくねと動き出したペイモンを見て、パシパの頭を掴んで耳を寄せる。

「何だ、何でそんな話しになる？」

「ペイ姉ってさ」

パシパはにんまりと笑って見せた。

「東方系のイケメンに弱いんだって。それでクールならなおよし。魔物だから強いのも絶対条件だね。まず間違はなく、ヒロは颯爽と助けに現れた王子様だよっ！ いよっ、優良物件！！」

「い、イケメンって……こっちにもその言葉あるのか」

確かにキャラメイクで多少「盛った」ことは認めるが……もしかしたら前のジョユと比べて私が普通すぎるから、良く見えてしまっているのかもしれない。

「いいじゃん、それでもさ。可愛い娘に惚れられて嫌な気はしないでしょ。それを本当の愛に昇華させればいいのさ!!」

「君は簡単に言う……」

まあ好かれるのは悪いことではないだろうが、ここからがっかりされれば愛想を尽かされてしまうのではないだろうか？

正直以前ゲームではペイモンに世話になりまくっている。ペイモンなしでどこまでいけるか分からない。だが、このような打算でいて欲しいというのも、何か違う気がする。

私のため息をつくとき、丁度ペイモンも正気に戻ったようだ。

「……何はともあれこれからよろしく頼む、でいいのかな？ ペイ

モン」

「はいっ！ ああ、なんてお優しい……!」

じいんと感動をかみ締めるような彼女に、私は何もいえなくなる。ジョユとやらはよほど嫌な奴だったんだろう。置き土産まで嫌なものを残してくれたものだ。

しかし気を取り直して、仕事を進めよう。彼女の未来もどうやら私の肩にかかっているようでもある。

「では、まずはこの城を建て直すことからはじめようか。私の城には、少し暗すぎるな」

「そうですね。以前のジョユはその辺には全く無頓着でしたから」

「折角のバルバスが、宝の持ち腐れだな」

だからこの私なんかにあっさりと倒されるのだ。

私はデュラハンになったばかりで、さらに人間だったころのスキルやアビリティのほとんどをアンデッドになるために失っていた。

それでも私が勝てたのは、奴がこの城に大した防備を敷いていなかったのと、その素体がドルイドという貧弱なジョブだったからだ。

ジョユはバルバスとしての能力に胡坐をかいていたのだろう。

バルバスのスキルは強力。しかし、それを使うまで生きていることが、ひ弱なドルイドにはできなかった。

ジョユは恐らくレベル上げなどしていなかった。研究に没頭していたのであろう。大悪魔は初期ステータスから強いが、それでも中堅プレイヤーになればそれだけでは勝てない。

そもそも『バルバス』というのは、悪魔の中でも上級職、つまり、高レベルなどが条件にある強力で成長しにくいジョブだ。

これはゴナールールの『大悪魔』シリーズと呼ばれ、相当に強力なことでも有名だった。以前の『グラシャラボラス』もその一つだ。その強さから、現実これら大悪魔のジョブは、1ジョブに1プレイヤーが原則である。

それゆえに、ほぼ幻の職業と化しており、他プレイヤーからは目の敵にされてしまったのだが……。

問題はその条件だった。

最盛期100万人ともいわれたプレイヤー人口で、未だ空席の大悪魔ジョブすら存在したという事実。

それは、条件の難解さである。幾つか条件が世に知られてしまった大悪魔ジョブがあったが、その条件はいつの間にか変更されていたという徹底振りだった。かくいう私もバルバス以外は知らない。そして、バルバスにあっても偶然手に入ったようなものだった。

私がこの城に来たのは偶然だった。

ランダムにプレイヤーを抽出するというフィロソフィア独特のイベントクエストを受け、『大悪魔バルバス』のクエストを開始したのだ。

何人ものプレイヤーが城内をさまよっていたが、数時間経っても誰もクリアできない状態が続いていた。

城内のモンスターはさほど強力ではなかった。

私は既にデュラハンであり、レベルは低かったが前ジョブ『魔法剣士』のジョブレベルは高かったため、最も奥まで進んだプレイヤー群の一人だったといえるだろう。

このイベントはランダムに選出されるため、パーティーを組むものが全くなかったのも要因ではあるだろうが。

そして多くのプレイヤーがとあるユニークユニットと戦闘を行っているのを目撃した。

話を聞いてみると、それを倒すと『知識の書』というステータス上昇アイテムが手に入ることだった。ステータス上昇アイテムは超貴重品である。

フィロソフィアでは『基本ステータス』は10項目あるが、1レベル上がって全ての値が上がるわけではないのだ。上がらないものも多い、というか、上がらない場合のほうが多い。それだけに、ステータスが1上がると戦闘などのダメージ計算式も大きく変わってくる。

私も欲を出して、なぜか何度倒しても復活するが、アイテムは一度しか落とさないというそのユニークモンスターと戦うことにしたのだ。

戦闘開始して画面に現れたのは、物悲しげな表情で、奇妙に毒々しい首輪をつけた半人半獣の魔物だった。

簡潔に言えば、私はそれを倒さなかった。

何だかあまりに不幸そうな姿だったので、逃げてしまったのだ。

そして、結果的にそれが『大悪魔バルバス』のイベントを進める条件だった。

その魔物——ペイモンはなぜか感激し、私を【呪いのジョユ】のところまで連れて行ってくれた。

後は簡単であった。呪いに強い耐性を持っている私は、肉弾戦で押し切った。

ステータス値でも圧倒していた私は、ソロであっさりとジョユを倒した。

ジョユは『大悪魔バルバス／ソロモンリング』をドロップした。

それを拾ったとき、私は驚いた。指輪は眩しく輝き、私のステータスを染め替えていく。

新しいバルバスの誕生であった……。

「ペイモンには悪いが、私は新たなバルバスなど生み出させるつもりはない。バルバスは私の代で最後になる」

「ヒイロ様」

フィロソフィア内でのアンデッドは、たとえ何百年経とうとも、死ぬことはないという。

ならば私も、寿命によっては死ぬことはないかもしれない。

前の世では、親に死なれ、友人に裏切られ、恋人にも裏切られ……せめてこの世界では、自分の力で切り拓いていきたいものだ。

私は決意を新たにす。

私はもう新山英雄ではないのだ。

私はバルバスのデュラハン、ヒイロ。

不死者で大悪魔。

闇の英雄。

「まずはこの城をこのバルバスに相応しいものに変えましょう」

こうして後に偉大なる悪魔と呼ばれる男の、不世出の物語がスタートしたのであった。

5話 賢いデュラハンはお買い得

とりあえず、レベル上げを兼ねて、身体に慣れるために戦闘に出ることにした。

城はペイモンに任せて、以前の記憶を頼りに、レベル上げスポットに行ってみることにする。

幸い城の周辺は、凶悪な魔物は存在しないし、私はソロプレイの経験も多い。

私がペイモンに見送られ城の外に出てみると、そこは正しく異界だった。

現実の世界の排気ガスなど比較にもならない濁った空気。

スモッグなど話にもならない黒い雲。

不気味に捻じ曲がった樹木。どこかおかしい動物。

荒れ果てた大地。

今私が歩いている道も、乾燥し、ひび割れている。

これがゴナール。神々が悪意をもって創り上げた世界、かなんとも禍々しい。

「でも僕がいたところはもつとましかったよ。こんなに不気味な木なんて生えてなかった。ほら、あれなんかどう見ても顔だね、あは」

こんな禍々しいところでも、この娘は明るい。

それに救われるような思いもあるが、やっぱり釈然としない。

「ずっと聞こうと思っていたのだが」

「ん？　どうしたの？」

パシパは肩にかついだグレートアックスをくるくると回し上機嫌である。

「どうしてついてくる？」

「どうしてって……僕、迷惑、なの？」

この娘の潤んだ目と上目遣いは果たして天然なのか、計算なのか。ともかく内心の動揺を押し殺し、私は話を続けた。

「単に聞いてみただけだ。迷惑ということはない。心強いと思ってるが、折角自由になれたのに、故郷に帰らないのかと思ってね」

故郷、という言葉でパシパは嘘泣きを止めた。

今度は露骨に嫌そうな顔を見せる。

「やだっ！　だってあの里の雄どもときたらすぐに交際だ結婚だつがいだ子どもだって、助平ばかりで！」

「それは、なんと、まあ」

男なら当然というべきか、はたまたここはきっぱりと切り捨てるべきか。

「それに僕はヒト型のこの姿が好きなんだ。お母さんも同じだしね。でも里の雄は皆牛頭でマッチョでさ、僕より弱くても、あれに迫られるとちよつと怖くて」

「うんそれはそうだな」

そこは完全に同意だ。

フィロソフィアの完全攻略本（公式版）では主だった魔物の絵姿が載っていたが……なぜかミノタウロスは白目で口から長い舌と涎をたらし、かなり怖かった。狂乱といった感じだ。ネットで狂牛病と呼ばれ、攻撃を受けると疫病に感染すると噂されたものだ。

「それに」

パシパは顔を私に寄せてきた。

私は頭を脇に抱えている。その脇に顔を寄せるわけだから。

豊満な胸が私の目の前まで降りてくる。

顔を赤らめざるを得ない。

私は頭を後ろ向きに抱えなおした。

それを見てパシパはけらけらと笑った。

「ヒイロは面白いよ。僕が見てきた魔物や魔族とかの間では、抜群に」

「ん？」

「母さんが言ってたんだ。優秀な雄は強いだけじゃなく、優しかったり勇敢だったり、何か一つ雌を惹きつけるものを持ってるんだって」

強いのは前提条件だけど、とヒイロは付け加えた。

ということは、俺は何かを持っているということか？

「ヒイロは持ってるよ。優しいみたいだし、賢いみたいだし、強い。それに魔物では珍しいよね。城の防備とかアイテムとか装備とか、気にするの。そういうのは何か、人間みたい」

「死にたくはないからな。臆病だからこれくらいしないと安心できないのさ」

それを聞いてパシパは意外そうな顔を見せた。

「臆病？ ヒイロが？」

そうだろう、私は臆病だ。

「そうだ。私は臆病だから、常に万全を尽くしたい。手を抜いて、何度も失敗して、危ない目にもあってきた」

それに、パシパは前提を間違えている。

「私は元々人間だ」

「あ、そうか」

そこで私は目的地に近いことを悟り、ヴォーパルソードを引き抜いた。

だからだろう、その音で気づかなかった。

パシパが重要なことを口走ったのを、聞き逃してしまったのだ。

彼女は不思議そうな顔で、こういった。

「あれ、デュラハンって、人間だったときの記憶、失うんじゃないか
ったっけ？」

私とヒイロが向かったのは、城の近隣にある沼地だ。

ゴナールにおいて、現れる魔物のレベルが前後10レベル
近く開くこともざらだ。

あまり高いレベルと連戦すれば私であっても危ういが、この沼の周
辺は魔物のレベルが安定しており、いいレベル上げスポットだった

のだ。

今まで私の知識と現実には齟齬は見られないから、これも恐らく大丈夫だろう。

私の現在のレベルは、ステータス画面がないのでなんともいえないが、当時ゲームでは15前後だった気がする。これは通常のヒューマンの戦士ジョブで言えば、25〜35ぐらいに相当する。中級プレイヤーレベルだろう。私と打ち合えるパシパも、それに近いものがあるはずだ。

この沼のヒューマン推奨レベルは15〜20だったはずだから、2人で組んでいればまず安全な場所といえる。

パシパは、不気味な木が生え、どす黒い沼だらけの不快な湿地ながらも、どこか楽しそうに眺めている。

「城から出たの久しぶりだよ。3年ぐらいあそこにいたんだもん」

「そんなにかな？」

「ペイ姉がいなかったら狂ってたよ。ご飯も着替えも水とかも全部やってくれたんだ。あそこで50年って……酷いよ」

「確かに、な」

ペイモンは強力な悪魔だ。

悪魔は狂うことはない。強靱な精神力があるか、或いは既に狂っているか、そうでなくば悪魔などやっていられない、と、このゲーム内の書物に書いてあった。私は例外としても、ペイモンはあのように普通の性格で、あそこに50年も閉じ込められていたのか。

「だから、ヒイロに惚れても無理ないんだよ」

「だからその話は――」

私が剣を構えたことで、パシパもグレートアックスを素早く構えた。伊達に村一番の強さ、とうわけではないか。

「どうしたの、ヒロ？」

「沼地が蠢いた。何か来るぞ」

パシパも沼に目を向けると、確かに沼が全体的に波打っている。

やがて波紋が大きくなり、その波紋の中心から、ぬっと白いものが出てきた。

それは骸骨であつた。

様々な装備、騎士の鎧であつたり、戦士の革鎧であつたり、また剣を持ったり、槍を持ったり、そんな骸骨が、次々と沼から上がってくる。

そんな異様な光景を見て、パシパは眉をひそめた。

「アンデッド、スケルトンだね」

「同類か。だが、レベルアップにはちょうどいい」

『スケルトン骸骨兵』。基本的に白兵戦しかできず、特殊な能力は無い。

スケルトンは基本ステータスこそ高いが、ステータスで上回ってしまえば、怖さを感じる相手ではないのだ。

とりあえず十数匹。

私は一番手前にいたスケルトンに、ヴォーパルソードをたたきつけた。

がしゃん

ばらばらと碎け散っていく骨の束に、私は自信を深めた。

やはりこの身体は、並のものではないようだ。

未だ体が勝手に動く、というよりは、記憶に引っ張られているよう

な違和感はあるが、それでも戦闘に支障は無い。
スケルトンは丁度いい慣らしになるだろう。

その後ろにいたスケルトンが剣を振りかぶり、私をタルタロスの深遠に引きずり込もうとする。

それは強大なグレートアックスの横殴りの攻撃によって防がれ、その強力すぎる一撃は剣を叩き折り、スケルトンを粉みじんにした。
……われながらよくあれを受け止められたものだ。

それを見て警戒したのか、スケルトンたちは私たちを囲むように布陣する。

パシパはそれに呼応するように、私と背中合わせにくつつく。

「これが人型の、『修行』って奴だね！」

「そうだな、多くの魔物はこんなことしないのだろうか」

魔物の世界は弱肉強食であるという。

しかし一部の賢い魔物はレベル上げを行う（という設定だった）が、ほとんどの魔物はそうではない。

そこに私の付け入る隙があるのだ。

私たちにいっせいに群がってくるスケルトンに、私は手の平を向けた。どうやればいいのかという知識はない。

しかし、戦闘と同様に、私の身体がそれを教えてくれるのだ。

手のひらに体からエネルギーが集まり、それが抜け出ていこうとするのが感じられる。

行ける。

「《遍く焼き尽くせ／ファイアボール》」

私の言霊と共に手から発射された火球が、数匹のスケルトンを巻き込んだ。

焼かれたスケルトンは一瞬にして灰に変わる。

本来は単体にしか使えないスペルだったが、どうやらここが現実であるだけに、そのような『常識』は通用しないらしい。

スケルトンたちに出来た穴に突っ込み、ヴォーパルソードを振り回す。

武芸の心得など剣道三段しかない私だが、デュラハンの膂力はそれだけで私を嵐に変える。

本来そこそこ頑強なはずのスケルトンの体は、紙でも切り裂くようにばらばらになっていく。

「ヒイロ、魔法まで使えるんだ！ やるね！」

それを見て負けじとパシパも突っ込んでいく。

肩からの突撃、ミノタウロスの攻撃スキル『ぶちかまし／タツクル』だ。

数対のスケルトンを巻き込むと、砕けた骨が宙を舞う。

相手の中心で止まると、その巨大なアックスの柄の端を掴み、ぐるぐると回し始めた。

「えええええいっ!!」

かたかたという音はスケルトンの悲鳴か。

その後は正に『作業』だ。

私とパシパが暴れまわると、十数体はいたスケルトンが全て砕け散っていた。

無邪気に勝利を喜ぶパシパを見て少し和むと、私はスケルトンたちが落とした装備を腰の『強欲の袋／グリード』に放り込んでいく。これは高級だが多くの商店で買えるアイテムで、マジックアイテムである。

この中は異空間になっており、見た目と違いかなりの重量がここに収まるようになっていいる。

パシパはこれが珍しいのか、一緒にしゃがみこんでまじまじと私の作業を見ている。

「すごい、そんなアイテムあるんだ！」

「人間の冒険者では結構普通のアイテムだよ」

「ふーん、やっぱりヒイロは賢い」

感心したように頷いた後、パシパはちよつと頬を染めて上目遣いに私を見た。

思わず私はちよつと後ずさる。こういった女性的な表情は魅力的だが苦手だ。

「ど、どうした」

「へへへ」

その幼い顔を笑顔でいっぱいにして、パシパは頷いた。

「ヒイロ、僕のつがい候補にしてあげるよ」

私は心臓が跳ね、邪な考えが頭をよぎると共に、なぜか怖い顔のペイモンを幻視したのだった。

6話 純情魔法剣士

パシパの大胆な発言の後には一悶着あったが、私達はその後も沼地を回り、スケルトンの群れを狩り続けていた。

初めは10体近いスケルトンとの戦闘が続いたが、やがて数対に減り、ついにはエンカウントすることもなくなってきた。

周辺を見回しても、モンスターの姿はない。沼に漂っていたどこか墮落した空気も、今は感じない。

私がヴォーパルソードを地面から抜くと同時に、私のアイテム回収作業を興味津々に見守っていたパシパが、くつと体を伸ばして言った。

「うーん、ちよつと物足りなかったかな」

「そう、だな。弱かった」

スケルトンは弱い。並の冒険者なら苦戦するかもしれないが、この身は上位悪魔のジョブと悪魔の体をもつ。

下位アンデッド程度に遅れはとらない、ということか。

生憎と私の努力で得た力ではないが、そこは命をレイズしたギャンブルということで勘弁してもらいたい。

「もう出てこないみたいだね？ 帰る？」

「そうだな、そろそろ戻るか。ペイモンにばかりさせるのも悪い」

ペイモンに留守番をしてもらったのは、何も城を空けたくないという理由からではない。

彼女には私の荷物の整理と、ジョユの荷物のリスト化をお願いしたのだ。

私が何をゲームから引き継いだのか、これはとても重要なことだ

し、ジョユも何かを研究するためにバルバスとなったのならば、有用なものがあるだろう。それに、ゲームでは一瞬でアイテムリストが出来たが、ここは現実で、ステータス画面もコマンドも存在しないのだ。

こういった細かい作業が大事になるだろう。

それに、体の慣らし、アイテムの回収、魔法の使用。いずれの条件も既に満たしており、最早外にいない必要はない。

危険は少ない場所を選んだが、ゴナⅡダールーはそんな甘い場所ではない。

いつ何時危険が迫るか分からないのだ。

私がゲームでプレイしていた際にも、私を含め、何人ものプレイヤーが突然のエンカウントに泣かされている。

「現実よりシビア」

確か売り出し始めたときの、フィロソフィアのうたい文句だ。

こうだろう、とか、ああだろう、という憶測や推測は通用しない世界、ということを端的に表した言葉だ。

そこでふと私は気づいた。

どうして私はこんな場所に何の準備もせずに出てきたのか。自分で思ったとおりに行動するならば、もっとアイテムを集めてから城を出るか、ペイモンも連れてくるべきだっただろうに。歩みの止まった私を、パシパが不思議そうに見つめる。

「どうしたのさ、ヒイロ？」

元々青い私の顔は、もう少しだけ青くなったかも知れない。

パシパ、君には分からないのか？ この下から感じる、地響きを。……なるほど、これが『フラグ』、というやつか。

しかし私とパシパが振り向いたのは、ほぼ同時だった。背後から大きなさざなみの音がした。

汚泥がざぶんと縁により、何かが沼から現れたことを示した。

私たちの目に映ったのは、スケルトンが頭を出しているところだった。

それを見たパシパはすぐにアックスを構え、勢い勇んでそれに飛び掛ろうとしたが、彼女は危うく思いとどまった。

それはそうだろう、出てきた頭が、明らかにでかい。

本当に、でかい。

やがて全身が見え始めると、それはもうでかい。私もパシパも大柄だが、2人が肩車でやっと頭が並ぶ。

それほどの大きさだ。

パシパはあんぐりと、肩を伸ばした姿で口を開け、呆けていた。

「な、何……これ……」

ざぶざぶと泥を掻き分けて上がってくる巨大なスケルトン。

どうやらこの沼は信じられないほど深いようだ。

もしかしたら、底なしなのかもしれない。

正に『深淵に引きずり込むもの』の名に相応しい。『太陽の戦争』のクエスト後、一国に制圧されたゴナール地の地にて起こるイベントクエスト。

制圧した地域に現れた巨大な骸骨兵を退治するというものだ。

イベント条件はただ一つ。

エリア内のスケルトンを全滅させること。

私のミスだ。知っていながら、忘れていたとは！

私はヴォーパルソードを抜き、正眼に構えた。

「パシパ、来るぞ！！」

巨大スケルトン、『巨人の骸骨』。ジャイアントスケルトン

その丈は目測4メートル。

圧倒的に骨太な骸骨に、立派な銅色の板金鎧を見につけ、左手に円形の盾、右手に曲刀を持っている。

曲刀一つとっても私より少し大きい。

あたれば即死は免れないかもしれない。

思えば私は、この世界でまだダメージを受けていない。

ゲームなら自分の防御力と相手の攻撃力からある程度計算は出来たが、この世界でそれが通じるかはわからない。

ジャイアントスケルトンのレベルは分からないが、イベントクエストならば私やパシパに連動しているはず。

もつとも、その点は重要ではない。このモンスターの特徴は、圧倒的な攻撃力だ。レベルに関わらず、どんなユニットよりも腕力で勝る。

特殊な攻撃はない。だが、その普通の攻撃に何度も耐えられるようなプレイヤーは存在しない。

ジャイアントスケルトンは腰までを泥から出すと、早速巨大な力の象徴を振りかぶった。

パシパと私が咄嗟に左右に分かれると、その中心を曲刀が打ち砕

いた。

ばらばらと舞い上がる泥土に、私の鎧が汚れた。

「……何とすさまじいっ！」

泥が爆弾でも爆発したかのように飛び散り、爆心地はパシパがして見せたものの数倍は深い穴が開いている。パシパは硬い地面でやったが、ここは重い泥。それだけでも臂力の差は明らかだ。

パシパも青い顔をして少し長めに距離を取る。相手の間合いから外れようとしているのだろうが、あの巨体が相手では効果は薄いだろう。

私もパシパも足は遅いほうだ。逃げ切れまい。

「く、このお！」

パシパに向かって繰り出された横薙ぎの攻撃を、彼女はあろうことかそのアックスで受けた。

相手に合わせて振りかぶったのである。獣人に連なるものらしい勇敢さだが、いかんせん無謀だ。

轟音。

周辺の黒い木々から、不気味な鳥たちが飛び立つほどの衝撃。そして金属音。

2つに別たれたアックスが、音もなく沼に沈んだ。

パシパの体は斜めに宙を舞い、私は慌てて彼女の下に滑り込んだ。

ミノタウロスの豪腕をねじ伏せ、そのまま打ち上げるとは！

凄まじい力だ。

腕力のステータスではやはり全く歯が立たないか。

幸いにパシパは意識はしっかりしていたが、ダメージは深いようだ。アックスを盾にしたとはいえ、衝撃は完全に彼女の身体を突き抜けている。

その女の子にしては大きい身体は、今私の腕の中で少しだけ震えていた。

痛みか悔しさか。彼女はその震えを隠そうとしないまま、気丈な表情で私に問いかけてきた。

「ごめん。どうする？」

「……やるしかあるまい。私たちでは逃げ切れないだろうからな」

パシパは私の肩を掴んで立ち上がると、アックスの柄を捨て、その豪腕を武器として構えた。

「ミノタウロスには掟と誇りがある。足手まといにはならないよ。僕をおいていってくれば、ヒイロは何か」

「なるものかよ」

私は彼女の肩を掴んで無理やりさがらせた。

先ほどの攻撃でダメージが入っているのは分かっている。彼女は案の定、ぺたんと尻餅をついた。

「私がやる」

左手に抱えた私の頭は、ちらりとパシパの驚愕の表情を捉えていた。

どうしてとか、何でとか、聞きたいのだろうか。

私はそれに応えず、飛びのいた私たちに向かってくる、巨大な怪物に目を向けた。

正直に言えば怖い。

私は現代日本人なのだ。命のやり取りなどしたことはない。

しかし、ミノタウロスとは言え、見た目は完全に女の子だ。その娘を残して逃げるなど、格好が悪すぎるじゃないか。何しろ努力なく、強いて言えばプレイ時間のみを代償として得た力だ。これくらいでなくてどうする。可愛い娘くらい、守ってやりたいじゃないか。折角こんな私と仲良くしてくれるというんだ。

やってやる。

そうだ。

それに。

身体が熱いんだ。

私の身体が、熱い。

悪魔の加護か、魔物の血か。

デュラハンの穢れた魂なのか。

戦いを求めるんだ。私の、奥底が！！

「うおおおおお！！」

生まれて初めての大声に、大気が震える。

私の頭は左手に抱えているが、右手のヴォーパルソードは天高く突き上げている。

これは戦いの銅鑼だ。

私の日本人が塗りつぶされていくのが分かる。

そうだ、私は魔物なんだ。

魔物は別に特別な怪物のことではない。モンスターゴナⅡダⅡルーの子どもたち。

忌まわしきテュポーンの落とし子たち。

その加護を受けしもの全てを魔物と呼ぶのだ。

私の健全で不完全で未熟な心も、この世界、フィロソフィアの色に変わっていく。不健全で、完全で、成熟していく。

ああ、父なるテュポーンに加護よ、あれ。

目の前で振りかぶられる曲刀に、私がおびえることはない。

私は魔物であり、大悪魔、バルバスである！

「《遍く暴力はこの腕から／アタックアップ》！」

私がスペルを唱えると、魔力が言霊に宿り、言霊が私の周りを回る。赤い光のラインが私に絡みつき、私の鎧と肉体に赤く鳴動する光の線を残す。それは正に血脈のように鼓動を打ち、私の筋肉を盛り上げさせた。

そして私のヴォーパルソードと曲刀が打ち合う。

火花が散り、豪風が巻き起こったが、私は幸いに、足が脛まで泥に埋まるだけですんだ。

パシパはどこか幻想的なものでも見るように私を呆けて見つめていた。

それはそうだろう、4メートルの怪物と、2メートルの首なし騎士の剣が、絶妙な力の拮抗を見せているのだ。

私は見事、剛剣を止めて見せた。

アタックアップは攻撃力20パーセント増しであるし、単純な腕力では負けるかもしれないが、ただの曲刀とヴォーパルソードでは攻撃力が違う。

トータル的な攻撃力では互角に並んだはず。

パシパも腕力ではそこまで負けていないだろうが、生憎と武器が弱かった。

それに損耗が上がれば攻撃力は下がり、やがてあのように碎けてしまう。

そこで生きてくるのがこのヴォーパルソード。

半ユニーク武器であるこれは、威力もそこそこだが、特性としてはその頑丈さだ。

信頼性は間違いない。少なくとも、この戦いの間は持つだろう。

私は刀を横に弾き飛ばすと、全力でその刀の上に飛び上がり、相手の腕を伝って駆け上がった。

ジャイアントスケルトンは私の速さにも全くついてこれていない。

「うおおおおお！」

肩口で飛び上がり、真上に剣を振りかぶる。

この身はデュラハン。

首狩り騎士、死神のデュラハンだ。

その暗き仮初の命、貰い受ける。

首に近づくにしたがって、私は奥底からの衝動を感じる。

私は素直にその欲求に従い、剣を向けるべき場所を知った。

「その首、よこせ」

『死の予言／ヴォーパル』

闇の騎士の一撃が、寸分変わらず白い首の骨に激突した。

通常の剣撃ではありえないような音が起き、キングスケルトンはいやいやするように顔を動かしした。

悲鳴を上げているのだ。骸骨が。

ヴォーパルはデュラハンの固有スキルだ。

その能力は、多大なスキルポイントを消費しての、ヒト型ユニットへの絶対クリティカル権。

2.5倍になった私の一撃は、ジャイアントスケルトンの首に大きな傷を残した。太い骨がごっそりと抉られている。

ただしそこは巨大モンスター。すぐに反撃に転じてくる。

着地した私に怒ったスケルトンの盾での押しつぶしが迫ってきた。

私は観念して、それをまともに受けることにした。どうしようもない、どうせいつかは食らうのだ。ここで経験しておくのがいいだろう。

視線を塞ぐほどの円形の金属板。

衝撃が身体に走る。

「がっ！」

「ヒイロっ！」

私はその圧力に思わず声を零し、パシパも悲鳴をあげたが、デュラハン種のステータス特徴はやや低めの万能にして、頑強で剛力。

痛みはあるが、『屍人の鎧／デッドアーマー』の防御力もあって、

私はそれに耐え抜いて見せた。今度は腰まで泥濘の中に沈んだが、無理やりそれを抜け出す。

盾も無理やりどかし、剣を持った手の平から魔法の光を溢れさせる。

「《火炎の砲撃／フレイムカノン》！」

ファイアボールの大きさは私の頭程度しかなかったが、今度は私の少ないMPの3割を削る中級スペルだ。

火炎放射器のような炎が、キングスケルトンの足の骨を焼いた。効果は抜群だ、というやつだ。

キングスケルトンは自重を支えきれず、その場に膝をついた。

そのときには、私は再び飛び上がっている。

半分はアンデッドのような身とは言え、種族的には悪魔であるから、痛覚は鈍いものの、はつきりとある。その上ダメージか、身体も重い。

だが、私の後ろにいるパシパに恥ずかしいところは見せられない。私も男の子、ということだな。

どうせなら、派手に決めてやろう。

私のヒューマン時のジョブは、『魔法剣士』。それが、多才なデユラハンの正体。

残りのMPのほとんどを持っていった光の束が、ヴォーパルソードに巻きつく。

一瞬炎のベールに包まれた後には、炎を宿し赤熱化した大剣が現れた。

ありがとう、ジャイアントスケルトン。君は私に、現実の痛みを教えてくれた。

戦いの痛みと、親しくなったものが傷つけられる痛み。

どうしても孤独だった私は、新しい世界に来て、孤独でなくなつた。だから覚悟しよう。

守ると。守るために、変わると。

さようなら、ジャイアントスケルトン。

「《英雄の火剣／フレイムソード》」

赤い閃光が、スケルトンの頭部を焼き、断ち切った。

巨大な炎の剣が、頭部の次は金の鎧、その中の胴から足へと侵略していく。

やがて巨大な骸骨は、その全てをかち割られ、その活動を永遠に停止し、沼の底にゆっくりと沈んでいくのだった。

着地した私は、MPが尽きた疲労感と戦いながら、なるべく優しい声でパシパに声をかけた。

「終わったぞ」

パシパは尻餅をついたまま、私を呆然と見上げていた。

……どうでもいいが、腰巻と胸当てがぼろぼろで、目のやり場に困る。

加えて足も閉じて欲しいものだ。

私の内心の葛藤など分らないパシパは、その扇情的な格好のまま、小さい声でぽつりと呟いた。

「……ほ、本気になっちゃうかも」

「……まあ……元気ならいいんだ、うん」

とにかく私は立てないというパシパを片手で肩に担ぎ上げ、沼を後にすることにした。

最後に左手で自分の頭を回し、沼地を見渡す。

静かになった沼地には、音がない。

それを鎮魂歌ともって、心中で私は黙禱を捧げた。

人であった自分に。

そして、故郷に。

私は3秒だけ目を閉じ、また歩き始めた。もう、私は昨日までの私ではないのだと、背中で語ったつもりだった。

だったのだが……。

またまた私の心など露知らず、よくもこのパシパは、のんきに私の肩の上で言ってるのけてくれたのだ。

「……胸が肩で押しつぶされてるの、分かる？」

「……止めなさい！」

どうにもしまらないが、こうして私はデュラハンとしての狼煙を上げたのである。

7話 弱さは罪のゴナール

多くの骸骨たちから装備を得て、ほくほく顔で帰還した私を待っていたのは、深い意味を含んでいそうな笑みを浮かべたペイモンだった。

背後にそびえる欧州の城砦のような私の城は、荘厳ではあるが、今はそれを背にするペイモンの迫力を増すばかりである。加えて、彼女は元々下駱駝の下半身を持つ長身である。正直怖い。

「ほくほく顔なのは、隣の可愛い娘がいるからじゃないんですか」

そういわれて横に顔を向ければ、にこにこ顔のパシパの顔が近い。腕も抱きこむようにされて、妙に暖かい。これも正直に、現実では経験どころかお目にかかることすらないサイズで、驚愕を押し殺すのに必死である。ここまで帰ってくるにも色々とかかわれ、大変嬉しい、もとい、大変だった。

その事実を思い出し、顔を正面に戻すと、そこにもにこにこ顔のペイモンが。

……もうどうしたらいいというんだ。

「ペイ姉、いい男を独占するのはずるいよ」

「もう、パシパちゃんは、調子がいいんだから」

「頭がよくて強い魔物に理解ある男なんて中々いないんだから！

唾つけないとね！」

「私は大丈夫です。『ペイモン』は『バルバス』と主従関係を結んでいますから」

ペイモンの発言の何が大丈夫なのかは分からないが、どうやら私はゴナールでは優良物件らしい。

いわれてみれば知性ある、明確に性別を区別された魔物というのはゲームでもあまり見たことはない。

日本のゲームだからか、妙なキャラ付けをされた女性キャラクターは多いのだが、その分男性は無個性になりがちなのだ。

それこそ英雄級と呼ばれたNPCノンプレイヤーキャラクター以外は私もほとんど覚えていない。

しかし、この事実が私の魅力が高いということに繋がっているわけではない。

攻略本の設定資料に書かれていたのだが、魔物の世界は弱肉強食が絶対で唯一の真理である。

強ければ許され、弱ければ許されない。ソード・ラインと違い、少し散歩ただけでここでは竜種に遭遇することもありうる。

そこを生き抜く能力がなければ、それは強き他者に従属するしかない。

それが、いつしか魔物の掟となり、文化ともなったのだ。

人間や獣人と比べれば特異な部分もあると感じるだろうが、魔物も知性があればそれほど人と変わるわけではない。

例えばコボルドやゴブリンはヒト型種族に知性の面では劣るが、言語を操り集落を築く能力はあり、場合によっては人との交渉すら可能である。

フィロソフィアに『ゴブリン・ヒーロー』という本がある。知性の高い変異的なゴブリンが、人の作った『ギルド』にやって来て、やがて一員となり、冒険者パーティーの仲間となっていくという簡単な成り上がり話だが、これはフィロソフィア内の実話で、ソード・ラインでは珍しいが街中でゴブリンを見ることがあるのだ。

だが、ゴブリンを初め知性のある種族は、あまり完全なヒト型を取っていることは少ない。

もっとも賢く美しい——あくまで人の目線でいえばだが——ヴァンパイア種は、その性質や性格に癖が強い。

また、ヴァンパイアに匹敵する知と美を兼ね備えた、神々の姿を模すといわれる『上位精霊』ロードスピリットは、単独での分裂や分化で仲間を増やす。異性という概念はあまり存在しない。

つまり、パシパやペイモンのようなヒト型の、女性の魔物にとっては、男性という目で見える相手そのものが少ないということだ。

まあそれでもちやほやされるのが嫌かと言われれば、断じてそんなことはないが。

ただ現実には今の私にそれを楽しむ余裕はない。

……ないといったらない。

私はまだまだ弱いし、この城も万全とはいえない。人生を楽しむには、もう少しの労働が必要だろう。

早々に表情を切り替えて、ペイモンに主としての顔を見せる。

「ペイモン」

察したペイモンはすぐにその女性的な表情を改め、魔の従僕としての顔に戻った。

「はい、ヒイロ様」

「早速報告を聞こう」

ペイモンが深々と頭を下げると、巨大な城門は独りでに開き始めるのだった。

否応なく実感する。これが、今の私であると。

ただし隣であくびをするパシパに、私とペイモンは、苦笑を抑えきれなくなった。

シリアスが最後まで続かないのも、まあ今の私であるのだろう。

結局まったりとした雰囲気に着いてしまったので、玉座の
んびりペイモンの話を聞くことにした。

雰囲気はいいのだが、しかし話の内容は本当に頭が痛くなるもの
だった。

「申し訳ありません。ジョユの物は私には理解のできぬもの、その
中にもしやお役に立つものがあつたのやも……」

「いや、いい。君に理解できぬのならば、私に出来る道理はないよ」

私が手を振って否定すると、ペイモンはしゅんとした顔を見せた。
あまり悲しい顔をさせたくないのだが、一応彼女は従僕という立
場にこだわっているらしいので、上手くフォローできない。

ヒトの上に立つというのは、難しいものだ。

今はとにかく話を進めることにする。

「しかし装備がその程度しかないとすると、有事には困ったことにな
るな」

強力な魔物や魔族は独自にアイテムを使用することもあるが、何
より厄介なのは『人^{ヒューマン}』の存在である。

ヒューマンは獣人やエルフ、ドワーフといった種族に身体能力で
遙かに劣る存在だ。だが、その分知恵に関しては侮れない存在にな
る。

よく考えてみれば分かる。私が強力な悪魔、つまり中ボスだとし
て、私が戦うのをヒューマン数人のパーティーだしよう。私の
攻撃は強力だが、魔法や信仰の力で強化された前衛を簡単には打ち
崩せない。時間をかけて前衛を打ち倒せそうになっても、すぐに後

ろから回復の魔法や支援魔法が飛んできて、前衛を立て直してしまう。その間にもちまちまとした援護の魔法が私に当たり、じわじわと私のヒットポイントを削る。詰まった私はついにスキルと魔法を駆使し、相手を一気に倒しにかかる。しかし私の動きを察した相手は全員が防御に勤しみ、毎ターン回復アイテムと強化魔法を使い続け、やがてスキルポイントやマジックポイントの切れた私は、たこ殴りに……。

ああ、嫌過ぎる。

今までは何の考えもなく色々なゲームで敵のボスやら雑魚やらを倒してきたが、もしこれからがあればためらわざるを得ないな。

しかし、今私の立場は、それをされる側である。

悪魔は人間に特別な感情を持っていない場合が多い。よくも、悪くも。

悪魔にとって種族的に脆弱に過ぎる人間は、興味の対象になりえないのだ。まあ英雄級になれば別だろうが、そんな人間そうはいない。

だが、人間にとって悪魔は畏怖の対象だ。別段悪意を持っているわけではないが、どちらかと言えば不利益を与える存在と見えることだろう。人間の視点からすれば、悪魔は傲岸で傲慢だ。それは種族的能力差や文化の違いが大きいのだろうが、問題はどちらの種族にも短絡的で、直情、自己中心的で狭窄的なものがあるということだろう。

「ヒイロ様は、ここが襲われるとお考えですか？」

黙り込んでしまった私を見かねてか、心配そうにペイモンが声をかけてくる。

これでは主失格だな。彼女に見放されないように、今できること

をせねばならない。

「無いとはいえない。ずっとここにいる君たちは知らないだろうが、今門の外側はローランドという国が支配している。好戦的な、と注釈が付く」

「ローランド……」

「強力な王がいる。そして野心的だ。久しぶりに、戦争になるかもしれない」

ぴくりと反応を示したのは、パシパだ。

「戦争？ 門を越えてくるってこと？ わざわざこんな土地に？」
「どうしてですか？」

そうか、2人には分からないのか。

思い当たる節はある。彼女たちには、領土欲という概念が無いのだろう。

ゴナⅡダⅡルーにも町や村、国はある。

だがそこに、効率や支配といった概念はあっても、領土という概念は存在しないのだ。

私の城にも明確な線引きはない。強いて言えば私が熟知していて、私に従属する魔物が治める地域が私の領土となる。今はそんな魔物はいないから、この城だけが私の領土といえるだろう。

魔物は自由だ。物欲はあっても、土地に関心を払う存在はそう多くない。

しかし人は違う。動物型の魔物よりも遥かに、縄張りに五月蠅いのだ。

「はぁ……人というのは面白いものですね」

「矮小ともいえるし、賢しいともいえるな。しかし、その弱い精神と必死さが彼らの力ともなる。私も元は人であるから、それはよくわかる」

「ヒイロはそんなに強いのに、人なんだ」

「そうだ。私の中身は弱いままだ。だから、どこまでも強くなりた
いのだ」

そのためには、まずアイテムがいる。消費アイテムの流通を確保
できなければ、いずれくる『太陽の戦争』で生き残れないだろう。

人間のずるがしこさ、というか必死さというか。それを魔物や悪
魔、あらゆるゴナⅡダールの子どもたちの中でもっとも知悉して
いるのは、間違いなく私なのだから。

己の能力に慢心することは三流だが、その中でも知識がありなが
らそれを生かせないなど、最早語るに落ちる。

「アイテム……あいつを頼るか」

あまり使いたい手ではないが、この際背に腹は変えられない。

それに、フィロソフィアではない、現実のあいつに興味があるこ
とも事実だ。一度は見ておきたい。

理由は色々あったが、結局はアイテムが手に入る近道であること、
そして――。

「友人を頼る」

「友人、ですか？」

ペイモンは不思議そうに首を傾げた。

それはそうだ。まだ出会って間もないし、落ち着いて話したこと
もない。

一方的に私の幸運な出会い方で慕ってもらっているが、互いに知

っていることは少ない。それでも私がこの辺りに明るくないことは知っているだろう。

何せ沼に行くだけで相当質問攻めにしたのだ。

知識として知ってはいいても、現実には見たことはないの、ついついやりすぎてしまったのだ。

われながら臆病心が過ぎると思うが、現代日本人が急にアメリカの裏社会に放り込まれたとでも考えてもらえば、それも理解してもらえるのだろうか。

しかし、奇縁だ。

果たして、あいつはこの世界で、どうなっているのだろうか。顔も知らない、名前も知らない。だが、確かに友人だった。

「パシパは休んでいてくれ。留守は任せる。もし強力な相手が侵入してきたら、隠れていても構わないからな」

私が玉座から立ち上がり、玉座の脇に刺していたヴォーパルソードを引き抜くと、パシパが少々不満げに聞いてきた。

彼女の気性から言って、留守番は合わないのだろうが、未だ怪我人、今回は我慢してもらおう。

「それは分かったけど……どこに行くのさ？」

私の左手に乗った首が、静かに目を閉じ、過去に思いを馳せる。所詮ゲームだった。でも、友人は友人だろう？

「少し西、栄えた町があるな、ペイモン」

「あ、はい！ でもあそこにはそれほどアイテムは……まさか！」

なんともいえない表情で、ペイモンは納得したようだ。

確かに、あいつのイベントには、奇妙なものが多かった。やはりこっちでもそうか。

そうと知ると、安心した。

「『人狼／グラシャⅡラボラス』。私の古い友人だ」

8話 堅琴は主のために

ペイモンと私は、パシパに留守を任せると、西のグラシャールボラスの居城に向けて出発した。

パシパのお土産よろしくというのんきな見送りを受けて、もう2時間は経つ。

いくら私とペイモンが悪魔とは言え、馬がなければそうそう速く移動できるものでもないのだ。

特にゴナールダールの街道はソード・ラインで言う獣道である。

ひび割れていたり、背の高い草が生えていたり、道が消えていたり、所々沼地になっていたり。

全く歩きにくいものである。

ただ、唯一の救いはこの街道でモンスターと遭遇していないということだろう。

現在、周囲は森で、かろうじて認識できる一本の街道を通っている。

なぜか乾燥した道、その周りは全て腰まであるような草で、上は背の高く針葉の生い茂った、不気味にくねる木々があるばかりである。

本来は、モンスターがわんさか出るような場所だ。フィロソフイアでは、フィールドによってエンカウント率が違う。傾向としては人の立ち入らぬような場所はエンカウントしやすいという考えで間違いない。

しかし今まで、数字で言えばエンカウント率は0だ。

それというのも、私の横でにこにこしているペイモンのおかげである。

下半身が駱駝である彼女は、私を雄に越えた身長を持っている。加えて鳥の羽のようなしっとりとした黒髪に、金色の瞳を持ってお

り、その姿は現代では絶対にお目にかかれない、幻想的な雰囲気をも出し出している。長い草も彼女の足の半ばまでしか届かず、周辺の薄暗さが逆に神秘的に映る。

それに加えて今は、彼女の周囲を赤や青い人型の光が、ぐるぐると踊るように回っているのだ。

様々な光を発するそれは、人型をとり、その背は低く、わずかながらも宙に浮かんでいるようで、正に『精霊／スピリット』の名前に相応しい不思議な存在であるといえよう。

顔も何もない。ただ光が集まって形をとったもの。だが手だけはやけにくつきりとして、その手には様々な楽器を持っていた。

トランペット、シンバル……独特なリズムでユニークな音楽をかき鳴らす。

ペイモンを中心に彼らは一種の世界を形成していた。

私もその世界のおこぼれに、心地よく浸る。

『魔よけの音楽／チャームミュージック』

ペイモン自身も音楽に合わせて手に持った豎琴をかき鳴らし、ふりふりと尻尾を振っている。

何だこの可愛い生きも……じゃない。

ペイモンも図鑑には男性の特徴と女性の特徴を備えるとあるが、こうしてみると天然のお嬢様にしか見えない。

重ね重ねいい従僕を得たものである。

私ことバルバスも、恥ずかしながら大悪魔の序列5番目に入る、実力あるクラスではあるが、ペイモン自身も序列9番目、相当に力のあるクラスだ。

特にペイモンはその能力に《精霊使役／リコール》、『地形把握／ガイド』など、特殊で有用な魔法やスキルが多く、知識も豊富に持つとされる。

このチャームミュージックもその一つだ。

低位ではあるが音楽を扱うスピリットを呼び出すことで、パーティーに様々な恩恵を与えてくれる。

ペイモン自身のステータスは恐らく並のジョブよりも低いだろうが、その多様な技でそれを補うのだ。

私は正直、パシパと歩くときは緊張していた。

見た目はすぐに慣れてしまったが、慣れてしまうと正にただの女の子だったのだ。

いくつになっても、若い女性と2人きりになると姿勢がよくなるし、力が入る。

あまりもてたこともない男なんて、そういうものだろう。

そこへいくとペイモンにはそのような緊張感を感じない。

相当な美女なのだが、どちらかと言えば親しい友人というか、妹分というか。

私の少し前をふりふりと駱駝の身体を振りながら歩くのはえらく癒されるし、ゲームと現実の区別が曖昧になりつつある私には、彼女をよく知っているというのが頼もしい。

かつては彼女を戦闘に呼び出し、アイテムの管理をしてもらい、時にイベントがあり……

それらの映像すら、私の脳裏には現実のビジョンとして再生される。たった一つ。それが、それだけが。私には恐ろしい。

急激に私は変わっている。今までの穏やかな気持ちが、激しく鬱屈する。

変化はいつの時代も不安を招く。私はどうなってしまったのか。意識すると止まらない。

私はいつも自分の気持ちをごまかしている。冷静ぶっている。考えるな。私は未だ新山英雄なのか、もうヒロイロなのか。人間か、悪魔か、化け物か。

私は半端で、私は――。

「どうなさいました？」

はっと顔を上げると、心配そうな表情のペイモンがこちらをわざわざ膝を地面につけて、下から覗き込んでいた。

「すまない。少しぼうつとしてしまった」

そういうとペイモンは少し首を傾げた。

すると後ろについてきていた小さなスピリットたちも首と思しき部分を傾げた。

その光景に笑みがこぼれる。

私の笑みを見たペイモンも薄く笑い、手に持ったユニーク武器、『魅了の豎琴／キュートハープ』を一撫でした。

ぽろんと穏やかな音が流れると、スピリットたちは喜んでいるのか、発光明滅を繰り返し、周囲を飛び回る。

なんとも幻想的だ。

この魔界とも思える世界でこのような光景が見られるとは……ギヤップもあるからだろうか、とても胸に響く。

もし私が普通のヒューマンとしてプレイしていたら、どうなっていたのだろうか。

或いは、もっと厳しい生活で、苦しんでいたのだろうか。ソード・ラインは確かに厳しく、それはゴナールとは全く方向性が違うものだ。

あくまで想像でしかないが、様々な方角を向いた欲望が存在し、そこへ向けて駆け引きが行われ、出し抜いていく。負けたものは永劫に搾取され、勝ったものはどこまでも栄華を楽しむ。

少なくとも、フィロソフィアとしてのソード・ラインはそうだった

た。

プレイヤー同士の戦いこそが、もつともどろどろしたものになる。その点、ゴナールは優しい。

強ささえあれば、認められ、受け入れられ、愛される世界なのだから。

父なるテュポーンは凶悪で、怪物である。

だからこそ、その子どもたちに優しい。彼はこの世でもつとも凶悪だから、他の全てを許容するのだ。

彼は他ならぬ母たるアーリマの優しさを、受け継いでいるのである。少なくとも平等で、あらゆる差別をこの世界は持たないのだ……。

しかし当然、徹底して差別のない世界は、シンプルにシビアである。腹がすけば、勝手に誰かを食えばいい。

それがまかり通るのが、この世界だ。

ペイモンが今演奏しているのは特に意味のある音楽ではない。であれば、『魔よけの音楽／チャームミュージック』が効果を失い、この荒れ果てた街道、ひび割れた大地、見渡す限りの暗き森……。急激にエンカウント率を取り戻したフィールドが、私とペイモンに牙をむく。

「！ ペイモン！」

「え？ きゃあ！？」

咄嗟に私はペイモンと、草陰から飛び出してきたものとの間に立ちふさがった。

ヴォーパルソードを盾にして、相手の鋭い牙を防ぐが、爪で膝を引つかかれた。

無論、私のデッドアーマーはその程度の攻撃を跳ね返す力があるが、綺麗に間接部に入ってしまったえば、鎧も意味を成さない。

「ヒロ様!!」

「いい!」

私は痛みを感じることもなく、ヴォーパルソードを振り回した。デュラハン是不死者の眷属である。物理攻撃による痛覚など存在しない。

どのような傷を負ってもまず100パーセントの力を発揮できるのだ。

「ぎゃん!!」

私のヴォーパルソードは、相手の牙を叩き割り、首を深く抉った。血しぶきが舞い、私の黒い鎧を染め上げる。

生き物を斬った。だが、そこに罪悪感はない。

見れば分かる。この醜悪な様を!

この敵は、人間大の大きさを持つ狼、『灰色狼／グレイハウンド』――の亜種、『屍狼／リボーンウルフ』である。

ただの狼であればこちらも怯んだかも知れないが、頭の半分が腐り落ち、目玉が今にも千切れそうで、頭蓋骨が見え、脳汁すら滴り落ちる。

そんな存在に感じるのは、恐怖か、猛烈な敵対心だけであろう。私が日本人であつたら恐怖に背中を見せたかも知れないが、今の私は身体はゴナールの大悪魔である。

身体に引っ張られた精神が、私を戦闘へと駆り立てる。

リボーンウルフは首を強かに切られたが、その旺盛な食欲は失せ

ないようだ。一步飛びのくと、再び私に飛び掛ってきた。

私よりもわずかに早いのか！

迎撃は間に合わず、やむを得ず、まともに受ける。

「ぐっ！」

相手の牙が私の肩の鎧の継ぎ目に入った。

鼓動を停止した心臓は、冷たい血流を凍らせており、流れ出るのはどす黒く粘ついた命のない液体。

それ自体、大したことはない。しかし思わず声が出た。

私の冷たい身体に、屈辱が産まれる。

悪魔のジョブが私の魂に訴えかけるのだ。

こんな雑魚に！ 何たる様か！！

ざらりと私の青い目が光を放つ。

冷静さを失い、獣性を開放しようとした私を止めたのは、頼れる従僕、ペイモンだった。

「『頭脳混沌楽／パニック・ロック』」

ペイモンが突然、怒りに燃えた目をして旋律を奏ではじめる。キートハープが魔力を発し、パンクロックのような強力なサウンドをつむぎだす。

するとどうだろう、先ほどまで楽しげに歌い踊っていたスピリットたちが消え、代わりに黒い霧のような存在が現れ、リボーンウルフの周りを回り始める。

黒い霧が狂ったようなノイズに混じり、狼の腐った精神をさらにかき乱す。

思わずといった感じで、リボーンウルフは苦しげな遠吠えを上げ

た。

向けられていない私でも恐れを感じるような、凶悪な音楽だ。ありていに言えば混乱の呪文の一種なのだが、現実には目の当たりにするとこのように恐ろしいものか。

リボーンウルフは混乱し、その場をぐるぐると回り始めた。

自分の尻尾を追いかける犬のよう、といえば分かりやすいか。

その間に私は一歩間合いを取り、正眼に剣を構える。

私は不死性を持つデュラハン種である。

回復魔法は使えないが、ユニークスキルとして『再生（小）／テロメア』がある。少しずつ膝と肩の傷がふさがっていくのが分かった。

便利なものだと思う、人間でないというのは。

ペイモンは私が退いたのを確認すると、今度は丁寧な、しかし素早く豎琴を弾く。

踊るように、しかし鋭利な刃物のように。

豎琴が緑色の光を放つ。

これは、何度も見たことがある。通常攻撃力の低いペイモンの主力攻撃スキル、『風霊楽団／ウィンドブリット』！

ペイモンがその言葉を呟くと、辺りに四方八方から強い風が吹きすさぶ。

私からはほとんど不可視の、恐ろしい攻撃だ。

多くの落ち葉を巻き込んで、ドッジボール大の塊が、かろうじて見えるようになる。

それがいくつもペイモンの周りを回り、やがて放たれた。

ぐるぐるとしていたリボーンウルフの露出したあばら骨あたりに初弾が激突し、その身体を打ち倒すと、そこからは圧倒的だ。

次々と飛んでいく風の銃弾が、リボーンウルフを空に打ち上げる

ほど打ち据えていく。

ウィンドブリットはマジックポイントの消費が少ない割りに、威力は高い。高レベル帯では通用しないだろうが、このような低レベルの相手ならば充分に必殺足りうる。

ぐったりとして落下してくるぐちゃぐちゃになったリボンウルフは、まだ狂ったように声をあげていた。

さすがに腐っても不死者、といったところか。まあ、元々腐ってはいるのだが……

どうでもいいことを考えながら、私はヴォーパルソードを大きく振りかぶる。既にこの心は冷めていた。

落ちてきた狼は、私の断罪でその醜悪な姿をかき消されたのだった。

「ヒロ様、申し訳ございません!!」

私がヴォーパルソードを背中に差し、一つ息を吐いたところで、ペイモンがまた膝をつきながら速攻で謝ってきた。もう土下座しかねない勢いである。

何のことかよくわからないが、何か責任を感じているのだろうか。よくわからないので聞いてみることにする。ついでに彼女の頭を地面に着かないように、抑えてあげることにする。

「どうした、ペイモン。何を謝る？」

「あ……」

なるべく優しく声をかけると、なぜかペイモンは急に顔を赤らめ、視線を泳がせた。

……冷静に考えてみると、相手の顎を押さえているというこの行

為。それに加えて、私は頭の位置が普通の人間よりも手に近い、というか手に乗っている……つまり相手の顔にも近い。

ドン・ファンでもあるまいに、私程度の行為で照れるペイモンが悪いな、うん。

などと責任転嫁しつつ、彼女に手を貸して立ち上がらせる。

すると、ペイモンは上気した頬で、私の手を両手で優しく握ってくる。

私が悪かった。悪かったのだが……どうしたらいいのだろうか？

まあ、とにかく彼女が元気になったのならよかった。

どうせ、私が怪我をして、とかそういった理由だろう。

生憎と私は今のうちに戦う経験を積んで、攻撃を受けても動揺しないようになっておきたかったので、いい練習になった。

折角だし、この手のぬくもりは女性を身体で守ったご褒美ということにしておこうか。

私がぎこちなく微笑みを浮かべると、ペイモンは、手本にしたいくらい素晴らしい笑顔を、私に送ってくれたのだった。

その後は、ペイモンに経験を積みたいと話し、2人で敵を蹴散らしながら西へと歩みを進めた。

私たちの眼前に、華やかで優雅で、活気に溢れ、しかしどこか退廃した空気を発する町。グラシャ||ラボラスの治める都。

『嵐の庭／ストーム・ガーデン』が見えてくるのは、もう半日先の話となる。

8話 豎琴は主のために（後書き）

ちよつとネットを覗けない間に、すごくたくさんの方に見ていただいているようで感謝します。これからもゆるーく息抜きに書いていきますので、よろしくお願いします。

後、もしもう一つの話 wait している方がいらしたらすいません。十話くらい書いていますが、納得いかないで……。あまり読んではもらえませんが、あっちが私の本命、真面目に書いている方なのです。ほ、ほんとなんだから！ 皆見てくれるから、こっちをいっぱい書いてるんじゃないんだからね！

ではまたいずれ。

9話 グラシャールボラス（前書き）

被災者の方々、色々大変と思いますが頑張ってください。

9話 グラシャールボラス

その青年は一人で、ソファに座っていた。

何の意味もなく、何の意思もなく、ただじっとテレビを見ていた。そこに写るのは、記憶に残らない、無個性なニュース。色のないキャスター。画面の端に写る、無感情な顔をした青年。

いかにも無機質に見える、その部屋で、その青年は決して無機質な存在ではなかった。

教養もそこそこあり、運動も苦手ではない。顔も決して悪い部類ではない。

部屋を見れば綺麗好きでハイソな趣味もうかがえる。お金もないではないのだろう。

だが、どこか人間味にかける。無個性な部屋だった。

彼は努力できる人間であり、人としては至極全うだった。

だからこそ彼は完成していた。完成していたせいで、人と関わることは苦手だった。彼は人として他人を必要としなかったのだ。

だが、無論心まで一人で完璧なものなど、存在しない。そんな存在は、既に人ではない、何かだろう。

環境が悪かった。

タイミングが悪かった。

運が悪かった。

何が悪かったのか。

青年は自問する。つまらない日々。

刺激のない日々。求めず、求められず。何のために生きているのか。

答えは分からない。人間そう簡単に答えを出せるものでもないが、

青年は納得しなかった。

突然、部屋の中に緑色の光が奔った。

青年が光源に視線を向ける。

一台のPCが、静かな光を放っている。

青年は頬を緩めた。

小さな喜びだ。

画面の向こうで、青年を呼んでいるのだ。

仮想空間で出会った人たちは、奇妙なぐらい優しい。

彼は情性で始めたゲームで、現実よりも確かな満足感を得ていた。

だから彼は今日もヘッドマウントディスプレイを被る。

部屋から青年は消える。闇の中に落ちる……。

闇の中には多くの人たちが彼を迎えてくれた。

人、人でないもの、異形、怪物、化け物。

それでも彼はそこに恐怖を感じない。

ふと、背後を見る。

暖かく、とてつもなく巨大で、計り知れない力を持った存在の鼓動を感じる。

うつすらと見えるシルエットは、巨大な蛇と巨人の間か、翼や蛇の頭すら持ち、正に真性の怪物。

だが、どうだろう、その存在は、どうしてか暖かい。

私は目から流れ出るものを感じた。

熱い。

それを見て笑う私の仲間たち。

しばらく泣き続けていると、ころんと私の頭が落ちた。

私は慌ててそれを掴んだ。

私は私の身体を見つめた。

青いジーンズ、灰色の長袖シャツ。

首がない胴体。

困惑した。恐怖した。

それでも私は。

このぬくもりと、仲間たちを失いたくないのだ。

光が溢れた。暗い光だ。間違いなく善ではない。冒瀆的で暴力的。しかし、力強い、温度……。

覚醒した脳が、頬を拭われる感覚に目を開かせた。

眩しい。

細めた目に映ったのは、心配そうに私の頬を撫で続ける、聖母のような慈愛に満ちた……悪魔。

朝日を背にしたその矛盾した存在は、ペイモンだった。彼女にも悪魔になる前の名前があったはずなのだが、彼女はそれを教えることはできないという。

彼女は最早以前の生を捨てている。悪魔になるために過去を捧げているのだという。それが契約なのだ。

力で悪魔の座を奪った私とは違う。

「おはようございます、ヒロ様。うなされているようでした……大丈夫ですか？」

基本的に私はこの身体になってから、睡眠も食事も必要とはしない。

肉体の不死性は、つまり停止である。私の身体は変化をもたらしません。

だが、体内で作れるエネルギーは常に一定であるし、この世界がゲームのような基準で動いているとしても、時間経過よりも睡眠し

たほうが疲労、或いはヒットポイントの回復は遥かに早い。食事は完全に趣味の範疇になってしまっているが。

そのためペイモンと宿を取った私は、恥ずかしながらも同部屋を取り、彼女とは隣り合ったベッドで寝たはずだった。

が、いつの間にか私は彼女の顔を見上げるような態勢になり、形のいい胸がなだらかに――。

「……どうして膝枕？」

頭の裏にあるのはふさふさとした感触。

間違はなくペイモンの足だろう。

自覚すれば気恥ずかしくもあるが、何とも心地よい感触とぬくもりに、怠惰にも起き上がれない。

そんな私の内心の葛藤も知らず、私の首から上だけをひょいと掲げて、ペイモンは優しく微笑みかけてきた。

「うなされている人には、これがよいと教わりました」

誰に、とは聞けない。悪魔の契約がある。しかし教えた人間の常識は疑いたい。

だから私は、とりあえず彼女に感謝の言葉を掛けるのみとする。

彼女が望む限り、私と彼女の縁は永遠に続くのだから。いずれ知る機会もあるだろう。

私は当面、この世界で強くなるという方針を立てた。そして、元の世界に帰りたいか、と聞かれれば、それは消極的否定に留めるだろう。

普通の人間ならば、腐敗した狼に襲われる世界など嫌というだろう。

私だって嫌だ。だが。

この目の前にあるぬくもりが、私を誘惑してやまない。
まさしく彼女は悪魔だった。

私は、生まれて初めて、女性に心を惑わされていた。

それは幼い日に感じた何かに似ていて、非なるものだ。

未だに思う。彼女は私に救われたというが、それだけでここまで
甲斐甲斐しく世話を焼いてくれるものだろうか、と。

疑っているわけではない。ただ、自分にとって都合のよすぎる状
態が、怖いだけだ。

今だけは。

そんな気持ちで、私はそっと目をつぶり、体の方は彼女の足にし
がみつかるのだった……。

私とペイモンが宿を出たのは、昼に近い時間になってからだだった。
時間の感覚や基準は現実世界と変わらないが、ゴナⅡダールは
神々に反逆した世界だ。

ソード・ラインの昼はこちらでは夜中、ソード・ラインの夜中は
こちらの昼となる。つまり、このどんよりとして、常に雲に覆われ
た空の上にあるのだろう太陽が、ソード・ラインの太陽と常に間逆
の位置にあるのだ。

もっとも、あれが太陽なのかどうなのかも分からない。設定資料
の一つでは、あれは太陽ではなく、未だ存命する古き神でないかと
も言われている。

ともかく私達は古き神の告げる時間で言えば昼の23時に宿を出
たということだ。

宿を出てまず目に入るのは目抜き通りだ。

幅はおよそ三十メートルといったところか。

がやがやと人通りに溢れ、多くの露天や商店が立ち並んでいる。

建物は現実で例えるならば、オランダの町並みのようで、シックながらもレンガの壁が力強い印象を与える。

地面もレンガ造りで、とても調和のとれた美しい町並みだ。

ストーム・ガーデンという名前には相応しくない実情のように思える。

それはまるでヨーロッパの都市部に観光に来たのかと錯覚させられるほどだ。

現実と違う点を挙げるとすれば、建物に吊るされた看板に剣や盾のマーク、魔法を意味する光のマークや巻物のマークがあること。

そして、今も私の前を通ったような異形の生物。

けむくじやらの人型。

二足歩行の狼。

緑の子鬼。

青白い顔の人。

そのような存在が堂々と歩き回っているところだろう。私も今までの旅でなれていなければ、悲鳴を上げたいような光景だ。

人間——少なくともそのように見える存在は、この広い通りを見渡す限り一人もいない。

それゆえか私はひどく目立っている。

が、私と目があうと誰もがその目をそらしていった。

なるほど。

知性ある魔物たちは、デュラハンを恐れるか。

私は職業としてデュラハンになっているが、そもそもデュラハンにはフィロソフィア内で普通にモンスターとして出てくる存在である。だが私の状況から分かるとおり、デュラハンは強力な種族である。ヒューマンで始めた人間のほとんどが、デュラハンに遭遇するのはかなり後であるが、それでも中堅、熟練のプレイヤーを悩ませる

強さを、この種族は持っていた。

彼らは一様に重厚な鎧姿ではあったが、その細かいディテールや装備のグラフィック、顔の表情などは微妙に異なっている。それはスタッフ側のこのモンスターに対する力の入れようを表し、つまり、ドラゴンやグリフォンなどというゲーム好きなら誰でもイメージできる神話の神物のような、シンボリック存在ということだ。当然それに相応しいステータスが要求されるのだ。

伊達達の見た目ではないのである。この格好であっさりと倒せたら私だったら逆に悲しくなると思う。

まあ単純に言えば格闘ゲームで中盤で必ずボス格のキャラクターが乱入してくることがある、そのような存在ということだ。

私はモーセの海渡りであるかのごとく、人波を分かちながら歩き始めた。

その後ろにいるペイモンに、色々と質問をしながら、私はそれなりに楽しんでいた。

「あれは？」

「沼ガエルの串焼き屋さんですね。西部ではポピュラーなものですよ」

「なるほど……あの露店は？　あの石が並んでいる」

「あれは……マナストーンのお店ですね」

「ああ……練金の材料の」

「ええ、グラシャⅡラボラス様は練金の悪魔。そのお膝元であるこの町は、そういった類のお店が多いのですよ」

確かに、言われてみればその辺りを歩く『コボルド（狼人族）』、『ゴブリン（小鬼族）』などの多くが、多様なローブをまとっている。

あれは確かジョブの『錬金術師／アルケミスト』が好んで使用する

る装備だ。多くのものが何らかの加護を受けており、スキル『練金』に必要なステータス、『知性』や『精神力』がよく伸びるのだ。『魔法使い』のローブとの違いは、魔法のローブほどの防御力がない代わりに、素早さが高いことか。

アルケミストは戦いのほとんどを道具に頼るため、先に行動できないと一方的になぶられてしまうからだ。

2人並んだコボルドが、私には理解できない言葉で何かささやきながら歩き去っていく。

その中に聞き及んだアイテムの名前が入っていたから、恐らく今の2人もアルケミストなのだろう。

「なるほどな。では先にアイテムをのぞいてみようか」

「はい……あ、あちらに看板が見えます」

ペイモンが指差したほうを見ると、少し先に小袋とこぼれ出た薬草の看板が見えた。

「何か有用なものがあればいいが……」

「きつとございます。グラシャールボラス様の町は品揃えが有名ですから」

その店は、周辺がレンガ造りなのに、ここだけが木製で、やけに目立っていた。

小さなドアをくぐると、むわっとした空気。奇妙な臭い。

なるほど、ゲームでは感じられない部分だが、確かにイメージどおりだ。

所狭しと並ぶビン、ビン、ビン。吊るされたカエルのようなもの、蛇のようなもの。

奇妙にねじくれた剣が立てかけられ、戸棚には何かの頭蓋骨。いかにもマッドだ。

ものめずらしそうに私とペイモンが店を見回していると、奥の扉から一人の女性が出てきた。

ただしその肌の色は青白く、顔の作りは彫像のように冷たい美貌で、微笑むとねっとりとした妖艶さを生む。

服装はこのゲームではありきたりの若草色のワンピースだが、彼女の金色の髪から二本の巻いた角が見えることが普通ではない。

「あら、いらっしやい」

そういつてから彼女は鋭い目を真ん丸く開いて見せた。

「……驚いた、いえ、失礼。大悪魔の方達ですね。すごい加護の力を感じます」

「分かるのか？」

「はい。私は『山羊悪魔／バフォメット』ですから」

バフォメット。私は神話やオカルトに多少の興味が有り、趣味としていたが、バフォメットは世間でもそれなりに有名な名前かと思う。

サバトと呼ばれた悪魔の儀式によく出てくる悪魔だ。

フィロソフィアでは下位悪魔であり、本来は両性具有という話もあったが、きちんと男女の性差が決められている。

その能力はドルイドや『黒神官／ブラックプリースト』といった補助的なジョブに向く。種族的には博識で、やや快楽的。悪魔の中では悪戯好きで穏やかな性向だと記憶している。

「しかし、すごいですね。デュラハンであり、大悪魔の加護を受けているのですか。デュラハンを見ることも稀なのに、大悪魔なんて……」

まあデュラハンは悪魔種であるが、その存在は死神の一種だ。

現実では人の死に際に現れるのがデュラハンといわれているが、ここでのNPCデュラハンは高レベル帯の遺跡などでひっそりと暮らしているか、気まぐれに人の世界で殺戮を行っているか、悪魔召還の儀式で暴れまわっているか、その辺りだろう。

人のようにぶらりとショッピングしているデュラハンなど、私ぐらいではないだろうか。

実はデュラハンの種族が出てから初めてその種族にチェンジしたのは、私がゲーム内では最初である。

新種族の情報が発表されてからずっと狙っていたのと、運がよかったのが幸いしたのだが、その後しばらくデュラハンになれた人間は数人しかいなかったらしい。

もし現実のゲームとこの世界がリンクしていれば、人のような意思を持つデュラハンが、今の時点で数人ぐらいはいるかもしれない。

それと接触するのもどうかと考えるが、やはりデメリットのほうが多い気がする。

自分の強さは概ね理解してきている。中堅プレイヤークラスといったところだろう。充分に強者といえるステータスがあるようだ。

だが、もし自分のように思考し、成長するデュラハンがいて、それが凶暴な存在であったなら。

現実には、私は生存する自信がない。装備に関しては私は貧弱なのだ。

ヴォーパルソードは強力だが、どちらかと言えば趣味で使っただけであって、熟練のプレイヤーのユニット相手には心もとない。

以前ゲーム内で使っていたのは万全の備えをしていたからこそ遊び心でしかなかった。

自分の命を天秤にかけてできる遊びではない。

それに単純にNPCの、モンスターのデューラハンよりも、私のレベルはかなり低いだろう。

基礎ステータスで既に敵わないのだ。

そんなことを悶々と思考しているうちに、妙に生き生きと私の自慢をバフォメットに聞かせていたペイモンが、急にやめてこちらに話しかけてきた。

「あ、申し訳ありません、ヒロ様。いいお時間ですので、そろそろ」

「そうか。すまないが、医薬品の類や、罠に使える類のものが見たい」

「はいな。目録はこちらになります」

山羊の角を生やした彼女は、商人らしい笑顔でリストをめくって見せた。

ざっと目を通してみる。一般的な回復アイテム『ポーション』、一時的防御力上昇アイテム『ガーダー』、毒モンスターの体液、『麻痺蜂／パライズホーネット』の針などが良さそうだ。

「手持ちは少ないのでな、物々交換で頼む」

「はいな。お品は？」

これがこのゲームの珍しいシステムの一つ。物々交換だ。

私がグリードから取り出したのは、多くのスケルトンの装備——ではなく、骨だ。

バフォメットは丁度切れていたのと呟いて、嬉しそうに一個の頭

蓋骨を手を取った。

こういった骨などは練金の素材としては割とポピュラーである。特にゴナⅡダールーでは、ソード・ラインの薬草のようなものといえるだろう。

このように商売においても、相手の趣味や思考でアイテムの価値が変わったりもするのだ。

こうして私はほくほく顔で店を後にした。

「いい買い物が出来たな」

「はい。ヒロ様とパシパちゃんが頑張られたおかげですね」

「パシパにも土産を買わねばな」

「ええ。本当に良き町ですね。とてもゴナⅡダールーの町とは思えません」

私は現実の目線でないという制約を除けば、見てきたゴナⅡダールーの大地は、ペイモンよりも遥かに多い。

ペイモンの過去は『悪魔の契約』により詳しくは聞けないが、それでもフィロソフィアでまずは一冒険者としてソード・ラインを、やがて悪魔としてゴナⅡダールーを巡った私より見聞しているということはまずないだろう。

実際にこの美しい町並みが、元々獣人プレイヤーで、ジョブがアルケミストであったグラシャⅡラボラスの作によることを私は知っている。

そしてこの町並みが、現実のヨーロッパを意識して作られていることなど、私しか知らないことだろう。

そう、恐らくグラシャⅡラボラス本人ですら、知るまい。

元々日本人の感性を持つ彼の人物らしい、平和な町なのだ、ここは。

領主となったプレイヤーには様々な特権が与えられる。町の作成

もそうだ。

制約はあれど、できることは多い。

グラシャⅡラボラスは正しく、ここで出来ることの全てを行っていた。

だからこそ、私は嬉しく、少し悲しい。

ここに彼の人が込めた思いは、もう私しか知らぬ。

私は浮かび上がった寂しさを取り繕うように、ペイモンと先を指した。

「確かに。争いなどもなさそうだ」

「こちらでは珍しい悪魔の領主、グラシャⅡラボラス様のお力でしょう」

「ああ、あいつは変わり者だ、間違いなくな」

私の言葉にペイモンは、きょとんとした愛らしい表情を見せた。わずかに見上げる形になる私は、思わず天を見上げて笑ってしまった。

頬を膨らませた彼女と連れ歩くこと数分、やがて私は、美しい宮殿の前で足を止める。

「……いや、遠くから目に入っはいたが、凄まじいな」

「ええ、本当に」

目の前に聳え立つ城、いや、やはりこれは宮殿なのだろう。

アラビアンナイトの舞台にでもなりそうな、壮麗で、どこかアラブの風をまとった作りだ。

タージ・マハールよりはアルハンブラ宮殿に近いイメージで間違いない。単一の作風ではなく欧風の造形も垣間見えるからだ。

こちらでも変わらず、趣味はいい。

いいのだが。

「いや、この宮殿の守護に『騎士のマリオネット』は違和感があるな」

「そうですね。少し風味が違いすぎます」

ペイモンは純粹に作風に関していつているのだろうが、私のそれは節操なく乱雑に取り入れてしまうかつての友人への苦言にも近い。あいつはそういう奴だった。いいものを何でも取り入れて、混沌とさせてしまう。

それでもその姿が美しく見えたのは、やはり才能のなせるものだったのだろう。

我々が敵意のないことを告げると、騎士のマリオネット——中世の騎士甲冑の兵士が、莊嚴な扉に合図をした。

扉は大きな音を立てて開き始める。

騎士のマリオネットはソード・ラインでも普及しているものだ。

いわば魔法の道具、『魔法の工芸品／マジックアーティファクト』の一種だ。

騎士の兵士とは言ったが、実際その中身は空である。

自立思考をして、喋ることはできないが、簡単なコマンドを命じること、相手の会話を理解することもできる。

戦闘力もそこそこで、レベル20に満たないヒューマンでは、厳しいものがあるかもしれない。

それゆえにその値段も高価だ。

そう、二体あればソード・ラインの一等地に別荘一つは建てることができるだろう。

それほどのものをたかだか門の開閉係、この宮殿の主のすごさが知れるというもの。

「行こう。ペイモン」

私の決意を込めた言葉に何かを感じ取ってくれたのか、ペイモンは穏やかに微笑んで、私の手を両手で包み込んできた。

勇気をもらえるな。これから会うのは人であったころの残照だ。まだまだ精神に隙のある私だが……。

「動かねば、前には進めん」

右手に抱えられた私の頭が、宮殿の奥をねめつける。

暗闇の先にあるのは、希望である。否、希望にするのだ。

騎士のマリオネットには劣るものの、飛行能力と乗り物の機能を備えたアーティファクト、『翼持つ彫像／ガーゴイル』に案内され、たどり着いた宮殿の奥。

巨大なクッションのようなものにだらしくもたれながら、少女のように細い腰、豊満でパシパに迫るような胸、白魚のような手。そして神をも恐れぬ怜悧な美貌とでも言うべき、顔の造形を持つ彼女。

燃えるような赤い長髪を無造作に伸ばしている彼女。

蠟燭の明かりで暗い部屋を幻想的な光景へと変え、その明かりで自身のまとう露出の多い鎧を栄えさせるそのセンス。

そしてライオンの下半身、鷲の翼を持ち、蛇の尻尾をその腰に巻きつけた妖艶な怪物は――。

「よく来た、願いを持つもの」

スフィンクス。

「汝が我が試練に応えれば、その望むものを与えよう——ん？」

我が友人。

「お前……久しいな！ バルバス！ いや……」

大悪魔、グラシャ||ラボラス。

「ヒロ！」

ペイモンをしのぐ巨体が立ち上がり、翼を広げる。

赤を基調に金の縁取りがされたビキニ型のアーマーをつけた人型
の上半身がとても小さく見える。

これが、『合成獣種^{キメラ}／スフィンクス』にして、『グラシャ||ラボ
ラス』の名を持つ魔神。

「ああ、久しいな」

現実でのハンドルネームは、この姿に似合わない「タヌキ」。
そしてそのプレイヤーネームは。

「ネム」

私の呼びかけに彼女は妖艶さを取り除いた、無垢な表情で微笑ん
だ。

それはこの魔界の住人が見れば、さぞ驚いたろう珍しい表情で。

私は少し、胸が痛んだ。

9話 グラシャールボラス（後書き）

最近は忙しきマックスで、久しぶりにPCに向かったら、自分の文の書き方が分からなくなりました。
道に惑っています……。

ま、適当にやりますので適当に応援くれたら嬉しいです。

10話 ラプラスの悪魔（前書き）

急にPVが増えてびびってます。

何故だ、マニアックな仲間たちとちびちびやっていく予定だったのに……

それとも、マニアックな人間は世の中にそんなに多いのだろうか。

ちなみに覇王の方は書き直しています。もし待っている人いたらごめんなさい。

あとruさんありがとうございます。直しましたー。

10話 ラプラスの悪魔

スフィックスは、上半身が乙女、下半身がライオンという奇怪な姿で知られる怪物である。

その出展は、オイディプスコンプレックスで有名な、オイディプスの物語にある。

この怪物は、旅人を足止めし、謎掛けをする。謎掛けに答えられなければ、旅人を谷から突き落としたり、食い殺したりしたという。

フィロソフィアにおけるスフィックスは、悪戯好きだが、奇妙に愛嬌のある種族で、獣人の一種となる。

レア種族ではあるが、なるのはそれほど難しくはないし、ゴナⅡダⅡルーではなくソード・ラインに住むものたちで、初心者でも町で見かけることは多いだろう。モンスターとしてフィールドにいることはなく、全てが知識ある存在として、ヒューマンや他の種族の文化に交わって生活している。

であるからして、彼女は珍しいスフィックスである。そも、ゴナⅡダⅡルーのような文化意識の低い、悪く言えば乱雑な世界を、普通のスフィックスは好まない。彼女たちの高い教養や文化への好奇心は、戦いが重視されるだけの世界には向かないのだ。

しかし、彼女が珍しいのはそれだけが理由ではない。

彼女は、正しく世界で唯一のスフィックスである。

そう、悪魔のスフィックス。

偉大なる悪魔の証、72の悪魔のうち、25番目の大総裁、『人狼（グラシャⅡラボラス）』とは彼女のことである。

赤い炎のように乱れ、そこに調和された美しさがある髪。

酷く女性的でありながら、アイスピックのような冷たい美貌。

東方の出生を物語る、艶かしく艶やかな褐色の肌。

グラマラスでいて、少女のような華奢さ。

そして雄雄しいライオンの下半身、鷲の翼、蛇の尻尾。

様々な要素を乱雑に詰め込み、それでいて一片も損なわれない美しさ。

それが、『スフィックス』と『グラシャールボラス』という特殊な種族とジョブを併せ持った異才、その名を『ネム』といった。

彼女はその巨体がかがめ、私の目の前にその上半身を持ってくる。近寄られると、ふわりと香のかおりが漂う。

懐かしい、と思った。嗅ぐのは初めてだが、『彼女』はよく、そのようなアイテムを集めて、演出に凝っていたのだから。

「相変わらずだな、ネム。そうだ、あのころと変わらない」

私の台詞に、ネムは目を細め、からからと笑った。

「くくく、これだけ変わったのに？」

「ああ」

確かに、人間だったころの姿とは違う。

上半身こそそのままだが、下半身は既に人のものではない。

それに、その身体も、彼が知っていたのはデータだけだったのだから。

じわりと胸に郷愁が広がった。

それを覆い隠すように、言葉を続けた。

「お前は何も変わっていない。そう感じる」

「感じる、か」

それを聞いてネムは、ますます機嫌よさげに笑った。

「ふふ、そういつてくれるのはお前だけだ。あのころの仲間とはたまに連絡を取るが……パトロクロスなどはよくこの姿をからかってくる」

「パトロクロス？」

私は心臓が跳ねるのは感じた。

パトロクロス！？

内心の動揺を押し隠し、私は頭を回転させる。

パトロクロス、以前聞いた、五本松というハンドルネームを持つ同じパーティーの仲間の、キャラクターネームだった。

「全く失礼な奴だ。私の『試練』も馬鹿にして来る……全く、あいつのからかい癖にも困ったものだ。まあ、懐かしくはあるが」

ふっと笑う彼女は美しかった。

結局フィロソフィアでは、彼女が本当に女なのか、それともいわゆるネカマという奴だったのかは分からなかった。

ただ言葉遣いは男だったので、私は勝手に男だと思っていたのだが。

しかしどういうことだ。

現実との接点があるというのか。

あちらに戻っても意味はない。だが、戻れるものなら、私は戻ってみたいのかもしれない。分からない。分からないが、知ってはみたい。

もしかしたら、私のかつてのパーティーは、全員この世界に存在しているのか。

だが、中には、ロールプレイをするのではなく、あくまで現実の

言葉で会話をしていたものもいるのだ。

タブレットというふざけた名前をハンドルネームにしていた友人は、フィロソフィアでも「ちょっ、おまw」、「ちょーブルーなんですけどー」などといった、世界観ぶち壊しの発言で、このゲームを楽しんでいた。

ならあいつは？ この世界には、存在しないのか？ それとも、別人になっているのか。発言だけ矯正されているのか。

そこまで考えると、パトロクロスたちにあってみるのがいいのかと思い始めた。最後にゲームと一緒にプレイしたのは、ソード・ラインであった。あいつは基本的にゴナⅡダブルには来なかったのだから。

大した手がかりではないかもしれないが、少なくとも知らないでいるよりはいいだろう。

そのためにも、まずは目の前のイベントを乗り切らねばならない。

彼女は私に客間でのお茶を勧めてきた。確かに、現実の香りを感じさせるという点を除いても、美女で、私に好意を抱いてくれており、私も好意を抱いている相手。本来なら断りたくはない。例え現実のネムではなくても、この身体の記憶がある。以前のゲームの記憶は、この身体にある、現実の映像として再生されてしまう。そこに伴った感情も、不思議と再現される。

或いは、小説的な表現のように、私の魂とこのヒロイの精神が、融合しようとしているのかもしれない。

そのことに恐怖を感じることもある。だが、喜びもある。安定は臆病を伴い、変革は情熱を纏うのだから。

「そういえば、後ろの彼女がペイモンか？ 彼女のことも紹介してくれないか」

だから、私は誠実さと親和を込めて、彼女に首を振った。
彼女は不審げに私を見た。

「ヒロ？」

「すまない、今日は、友のところへ遊びに来たのではないのだ」

途端、彼女の炎のような美貌がなりをひそめ、そこにしゅんとう
なだれた悲しげな少女が現れた。

口をへの字に結び、目が少し潤んでいる。

私は少し、慌てた。

「そ、そんな……パトロクロスたちは滅多にこちらに来ないし、来
てもコールで連絡を取るくらいしかできないのに……」

「い、いや、あの、ネム」

「う、唯一この魔界に残ってくれたお前まで疎遠になっていくのか
……」

彼女は指で目頭を押さえ、彼女の巨体に相応しい巨大なクッションに倒れこんだ。

「しくしく……」

「あー……」

今までは私の友誼を尊重して、一歩下がってくれていたペイモンの視線を感じる。

泣かせた、とか、女たらしとか、小さく聞こえてくるのは気のせいだと思いたい。

私は素早くネムの背中を撫でて、出来る限り優しく話しかけた。

「ネム」

「……なに？」

美貌の割りにえらく子どもっぽい彼女は、いかにも落ち込んでますという風にどんよりとこちらを振り返った。

私は微笑んだ。そうだ、昔からそうだった。

男か女か、子どもか老人かも分からない。

でも、可愛い奴だとは思っていた。

「すまない。私は今も、お前を大切な仲間と思っているし、出来るならここに滞在したいくらいだ」

ぱあっと明るい顔を見せた彼女は、まるで犬の尻尾のように蛇の尻尾を振っている。

何この可愛い生き、じゃない。

本題を忘れるな、私。

「私には、やらねばならないことがある」

私の真面目な雰囲気、彼女も真剣な視線を向けてくれた。

「私にも新しい仲間が出来た」

ちらりとペイモンに視線を向ける。

ネムも黙って頷いてくれた。

……ペイモンは上気した頬で私を熱く見つめているが、そこは無視した。

「城にも一人いる。守りたい」

「ヒイロ」

「新しいホームなんだ。守りたい」

私は左手に持った顔を、ネムの顔に近づけた。

私の魂が、懐かしいと訴える。ゲームとか、現実とか、過去とか。関係ない。

彼女は、仲間だ。そして同じものを、ペイモンにもパシパにも感じる。それで充分だ。

私を見て、ネムは何かに気づいたように目を丸くし、動揺した声を出した。

「お前、まさか」

「試練を」

ネムは立ち上がった。

3メートルはある巨体が、動揺して後退した。

「『グラシャールボラスの試練』を！」

「！ お前は強く、賢い！ だが、悪魔に変わったばかり、そのダウンした能力では無茶だ！」

「時間がない」

「何故！？」

「戦争が起こる」

ネムは分かりやすく顔を青ざめさせた。

これほどの町の領主、情報はよく把握しているのだろう。

「ローランド……」

「ラトゥーヤの信者たち、そして狂王『シシュフォス』。その子ども、【太陽の王子】、ベレロフォン」

「まさか……ついに奴らは本気で、門を開く気か」

どうやら彼女は私とは違い、酷く現実的な情報源を持っているらしい。

そして、私のように数字やデータとしてではなく、現実的に彼らローランドの者たちを知っているようだ。

この辺りは、冒険者だったころの賜物か。

この魔界で有能な領主として、一定の領土を保持して、生き残っている。その一端は、人間的な感性にあることは間違いない。

彼女は一つ息を吐くと、今度は冷静な表情に戻った。

そこには、ストーム・ガーデンの王としての威厳と決意があった。

「……分かった。お前もそういうのなら、この件は確実なのだろうな……分かった。分かったよ、ヒイロ」

彼女の雰囲気はがらりと変わる。そこには私がプレッシャーを感じるほどの力が溢れている。

そうだ。彼女は一度決めたことは、確実にやる。そんな人柄だった。それはゲームの中でも、よく伝わってきた。

「本当ならば、この城のアーティファクトを渡してやりたいが、これは創り上げた私にしか使えない。私はここを離れられないしな」

彼女の全身から赤いオーラが立ち上る。

それは彼女が強大な魔力を放出している証拠でもある。

薄暗い室内を幻想的に演出していた蝋燭が消え、暗闇に彼女だけが浮かび上がる。

ペイモンが一步下がり、しかし必死の表情で私の隣まで歩み寄ってきた。

恐らくはネムの威圧感に耐え切れなかったか、恥じた顔を隠さない。

今度は務めを果たす。そんな決意を持って、私を庇おうとするの
がありありと分かった。

しかし、私はあえてペイモンを隠すように前に立った。

従僕であるかどうかは関係ない、彼女は可愛い女の子であり、私
の守りたいものであるのだから。

それに、これは圧倒的なプレッシャーだが、別に危険なものでは
ない。まだ、というだけではあるが。

「そして、私のスキル、『悪魔の試練／ラプラスズ・デーモン』は、
その条件として、必ずや試練を要求する」

そうだ。

以前、彼女がこっそりと教えてくれたことがある。

彼女は、グラシャⅡラボラスになったとき、ゲームマスターに近い
権利を、開発者から与えられたと。

グラシャⅡラボラスは特殊なジョブ。ステータスは低いが、領地
経営をする権利と、一つ、イベントを自分の手で創造する権利を与
えられた。

フィロソフィアには、条件を満たしたプレイヤーにご褒美のため
に、特殊なイベントをプレイヤーから意見を聞き、その通りにゲー
ム内で実現させるという画期的な試みがあった。それは時間も費用
もかかったが、フィロソフィアのファンを爆発的に増やすことに成
功した要素の一つだ。

彼女が与えられた権利は、アイテムの創造。

そして、アイテムを他のプレイヤーに与えるための条件のアイデ
アである。

洒落た彼女は、己のキャラクターに相応しい試練を考え出した。

正しく彼女は、サーバマシンたる神へのアクセス権を得たのであ
る。

その神の名は――。

「加護よ、あれ」

ぞわりと、自分の感覚の薄い肌が泡だったのが分かった。
これは恐れだ。

悪魔の魂を持った私が、恐れるほどの、悪意。

父たる神テュポーンとは系譜を異とするもの。古き神。

混沌とした害意、力、まとまりのない圧力。

そこにあるのは顔がない故に千もの異なる顕現。

狂気と混乱をもたらす影。

闇に棲むもの。顔のなき黒いスフィンクス、燃える三眼。

このおぞましき神を我々はこう呼ぶ。

【這い寄る混沌／ナイアルラトホテップ】

ネムの強大な魔力が爆発し、その背後に暗い空間が現れる。

その暗き門の向こうに、食腕、鉤爪、を持ち、ぐにやぐにやと伸縮を繰り返す肉の塊が現れる。

その表面には、声のないまま咆哮を続ける顔のない円錐形の頭部。
おぞましい、おぞましすぎる！

気を抜けば意識を失いそうなほどの圧倒的な力と害悪を振りまきながら、門の向こうに巨大な神が顕現した。

天井一面にまで広がった門から、巨大な三つの目が覗く。

ペイモンは思わず膝をついた。

私ですら、何とかヴォーパルソードを杖代わりにして、立っている状態だ。

ネムは目を瞑ったまま、その口を開いた。

そこから出てきたのは、彼女の艶やかな声ではなく、低く、しわがれ、邪悪と墮落を含んだ音だった。

『汝、欲深きもの。欲するものよ。汝が望むのは、2本の試練か、3本の試練か、4本の試練か』

どこからかくすすくと笑う声が響く。

私は腹に力を入れ、震える声で叫んだ。

「2本の試練を!!」

くすすくと笑う声はきゃははと笑う子どもの声となった。

3本の試練は老人を表す。知恵を要する試練。

4本の試練は子どもを表す。純粋なひたむきさを要する試練。

2本の試練は青年を表す。

『汝が望むは力の試練。見事その力で打ち破るがよい』

食腕が門を越え、私の前に突き立った。

次々とそれが降ってきて、そこに集まり、絡まりあい、肉の門を作り上げる。

『汝が望むは昼か、夜か』

「夜だ、力を、力を与えよ!」

きゃははという笑い声は、魔女の老婆のようなひっひっという引きつったような笑いに変わる。

『よかろう。望むなら、力を、力で得よ。求めよ、未知なるカダス

を求めよ!!」

門は中央を黒い霧に変えた。向こう側に、薄っすらと森と、その向こうに巨大な何かが見える。

完全にこれはどこかに繋がっているようだ。

ゲームと同じだが、その非現実性と、強大な嫌悪感は比較にもならない。

だが、だが。

この夜の試練。越えれば、夜は争いの象徴、力ある装備が手に入る。

それは私のために、必要なものだ。

私が一步を踏み出すと、ペイモンは私の腕に手を添え、共に一步を踏み出してくれた。

顔には脂汗をかき、今もわずかに震えている。痛々しく微笑んだ表情が、私の胸を痛めさせた。

尚のこと、負けられないな――。

私が決意を持って門に向かおうとしたそのとき、混沌の神は食腕で小さな門を作ると、そこから大きな何かを落っことした。

「むぎゃ!」

それは黒いショートカットの間から角を生やしており、人型だが足などに柔らかそうな毛が見える。そして何より大事なのはひっくり返ったせいで白い下着が丸見……じゃない。

「パシパ!？」

「パシパちゃん!」

「いたた……あれ、ペイ姉、ヒイロ、ってスフィックス!? って、うええええええええ!!」 暗黒神!!」

パシパは立ち上がると、驚愕の叫びを上げた。

その顔は私たち同様青ざめている、青ざめているのだが……。その口元によだれがついているのが、なんかもう台無しである。

響いていたしわがれた笑い声は、まったくすすすとした笑い声に戻った。

同時に、食腕が私たちの絡みつき、私たちを無理やり門に向かって放り投げた。

「うおっ!?!」

「きゃあ!?!」

「うひゃああ!?!」

確かに、ゲームでは一度選択すれば強制イベントだったが、こんなやり方でなくとも!!

神に文句を言えず、門を飛びながらくぐる瞬間、確かに私達は声を聞いた。

「ヒイロを頼む」

パシパとペイモンにかけたのだろう言葉に、私は涙腺を緩めた。あの冒険は、現実でも。ゲームでも。

それでも、友情は本物だから。

私は決意を力に変えて、闇に潜っていった。

静かになった広間に、一人スフィックスがぽつんと立ち尽くしていた。

フィロソフィアにおいて、ネムは、グラシャⅡラボラスとなって与えられた権利に大層喜んだ。

友人たちを驚かせようと、凝ったイベントを考え、それが採用されたとのメールを受けた彼女は狂喜した。

それから二ヵ月後、ゲーム内に彼女の城が現れ、イベントを行う新しいコマンドが増設されていた。

いつでも冒険などに外出できるよう、NPCを設定して、もう一人のネムが自動でイベントを進められるようにもなっていた。

彼女が寝ている間にも、多くのプレイヤーが城を訪れ、アイテムを求め、栄光を手に入れ、また破滅を受けた。

そしてやがて彼女の城は狙われるようになる。

NPCにイベントを任せ、彼女は城の防備を強化し続けなければいけなくなった。

悪魔の試練は他のプレイヤーにのみ適用され、彼女はゲーム内時間で一日一つアーティファクトを作ることが出来た。それで戦う人形を作り、城の防御を堅め続けた。

毎日続く作業。仲間との冒険も少なくなった。

仲間たちも、最初は彼女のそばで、彼女を助けてくれた。でも。

彼女の城が完成し、アイテム狙いのプレイヤーを寄せ付けなくなると、彼らは、ソード・ラインの未知の探求に戻っていった。

一人、また一人……やがて彼女は一人になった。

でも、ヒイロは、残ってくれた。

やりがいがあったが、寂しかった。寂しかったが、いえなかった。でも、ヒイロは察してくれた。察して、こっちに残ってくれた。

彼は冒険にもよく出たが、ゴナⅡダールの城に戻ってきてくれた。たまにだが会いも来てくれた。

ネムは、嬉しかった。

ここにいる彼女には、その記憶はない。
でも、魂が覚えていた。

「タヌキ、か……」

何だか分らない。分らないのだが、ヒイロはそれを私に聞いてきた。私は隠していたが、内心心震えていた。

何だか、暖かく、懐かしい響きだ。

その眩きは、閉じた門の前で、虚しく霧散した。

彼女は真摯にヒイロを案じ、そのうち、ぷっと笑いをこぼした。

「やっぱり女ばかり……少し妬けるじゃないか」

彼女は知っている。ヒイロは強い元人間で、今は、とても強い悪魔なんだと。

だから彼女はゆつくりとクッションに身体を横たえ、たまに来る冒険者や、魔物たちに、いつも通りに試練を与えるのだ。

「欲深きものよ、汝は我が試練を望むか？」

彼女はラプラスの悪魔。悪戯好きのスフィックス。人狼のグラシヤⅡラボラス。

彼女に与えられる力は、未来すら歪めるという……。

11話 悪意の森（前書き）

そのうちお話ごとに題名つけようかと思っています。

なぜなら私も話を把握しきれなくなってきたので……読んでくれて
いる人もそうかも思っております。

多くの人が見てくれていることにちょっとびっくりなので、少し人
の目も気にしていこうかなと思う今日この頃です。

4月26日 雑だったので少しずつ修正中。

11話 悪意の森

ナイアルラトホテップという名前は、余人にはあまりなじみのない名前かもしれないが、ゲームや小説を嗜む、それも多少斜に傾いた趣味を持った人間なら、知っているかもしれない。

ある小説家の作り出した壮大な『架空』神話に出てくる、邪悪な神の一人である。

このフィロソフィアにあつては、父たる神テュポーンとは系譜を異とする古き神の支柱とされる。

その特性は、狂気と混乱をもたらす影。

その忌み名は、闇に棲むもの。顔のなき黒いスフィックス、燃える三眼。

無貌なるがゆえに、千もの顕現——つまり己の分身を持つという。時には不気味なアラブ人、時には美しき女性、科学者、探偵……ありとあらゆる場所に存在する、それゆに顔のなき神、無貌。

であるからして、私の目の前に立つこの不気味な、不気味としか表現しえないオーラをまとった男。

ターバンを巻き、ゆったりとした黒いローブをまとった、端正なアラブ人の正体は。

知識があるがゆえに、私は恐れてしまう。

画面越しとは違う、生の悪意を浴びてしまった私は恐れる。

この男が先の肉の塊と同等の存在の可能性がある。それだけで私は一步をあとずさってしまうのだ。

無言の私と、その私を興味に満ちた目で見つめてくるアラブ人、一歩さがった位置で警戒をあらわにしたペイモン。

私達は何もない、本当に何もない、ただ薄暗く、どんよりとして、

草一本生えない砂漠に立ちすくんでいた。

三人のいつまで続くかと思われた緊迫した空気。

それをぶち壊したのは、私のすぐ横から生えた足であった。

正確には、「砂の大地から逆さに生えた二本の足」である。

艶やかな浅黒い肌、皮のロングブーツからわずかに見えるもこもこした毛。

『うわーん！ 何ここ、出して！ 暗いよー！ ペっ、ペっ、ヒイロー！ ペイ姉ー！ うええーん！』

「……」

「くっくくっく」

アラブ人は口元を押さえて上品に笑った。いたって普通の笑いではあったが……。

パシパ、すごいな君は。邪悪な神を笑わせているぞ。

脱力した私とペイモンは、とりあえず二本の足をつかみ、砂からパシパを引っ張り上げるのだった。

「うゝ」

結構な時間をかけ救出し、ペイモンが今の状況を説明すること、私の体内時計で5分。

顔を真っ赤にしたパシパに、危険なイベントに気負いなく参加を承諾してくれたことへの感謝と、限らない優しさを込めた無視を送りつつ、改めてアラブ人と向かい合った。

アラブ人は端正ながらも不気味な容貌という何とも表現しがたい容姿をしていたが、今は微笑んでいるせいか、もはや恐怖は感じら

れそうにない。

すべては奇抜な登場をしてみせたパシパのおかげなのだろうが、正味複雑である。

「いや、面白いな。あのような登場の仕方を見たのは、初めてだ。ここにも長いこといるのだから」

「……それで、この試練とは何だ？」

「全く愉快だ。今まででも多くのものがこの試練に挑んできたが、真面目なものばかりでなあ。つまらんつまらん。やはり生とは愉快でなくばね」

「それで、試練を」

「悪神の試練をこうも和ませてくれたのは、君のパーティーが初めてだよ。誇りたまえ」

……こいつ、嫌な奴。

思えば当然なのかもしれない。このアラブ人は悪神ナイアルラトホテップの分身、貌の一つのはずなのだ。

先ほどの門から出でた存在は吐き気を催す邪悪であったが、この男は『くさや』をポットに入れた程度の不快感だ。

ナイアルラトホテップはかの神話におけるトリックスターとも呼ばれる存在、それを擬人化するとすれば、このように悪戯心のあるものになるのだろう。

くくくと粘っこい笑みを残し、アラブ人は姿勢を正した。

「さて」

大げさに腕を振り上げ、唇が裂けそうに思えるほど忌まわしく嗤う。

「ようこそ、我が『主』、ナイアルラトホテップの試練へ！」

ブラフ。

こいつ自身は枝だ。

ナイアルラトホテップの端末めが、神の癖に、戯れるか。

「この試練は君たちの仲間を全て呼び出して行う試練だ！ 数はランダム、場所もランダム、方法は戦闘のみ、相手は——」

アラブ人が気障にも指を鳴らす。

すると、何も、何もないはずの永劫の砂漠の背景が、歪む。

蜃気楼か？ いや、違う。

現れていく。

緑ある大地。

豊かな木々。

アラブ人の足元を境に、どこまでも続く大地にラインが入っている。砂から緑へ。

ただし、それは人のイメージする穏やかな世界ではない。

ねじくれた、いや狂った木々。腐った葉っぱ、腐臭のする風。

ゴナールなど比較にもならない、おかしくおぞましい世界。地面からはまっすぐに生えているのに、途中で洞が大量に存在し、であるのに直角に曲がり、時には斜めに螺旋を描く。

それでいて太さは成人男性が五人はいないと抱えきれないだろう太さで、高さが20メートルはある巨木。それが、東京のビル街のように無限と広がる光景。

そこは正しく、正しくそうなのだろう。

「森、だと……」

「そうだ、今日君たちが挑戦するのはここ、『狂った森／クレイジィ・ブッシュ』だ！」

そう告げるアラブ人は気配こそ薄いものの、間違いなく悪神、邪悪の表情をしていた。

急速に取り戻される緊張感。

直視することもままならない鬼気とした悪意。その背後の森から感じる、汚泥の空気。

私は今、フィロソフィアという枠を飛び越えた、真実の世界にいる。

それを身体全体で実感した。

甘かったのか。

そう、心を挫かれるほど、恐ろしい世界。

肌で感じる。生で見たものには理解できない、リアルの第六感。もしかしたら、一人のデュラハンとして、隠棲したほうが良かったのか。

それとも、人に化け、ちまちまとした一生を送るべきだったのか。わずかなりとも、そう思わせる力が、そこにはあった。

もし私がただの人であつたなら、心も折れたろう。

そして一人であつたなら、何かを諦めたらう。

だが――。

「ふんだ、それが何なのさ。どんな相手だってやってみせるよ、僕たちはね」

虚勢、なのか？ パシパも少し息苦しそうだ。

「そうです。ここにいるヒロ様は偉大なるお方。私たちもおります。何の問題ありません」

いや、信頼なのか。ペイモンも顔色が悪い。それでも、尚彼女た

ちは猛々しい。

短い間に、得たものがある、ということか。私にもな。

私はヴォーパルソードを肩に担ぎ、できるだけ獰猛な顔をしてやった。

そしてその顔を掲げる。

「試練、望むところ。私達は、負けはしない」

私の心は、変化している。

人の心を持ったまま、悪魔の強さを得ている。

少し前の私は、死んでいた。心が死んでいた。

私は人の世界では、そこそこに『万能』で、『孤独』だった。

しかしこの世界では、『不完全』で、『弱虫』だ。

折角得た温もりを、失いたくはない。そのために、戦う。失わず、戦う。

そう決意したのだ。

「仲間がいれば、強い。絆は力だ」

私の言葉に、ペイモンもパシパも笑顔を見せてくれた。そう、私の言葉は、2人に向けたもの。

この男が理解してくれるとは思っていない。だが、少し素直でないところのある私なりの、小さな感謝だ。

だがこの男は、どうも私の理解を超えていたようだ。

「ふはは」

アラブ人は不思議なことに、それほど不快でなく笑った。人間臭い笑みに、思わず私も眉を上げた。

「くくく、そう。この試練に呼び出されるのは、『志同じくするもの』！ 生物はだから面白い！ この悪意を前にして、和、絆、信頼、そんな青臭いもので押し通る！ 時に勝ち、時に負け、そんな人生劇を、ナイアルラトホテップは求めているのだ！」

この神は、複雑な存在なのだろう。小説を嗜んだ私は、フィロソフィアのナイアルラトホテップの『元』を多少知っているから、おぼろげにイメージできた。

ただ興味のままに動き、敵を倒し、時に助ける。味方を欺き、裏切り、慈しむ。そんな、いくつもの貌を持つ存在。

それに、この男。

ゲームのフィロソフィアとは全く違う。

実は、スフィンクスの試練の中に、こんなキャラクターは存在しなかった。確かに多くの貌は存在したが、こんな男はいなかった。私は友人のイベントということで、20は軽く越えるほどこのイベントをこなしているというのに……。

まして、仲間を強制的に呼ぶなど、そんなイベントはなかった。

これこそが、現実の証明か。

ここはやはり、少なくとも私にとっては、現実の世界なのだ。

「ならばよし、行くがいい！ この森にいる『ただならぬ悪意』を打ち倒してみせよ！ そのときナイアルラトホテップは、異空間に浮かぶ偉大なる武具を授けるだろう」

「言われずとも」

腑に落ちない部分もある。だが、まずは力だ。

私はマントを翻し、森に足を向けた。多少格好付けすぎかもしれないが、私なりの景気づけだ。やはり躊躇なくついてきてくれる2

人に力を貰いながら、私達は不可思議な森に消える。

そしてアラブ人は見送る。

森に入る英雄たちを。或いは、英雄たちの卵を。

微笑を乗せて。人はそれを似合わぬと思うかもしれない。邪悪な神には全く似つかわしくないと。それは少し、違う。

彼は『無貌』。それは同時に、全てでもある。

邪悪な悪意の肉塊であり、慈愛持つ純粋な人間でもある。

「二つの魂を持つものよ。君の人生はとても興味深い。願わくば、どこまでも私に、面白いストーリーを……」

アラブ人の周囲に、黒い雲が出現する。

雲は白い雷を発しながら、徐々にアラブ人を覆い隠し、ばちばちと火花をたて、やがてその姿を覆い隠す。

全てを隠したとき、雲は消え、そこには既に誰もいない。

ただ、声だけが響く。

「元の世界のように無色でなく、どんな色でもいい、激しい生を見せてくれ……」

神は門の向こうに戻る。

枝たちは、どんな場所にもいる。どんな世界にも存在する。

「ナイアルラトホテップは、ただ面白きものの傍にある」

森に足を踏み入れた一同を待ち受けていたのは、異界の生物たちだった。

そのどれもが巨大で醜悪な様相をしており、そこに生物らしさはなく、ただ凶悪であった。

魔物と呼ばれるテュポーンの子どもたちとも、神々の直系の子孫たる魔族とも違う。

異界の系譜に連なる、奇異なる怪物であった。

「うおおおお！」

私は巨大な木の根を使い飛び上がり、高く飛び上がる。悪魔になってからの身体の使い方は、呼吸するのと変わらぬように私は理解できた。

しかしそこには確りとした爽快感があるのが常なのだが、今はそれも感じない。

叩きつけたヴォーパルソードがめり込む感触に、顔が歪む。

真っ当な精神ならば誰でもこうなる。

相手は、巨大な、軽貨物自動車ぐらいのウサギだ。

ただし、顔の部分のみ白骨化し、その耳からは青色の触手が生えているが。

醜悪に過ぎる！

おぞましい悲鳴を上げるそれから剣を抜き、頭を足蹴にして飛びのく。

そこに私の後ろから放たれたウィンド・ブリットが傷口に突き刺さる。

ごろごろと転がりながら手足を苦しげに地面に叩きつけると、緑

色の血と青色の苔が空を舞う。

「とおう！」

そこに止めと言わんばかりの、パシパの全力。怪力の彼女が投げたのは、そこら中に落ちている30センチはあろう岩石だ。

それがウサギの白骨化した顔面を砕いたとき、終に怪物はその生命を止めた。

ぐったりとしたウサギは、既に7匹に及ぶ。

全てが一つの群れなのだろう。

1匹に遭遇するとすぐに奇怪な叫びで仲間を呼び、私達は苦戦を余儀なくされた。

ゲームとは違う。

それは理解しているつもりだが、しかしこの試練の特徴。

『勝てるぎりぎりの強さの敵が現れる』

そんなルールは生きているらしい。

私たちは3人いるが、スペックで言えばウサギ1匹と私はほぼ互角。

だがバランスと戦術で辛くも勝ちを拾っている。実際にゲームでも、偏ったパーティー編成ではかなり厳しい。理想は前衛と後衛、攻撃と回復、この四種類は確立していきたい。

もし火力で押したりするのならば、かなりの高スキルが必須である。

しかし、生憎と我々は前衛2の後衛1。ペイモンはしっかりと確かめたわけではないが、ゲーム通りならば回復スキルは持たない。それにパシパは恐らくジョブすらないであろう。

そのような編成。無論、時には危険に陥る。

突然横合い、巨大な茂みを突き破って現れたのは、顔のない猿。大きさは3メートルはあるか。のっぺりとした顔の部分に、しかし

口だけは気持ちの悪い笑みを浮かべている。
とっさのことに私は反応できず、もろにその豪腕を受けてしまった。

みしみしと音を立てる鎧は、それでも碎けず。しかしめきめきと音を立てて、私の肋骨は粉碎した。

「ぐうっ！」

痛みはない。それでも感じる不快感。身体に感じる違和感。
そして巨木の幹に私は叩きつけられる。

このパワー、スピード。私に迫るものがある。確かに素体のスペックは私が遥かに上だが、恐らくレベルは相手が上。
それゆえに互角。

幹はひび割れ、体が埋まる。

そこに猿の右腕が叩き込まれた。

「がぁっ!!」

痛みはないのだが、やはり体が重くなる。

呼吸が苦しくなる。まずい。

動けぬ私が幹からずり落ちると、猿は私に馬乗りになった。
そして私が抱える兜めがけて、その豪腕を振りかぶる。

この世界が現実ならば、ヒットポイントなど、体力と頑強さの指標に過ぎない。ならば頭を潰されれば――。

「だぁぁぁ！」

間一髪、パシパのタックルが大猿に決まった。

吹き飛ぶ猿は、私が寄りかかる巨木にぶつかり、黒い血の花を咲かせた。

私の黒い鎧が、よりどす黒く染まる。

パシパは勢いあまって私に馬乗りになって、心配そうな顔を近づけてきた。

「ヒイロ！ 大丈夫？」

「……ああ、だが、体が重い……やってくれる……」

私が上半身をゆっくりと起こそうとしたとき、また奴らは間断なく襲ってくる。

今度は蜘蛛だ。巨大な蜘蛛がパシパの真上から降ってきたのだ。尻から糸を繋ぎ、まるでレスキュー隊のように急速に落下してくる。これも巨大すぎる。3メートルはあるか。

当たれば、潰される！

しゅわしゅわとどこか炭酸飲料のような音を立てて急速に再生していく私の骨が、無理な動作に悲鳴を上げる。しかし、今はそれどころではない！

最速でアタックアップを唱え、パシパを押しつけて剣を構える。

ぎりぎり、いや、こちらがわずかに遅い――！

そう頭を掠めたのだが、そこはさすが、優秀な後衛、ペイモン。彼女が唱えたウィンド・ブリットが、蜘蛛の体をわずかに押し留めた。

頑強な蜘蛛の体はそれに耐えたが、落下はわずかに遅れる。

それは、私の剣がその命を刈り取るに十分な時間だった。

「ぜあっ！」

ヴォーパルが体に反して小さい口にねじ込まれ、その巨体の背中から突き破った。

だが、勿論剣だけでその重量を支えきれるものでもない。ずしんと体にかかる重み。

私は蜘蛛に押しつぶされたが、速度が落ちたおかげで、頭は守りきることができた。

無論ダメージはあるが……。

「ヒロ様！」

焦った表情のペイモンが、私に元気をくれる。

オートスキルであるテロメアが私のヒットポイントを回復させるのを実感しながら、私はペイモンとパシパの肩を借りて立ち上がった。

さて。

「まだ来るか」

ぎゃあぎゃああと奇妙な鳴き声が聞こえる。

木々がざわめく。

迫ってきている。

今までの戦いとは違う。ぎりぎりの戦い。

体は辛く、心は痛い。

それでも、戦わねばならない。

現代日本人の私には、痛覚がないことと、悪魔の感性を得たことは大きな意味を持っていた。

これがあるから、私は戦って、抗って、殺せる。

ざわめきが近くなる。

私は二人から手を離し、何度目かは分からないが、信頼するヴォーパルを構えた。

なんとも悪質なイベントだ。ゲームでは感じない疲労、恐怖、地の利……そしてもっとも恐るべきは、このイベントの場所も、怪物も、私は知らないということだ。

彼らは私にとって、巨大なウサギで、猿で、蜘蛛でしかない。

これはゲームの世界ではない。今正に広がり行く、現実。

或いは、ナイアルラトホテップは、今の私の全てを見越して、このイベントを一から用意したのではないだろうか。

ヴォーパルの切っ先が震える。

悪い想像だ。私の能力だけでなく、性格、仲間、そして『チートな知識』、それらを含めて、ぎりぎりのラインのイベントを用意した、などと。

もし、もしもそうであるならば……。

「ヒロ！」

パシパの掛け声にはっとする。

運がよかったのだろう。

はっとして顔を上げると、巨大な蛙が私の頭上にいた。

だが、偶然切っ先が上を向いていたヴォーパルをそのまま突き出すことであっさりとその白い腹を貫く。そのまま剣を感情のままに横に払うと、蛙は腹を半ばまで切り裂かれ、私のそばに転げ落ちた。げこげことうめきながら、蛙は息絶えた。

私は背中に流れる冷たいものを感じた。

「ヒロ様？」

そつと腰をかがめ、私の額をハンカチで拭ってくれるペイモン。彼女の美しい顔を見つめた。私はただ見つめた。そこには二つの漆黒がある。

奥行きのある、深い、深い、黒……。

もしもそうであるならば、あの神は、私がどういう存在か知っている？

私の故郷がどこにあり、どうしてここに来て、なぜこうなったのか？

もしかすると、あの神は、知っているのか。

故郷にどうしても、命をかけて帰りたいわけではない。それでも、何故だろう、私の心は震えた。

「……とにかく移動しよう。ここは、血の臭いが濃すぎる」

テロメアは内部に至るような傷には時間がかかる。

しゅわしゅわと傷口がふさがっていく光景は衝撃的だが、『再生（小）』なテロメアの効果は、あくまで現実的に留まる。

私がペイモンとパシパを促して駆け出すと、同時に背後に多くの怪物が現れたようだ。

だが彼らは、あくまで目の前の餌を優先するらしい。

幾つかの獣がこちらを見たものの、そばにある屍肉をついばみ始め、私達は無事に戦域を離脱することができた。

隣を走るパシパと、少し後ろを走るペイモンの視線を感じる。

だが、私はそれに答える術も、覚悟も持っていない。

森は不思議と明るい。

だが、その明るさはなぜか不快感を煽った。

12話 甘美な夜（前書き）

勢いで書いた。今は反省している。でも後悔はしていない。

12話 甘美な夜

ぱちぱちと音を立てて、火の粉が飛び散る。

その様をぼんやりと見てみると、一時、疲れを忘れた。

静かに過ぎる時間の中で、そっとその火の向こう側を見る。

すーすーと静かな寝息をたて、パシパが寝ていた。

体は大きい、その寝顔は大層あどけなく、愛らしい。

時折口の端から光るものをたらず、でへへと笑うのは笑顔を誘った。

私の笑顔を見て、ペイモンもそっと微笑んだ。

彼女はパシパのすぐ隣で足を器用にたたみ座っている。

「ペイモン、寝てもいいのだぞ？ 何度も言うが、テロメアのある私に休息は不要だ」

「大丈夫です。私も魔力しか消費しておりませんから。こうしているだけでいいのです」

ペイモンは優しく応えてくれる。申し訳ないが、咄嗟に襲われでもしたら私一人で対応できるか分からない。甘えさせてもらおう。そう考えながら私は、枯れ枝を火にくべた。

私達は、今は交代で見張りをしながら、体を休めていた。

この鬱蒼とした森はなぜか太陽もないのに、その景色を薄暗く変えた。

夜になり獣たちの活性化を恐れた私は、疲労感もあって巨木に囲まれた視認性の低いエリアを探し出し、小さな焚き火を作った。

フィロソフィアでは、徒歩を止めるだけで少しずつ体力やマジックポイント、スキルポイントは回復する。

もったも、それらは宿で休んでも完全に回復するというようなものではない。寝るほうが効率はいいのだが、現実的な世界観を再現するゲームにとって、そういったシビアな設定は必須のものだった。であれば、こうして座っているだけで回復する量などたかがしれているのだが、まだレベルの低い私たちにとっては重要なファクターだ。

特にペイモンはスキルポイントを多く消耗している。彼女のミュージックスキルは我々の生存には絶対に欠かせないものであるため、こうしてこまめに休憩をとっていた。確かにパシパも体力を消耗していたが、何よりもペイモンのための休憩という意味合いが大きい。極端なことを言えば、ペイモンにチャームミュージックを唱えてもらえば、あっさりとの森を踏破できるはずだ。

今は目的地も定まらず、手探りなためこのスキルは温存しているが、何らかの手がかりがあれば、一気に、とは思う。

私は隣にいていた自分の頭を抱え込むと、それをペイモンの方へ向けた。

いちいち抱えないと相手を見て会話もできないというのは不便だが、今では大分なれた。

「……すまない。大変なことに巻き込んだ」

「そんな、私、ちっともそんなことは思っておりません」

パシパちゃんもきつとそうね、といって彼女がパシパの頬をつつく、むにゃと笑みを零し、またでへへと笑った。

くすくすと微笑むペイモンは、はっとするほど美しい。正真正銘悪魔なのだが、その様子はどちらかと言えば天使と呼ぶに相応しい。長くしっとりとした黒髪はこの環境でも少しの濁りも見せず、細められた金色の瞳は優しい輝きを放っている。

足こそ駱駝だが、その座り方は気品を感じさせるし、もし元の世

界であれば大和撫子と評されたことだろう。

そんな彼女がそのままの表情で私を見つめてくると、少しどきりとした。

「私は、感謝しています」

彼女は今、悪魔として私と、いや、バルバスと契約している。

それは彼女にある利益をもたらし、代わりに奴隷になるという制約を与えた。

そしてその制約のせいで彼女は長い間呪いのジョユにこき使われることとなった。

そういう契約なのだ。彼女は主であるバルバスには逆らえず、抵抗できない。

ジョユは彼女を雑用として以上使うことはなかったが、その気になれば彼女を手籠めにすることも、自殺させることすら可能だった。そのような緊張感を抱いたまま、ずっと長い時間を過ごしてきた。ひたすらに、あの城の中に閉じ込められていた、籠の鳥。

それを開放してくれたのは、私だと、彼女はそういう。

「偶然だ。私はたまたま」

「いえ、あなただけなのです。50年、50年で、ヒロ様だけが、私に気をかけてくださいました……」

彼女はその頃を思い出してか、そっと顔をうつむかせ、一滴、零した。

彼女の過去は知っている。彼女は、呪いのジョユに奴隷として働かされ、侵入者があれば相手をし、時には滅多打ちに負けた。それでも、ジョユの呪いの力で、死の淵から蘇り、相手を倒すまで戦い続けた。優しい彼女には、これ以上ない拷問であつたろうことは、

感受性の鈍い私でも理解できた。

そして彼女が再び顔を上げたときには、それはすでに滴ではなくなっていた。

「わ、私は……一目惚れでございました」

泣きながら、頬を赤く染める。妖艶と無垢、相反する美だった。

「あなたに斬られる気でした。その雰囲気や、お顔、声、それらを、ぐすっ、好きになってしまったのです。くっ、んっ、そんな方に優しくされて、私は、もう本気なのです」

ペイモンは素早く立ち上がると、体当たりするような勢いで私の胸に飛び込んできた。

足をたたみ、私の傍で崩れ落ちるようになだれかかる。

私は鎧をはずし、灰色のシャツ一枚となっていた。そのシャツに、薄っすらと染みが出来る。暖かい水がしみこんでいく。

「お傍に置いてください。愛してくださなくても構いません。奴隷でも従僕でも、ただお傍に……」

彼女は感極まった様子で、私の胸で静かに泣き始めた。

……私の心境を一言で表現してみせよう。

『どうしてこうなった?』である。

私はただ、彼女に謝意を伝えようとしたただけなのだが。少し彼女の髪を撫でながら、思案する。

私は少し、彼女が情緒不安定だと思っていた。

天然で、しとやかで、時々暴走する。そんな娘だと思っていた。いや、具体的にはたぶん女、なのだが。

ともかく、私を慕ってくれているというのはまっすぐ伝えてきてくれたが、どこか私には他人事のように映っていた。

それはなぜか、私に惚れる要素が見当たらなかったからだ。だから、いなしてきた。

でも、違った。

彼女の言葉は、すんと私の中に納まった。

そうか、私の見た目が好きだったのか。

持って産まれた容姿というわけではないが、今ではこの顔が私の顔だと思っている。

そうか、私の見た目が好きで、優しくされて、好きになったんだ。今までは、気の迷いだと思っていた。でも、彼女が本気ならば……。

少なくとも、そんな簡単に、嘘をつける子ではないということぐらいは知っている。じゃあ、本気じゃないか。

私は少し、彼女を支える腕に力を込めた。

辛い思いをさせていたのか。

少し、反省して、それ以上に、嬉しい思いが駆け巡る。

彼女は、私がどこか一線を引いていることに気づいていたのだろう。私は元の世界に帰るかもしれない身であるし、従者の立場を崩さない彼女への最低限の礼儀という意味もあったが、彼女はそうは思わなかった。

そしてこの戦闘、疲労。確かに彼女は疲れていた。そこで、たが

が外れたのだろう。

疲労が心を弱くし、彼女に本音を吐き出させた。ああ、この娘は、私に依存している。暗い喜びが産まれた。

私は孤独だった。だが、この娘は私を必要とし、愛している。

そこまで考えて、私の心は燃え上がった。

私の中にしまいこまれていた独占欲、支配欲、野心が、鎌首をもたげた。

「あ、あの、私ったら、なんてことを、疲れていたのかしら……って、あの、あの、すいません、ヒロ様、すいま——」

一泣きして冷静さを取り戻したペイモンが、私の腕の中で暴れる。照れているのか、顔は真っ赤だ。

ここで私は情欲を自覚した。

気づいたときには、私は自分の頭を胴体の首に繋げていた。別に不思議なことではない。少し動かせばずり落ちるが、乗せるだけなら簡単だ。

そして、彼女の唇を奪っていた。

悪魔になった彼女は、契約によって過去を封印されている。

契約とはそういうもので、彼女は過去を誰にも明かせないから、本来の性別も分からない。

性を『失っている』のだ。

だが、私は貪った。

噛み付くようにキスをし、奪いつくすように舌をいれ、かき回した。

ぐちゅぐちゅと唾液がかき混ぜられる音が響く。

しばしそうしてから、私は唇を離した。

ペイモンの舌と私の舌は唾液の糸を引いていた。

切なげに潤んだ瞳があり、上気した頬は快感を示していた。

「心も体も、魂も、私のものとする」

私の視線は炎を帯びていたことだろう。

攻撃的に、支配的に、欲情していただろう。

そんな私の視線を受けて、ペイモンは、ぶるりと体を震わせ、しつとりと微笑んだ。

「はい」

今度は静かに、どちらからともなく唇を合わせた。

この森に夜はない。ただ一日の半分、かなり明るく、半分、明かりが弱まる。それだけの世界。

ぱちぱちと音がなる中、私達はずっと2人だけの情事にふけっていた……。

私の心は弱い。

さつきナイアルトホテップが私の世界を知っているのではと考えて、この世界から逃げたくなった。帰れるならば、刺激のない、危険のないあの世界へ、とも思った。

だが、今は違う。

帰ることに興味はある。だが、興味だけだ。帰れば帰るかもしれない。でも、どちらにしても、どんな困難があっても、彼女は連れて行く。

彼女は楔だ。

甘く、艶かしい、刺激的な、楔……。

私の胸を貫く、悪魔の楔……。

13話 悪魔の鮫と悪魔の獅子（前書き）

少し展開が急と自覚してますが、手と気のむくままの話なのでそのまま上げました。鮫ちゃんは私の中学二年生の発想です。

13話 悪魔の鮫と悪魔の獅子

静かに夜が明ける。

夜の獣たちの襲撃もなく、私達は平和な朝を迎えようとしていた。切り倒した丸太に腰掛けた私の隣に――隣と呼ぶにはいささか近すぎるかもしれないが――頬を紅潮させたペイモンが座っている。

ペイモンはどこか虚ろな瞳を空に向け、時に口元に笑みを浮かべ、いやいやしながら何か一人でもだえていた。

もしかしたら、朝になったことにも気づいていないかもしれない。そして私は、ペイモンの膝に頭を、あくまで頭だけを乗せて、意味もなく消えた火種を見つめていた。

いや、正確に表現すれば、火種の隣にある顔を見ないようにしていた、である。

なるほど、じと目とはこういうときに使う表現なのか。

じとつ。

なるほど、言いて妙である。向けられたほうはなんとも体が重い。そんな何とも人を粘着質にさせる視線を送ってくるのは、火種の隣でうつぶせに寝転がって顔だけこちらに向けるパシパだ。

彼女も黙っていれば相当なクール系美人だ。長くボリユームのある睫毛、整った鼻筋、形のいい眉、猫のように妖艶な目。

口を開けば明るくどこか幼いというは彼女の大きいなる魅力の一つであるのだろうが、今回はそのクールな目が痛い。

転がったせいで髪が乱れ色っぽく、重力に負けずに屹立する豊満な胸はとても魅力的だ。その目がなければ。

じつとり。

……とても気まずい。

何か言ってくれればいいのだが、彼女は目を覚ましてからもう15分ほどそのままである。

「……」

「……」

「……」

「……ごほん」

「……」

勇気を出そうと開かれた私の口も、即時閉店である。

どうにも気ままずくなって視線をさ迷わせる私は、彼女から見ても情けなく見えたのだろう。或いは、情けないからこの視線なのか。

私を攻め続けること、さらに5分。彼女は呆れたようにため息を吐いて、立ち上がりながらやっと声をかけてくれた。

「ヒロのドスケベ」

「……うぐ」

やっと喋ったらそれかとか、どこから見えていたとか、それは違うとか、いいたいことはたくさんあったのだが、私は何か言う前に、彼女は顔を洗ってくるというって、近くにあった小川のほうへ歩いて行ってしまった。

私は頭を抱えようとして、その頭がないことに気づき、奇妙なポーズで停止してしまったのだった。

「あん、もう、私ってば……そんな、だめです、ヒロさまあ……」
「……」

何だ、このカオス。

そんな心の眩きが表すように、初日とは打って変わって浮ついた雰囲気の中、私たちの戦いは再開したのである。

「もう！ ヒイロは本当にすけべなんだから！ こんな状況で何考えてるのさ！」

「あらあら、パシパちゃん。だめよそんなこと言っては」

ぷりぷりと頬を膨らませ、足をがに股にして肩を怒らし、「私、怒ってます」と主張しながら歩くパシパ。
めつと全く怖くない叱りを送るペイモン。

「ペイ姉もずる……非常識だよ！」

「本音が出てるわパシパちゃん」

パシパの奇妙ないい間違いを指摘し、ペイモンは悪戯な表情で微笑む。

「それに、ヒイロ様はすけべでも格好良いわ」

「むう、それは……否定しきれない事実だけでもだよ」

私は変な会話をする2人の後ろをとぼとぼと歩く。褒めているのかけなしているのか、判断に困る。

まあこんな会話ができるぐらいには、平和だった。

私達は初日と違い、順調に森の奥へと進んでいた。初日の激闘はなんだったんだとすこぶる拍子抜けである。

奥に行くに連れてなんとなく嫌な気配は強まっているようにも思えたが、反比例して怪物たちの数は減っていた。

今日にあってはなんと一度も遭遇していない。

なんとも妙だ。

あのナイアルラトホテップの試練、そう簡単に終わるはずもないのだが。

もったも、この何を倒すか分からないという状況も、中々悪辣と考えることもできる。

内心ではそんなことを悶々と考えながら、三人はやいのやいのと進んでいく。一人なら心細くもあろうが、割とのんきな三人組である。

足も進むし、二日目ともなれば、さすがにこの足場にも慣れたものだ。

苔むした巨大な木の根を飛び越え、ときに草の根を掻き分け。

そうして我々がたどり着いたのは、一本の巨大な木だった。

「なんと……」

しかし、信じられるだろうか。この木は、今までの木とは桁が違う。

ざっと見ただけで、全長100メートルはあるだろう。さらにそこに実る針葉は、50メートルは広がっている。

一見すれば巨人の茸のようにも見えるが、そこに宿る神々しさは類を見ない。

その神々しさを象徴するように、今までに見慣れた不気味な木々はこの木の周囲には生えていない。

ただ短い草が生えるばかりで、その草もいたって普通の草でしかない。

周囲の状況と見比べれば、逆にこの木が以上であることは間違いない。

ない。

「すごい木だー、はじめてみたよ僕」

「本当に……それに、何だか、力を感じます。そう、色のない力、無色の……」

ペイモンの言葉に、私は少し思うところがあった。

このような台詞、フィロソフィアの中で聞いたような覚えがある。あれは、どんなイベントだったか。いや、イベントというか、何度も何度も聞いていたはずなのだが。どうして思い出せないのか、私もゲームになれすぎて、細かい部分は――。

私がもう少しで記憶の糸口に手をかけられる、というタイミングで、隣にいたパシパがびくりと体を震わせた。

すわ敵か！ と視線を向けると、彼女の体は緊張で筋肉が盛り上がり、汗が吹き出て、目は見開き、牛の垂れているはずの耳が緊張でくりくりと周囲をうかがっている。一瞬にしては尋常でない変化だった。

どうしたと声をかけようとして、彼女の震える声にそれを止めた。

「何か、いる……向かってくる、よ」

パシパは私のマントを掴んだ。

弱い仕草だった。

ミノタウロス。

獣人種といえば犬人や猫人と呼ばれる種族が一般的だが、牛人種にカテゴライズされる彼女も、一般的な獣人の枠に収まる。

そして、獣人のほとんどの種類が持っているスキルがある。

常時発動型のスキル、『野生／ワイルドライフ』である。

その効力は種族ごとに多様性はあるものの、基本的に共通しているのは、バックアタック阻止、遠距離での敵発見（ただし発動はランダム）、生育エリアでの能力上昇である。

今パシパが感じているのは、ランダムで発生した遠距離での発見になるのだろう。

まあ、単純に言えば野生の勘だ。

鋭い感覚を持つ獣人種は、そのレーダーに引っかけた相手の巨大さを感じてしまう。

それが分かった私は、すぐにヴォーパルソードを構え、ペイモンとパシパの前に立った。

しんとしずかな森。

その静寂が破られたとき、私にもその相手を認識することができた。

森の奥から響くばきばきとした音。

それは何かを砕く音。

今までの相手とは違う。

アタックアップを自身にかけ、目を細める。

木々の隙間を縫うように泳ぐ黒い影、いや、縫うようにしているわけではない。

木々が横に避けていく、飛び散る

太く強固な幹を持つ木々を、まるで苦にせずなぎ倒し迫る存在。

真性の怪物。

ぞくりと身震いする。

これが、この森に潜む悪意の正体なのか。

確かにこの怪物を目にしたとき、ぼんやりと周囲を漂っていた悪意が、一箇所に収束した気がした。

それは、鯨だった。

目はなく、ただただ漆黒にのっぺりとした顔を持つ鯨。

全長8メートルはあるだろう巨体。全身を漆黒の鱗が覆いつくし、傷一つないそれは黒光りしている。

鯨特有の尾びれをゆったりとゆらしながら、こちらに迫ってくる。

何故、鯨が、このような森に、とは言うまい。この鯨は、その巨体で宙を泳いでいる。

奴はそう、空を泳ぎ、空間を渡る。異界の鯨。

異界の怪物ゆえ、その名も古代の言語を用い、その名の意味は分からない。

だが、多くのものがこの名を覚えている。

力ある、悪魔の鯨として。

「……ディガブロン！」

ディガブロン。フィロソフィアにおいてランダムにエンカウントする魔物の中では、最高クラスの基礎ステータスを誇る。

レベルは一定ではないものの、同レベルならベテランプレイヤーでも嫌がる相手。

その高いステータスは脅威だが、アクション性を兼ね備えていたフィロソフィアにおいて何よりも恐るべきは、その特殊能力であった。

「来るぞ!!」

奴は間違はなくこちらに向かって進んでくる。我々の前方50メートルほどの位置。多くの木々を易々となぎ倒したディガブロンは、

目の前の障害物がなくなるや否や、宙で一度飛び跳ね、まるで海に着水するかのように宙に消えた。

私は確かに見た。

奴が何もない空中に体を沈めていく様を。

そうだ、奴は、空間を泳ぐ。

奴は異空間に体を沈め、その鋭い背びれだけを見せ付けるように出している。はたから見るとちぎれたひれだけが空を泳いでいるようだ、きちんと奴の体は別の空間で繋がっているのだ。

常識を超えた化け物。

なるほど、ゲームの画面と同じように、ひれの周りの空間が陽炎のように歪み、波紋を起こしている。

波紋が目の前に来ると、その波紋を中心に何もない空間から、巨大な鯨が飛び上がった。

狙いは先頭である私か！

咄嗟に横に転がると、今まで私がいた地点に鯨が飛び込み、また異空間へと消える。

地面には何の傷もないことから、恐らくこちらに出ているときのみ攻撃をしてくるのだろうが、これでは攻撃することも容易ではない。

ただ、今も背びれは出ているが、それでもその能力に隙はない。何せ――。

ざばあと水のない空間を波立てながら、ディガブロンは再び飛び掛ってきた。

速度もかなりあるが、私はある程度コースを予測し、避けながらヴォーパルを一文字に振り切った。

否、振り切ろうとした。

だが刃は全くその役目を果たすことなく、その切っ先を躍らせただけとなった。

硬すぎる表皮が、刃を通さない。

やはり、これが現実のディガブロン。ひれだけ出ていても、意味はないのである。

このイベントも知らず、あの神も知らず、今までの怪物も知らない。

なのに最後に出てくるのが普通にゲームにでてきた嫌な敵というのは、本当に性格の悪いことだ。

ディガブロンは厳密に言えばゴナⅡダⅡルーの生物でもかの旧世界の怪物でもないらしい。

厳密に言えば、或いはフィロソフィアの設定資料によれば、『星の海を渡る怪物』ということになるらしい。

その解釈は個々人に任せるとして、今大事なのはこいつをどう倒すかということ。

そして困ったことに、私にはそれが思いつかない。

以前何度か戦ったときは、味方に強力なドルイドと魔法特化型ユニットがいたので、相手の能力地値を大幅に下げて魔法スキルで止めをさした。

今回はいささか相性が悪い。

特に私と同等の能力を持つパシパが問題となる。二人がかりなら時間をかければと思うが、パシパは素手である。折れたグレートアックスの代わりになるものはない。もし申し訳程度の銅の剣など買って持たせていても、既に彼女の適正STRを超えており、攻撃力の上昇には何ら貢献しえないであろう。

考えもまとまらないうちに、再度ディガブロンが襲い掛かる。

埒が明かないと考えたのか、面倒だと思ったのか、今度はその攻撃はいささか趣が違った。

ディガブロンは私の近くまで泳いだ後、跳躍し、私の目前に飛び込んだのである。

思わぬ行動に、私は動けなかった。

そして、硬直した私の体は、ありえないような振動を受け、20メートルは吹き飛ばすことになった。

ごろごろと転がる体が軋む。

最大まで戻ったはずのヒットポイントががりがり削られた実感がある。

どうにか四つんばいになると、抱えていた頭がふらふらとして視点が定まらず、口からは少量の血を吐いた。

そこに空間から顔を出したディガブロンが、すれ違いながら尾を叩きつけてくる。

鎧が碎かれ、私の頭と体は別々に転がった。

ディガブロンは知性か、本能か。

確実に私の頭の方へその進路を変えた。

「ヒロ！」

「ヒロ様！」

思わず笑みが出る。

これだ。この感覚。

私は今、強い怒りを得ている。

傷つけられた怒り。心配をかけさせた存在への怒り。自分より強いかもしれない敵への怒り。

同時に、湧き上がる破壊衝動を覚えている。

悪魔の魂。

その存在を、私は今実感している。

「悪魔……」

そう、悪魔。人と悪魔の混ざり合ったマール。

それが今の私だ。

そのために、私は悪魔の力を発揮しきっていない。

心の枷が外れる。

ならば、悪魔になればいい。

ペイモンとパシパはヒイロに近づこうとして、その歩みを止めざるをえなかった。

今にも食われそうになっていたヒイロの頭が、笑ったからだ。それは諦めではなく、獰猛な、狩る側の目だった。

だからペイモンは竖琴をかき鳴らし、ディガブロンへ風の弾丸を叩きつけ、パシパは頭よりも近くにあるヒイロの体を起こしにかかった。

2人は魔物としての本能で理解していた。ヒイロに助けは必要ない。今すべきことは、彼に快適に戦ってもらうことだと。

彼女たちは悪魔の笑みを目にして、その魔物の雌としての本能を刺激されていた。

即ち、強い雄への情欲である。

「私はバルバスのヒロだ。そして新山英雄でもある。この2人は別人のようで、同じなんだ。パラレルワールドの同一存在。そこでヒロの魂に欠損が生じた。足りない部分は補えばいい。もう一つの自分からだ。そうだ、私は結局、悪魔になることを望んだ、ヒロ／英雄なんだ」

風を嫌がったディガブロンが己の世界に戻り、気を取り直してそこから顔を出すと、獲物の一匹はその体勢を立て直していた。

そのこと事態に不満はない。自分は絶対強者であるのだから。

ただ一つ気になるのは、相手の姿である。

頭が離れているという奇妙な獲物だが、それを拾ったのだろう。

それはいい。

しかし、何故その頭が胴体の上に乗っているのか、それが理解できなかった。

あれは、そういう生き物ではないのに。

不気味に思ったディガブロンは、一度相手の前で旋回し、様子を窺った。

なるほど、この変な奴は、全身から黒いオーラを出して、不気味に笑っている。

気に食わない。

俺より弱い生物の癖に。

噴飯したディガブロンが意を決して突撃しようとする、今度は黒いオーラが煙のように絡みつき、相手の姿を隠した。

そこでまたためらう。

何だ。今までの狩で、こんな相手はいなかった。

「そうだ。怖がることはない。私は悪魔で、人間で。混ざり合った、不純で、作り変えられて」

何だ。

黒い煙の中で、相手がフラッシュする。

光が明滅するように、姿がぶれる。

鎧の人間姿。次は巨大な獣の姿。また人間姿、獣の姿……。

明滅するたびに姿が変わるが、段々と人間の姿でいる時間が短くなり、獣の姿が多くなる。

ディガブロンは驚いた。

煙が晴れたとき、そこにいたのは頭の取れる人間ではなく、獣の頭をした獣人だったのだから。

ディガブロンは知らない。

バルバスとは、鼻を血染めたライオンの姿をしているということ
を。

この場にいるものが釘付けになる。

半壊した鎧の隙間からあふれ出る筋肉、金色の毛。

手足は爪が伸び、体躯は巨大になっている。

そして彼の端正な顔は、端正な獣となっている。

金色の鬣をなびかせ、巨軀を冷たい血に染めたライオンは、吼えた。

バルバスの固有スキル、『獣化／バルバス』。

その真の姿は、血を滴らせたライオンの騎士。

あらゆるステータスをアップさせ、ただ獣性のみを開放した、強力なハンターである。

その圧倒的な力感、この場にいる全員に、結末を予測させるに充分なものであった。

ディガブロンも、声帯なき体で吼えた。彼にとって満足できない未来を覆すため、彼は全力で獅子に飛び掛っていった。

14話 ブラック・レギオン（前書き）

真のヒロインが登場

14話 ブラック・レギオン

ディガブロンの衝撃波は強力だ。

全方位に不可視の振動を送り出すのだが、そんな現代に存在しない現象の説明は不可能だ。

しかしあえて無理やりファンタジーな解釈をつけるとすれば、それは至極単純な話である。

ディガブロンは通常、空間を泳ぐにあたって自分の前方に異空間を展開している。

そこに飛び込むのは、水泳の飛び込み選手が静かに着水するのによく似ている。

狙ったところに広く空間の穴を開けれ、垂直に落ちれば、そこに波風は立たない。

しかし、そこであえて小さくいびつな穴を開ければどうだろう。ディガブロンの体は入りきらず、強引に穴に体を割り込ませる。

ディガブロンの体は、空間と擦り切れて当然傷つくはずだが、そうなれば自己防衛の本能的に穴を広げてしまう。

彼自身にも分からないことだが、強引に体が穴を押し広げるのである。

ディガブロンは空間に穴を開ける術は知っていても、それを自由に操ることはできない。

それをあえて自分に危険をすることで強引に操るのである。

通常のプロセスを経ず無理やり広がった空間は、周囲の空間を捻じ曲げ、景色こそ歪ませるもののほぼ不可視となって全方位に広がっていく。

それがディガブロンの『衝撃波／シャークアタック』の正体——といっても、確か製作者の一人が何かのコラムで語った四方山妄想

話——であった。

そんな適当な攻撃でも、現実存在すればこれほど恐ろしいものはない。本来なら空間を歪めるような攻撃に、対処法などありはしないのだ。空間が捻じ曲がれば、そこにあるものも捻じ曲がる。そして、捻じ曲がらない部分との間で齟齬が生じ、敵もねじ切れるのである。

ところがだ。

高い魔力と鎧、そして強靱な肉体をまとったヒイロは、その衝撃波を正面で受けきって見せた。

驚異的に高まったステータスが、衝撃波の効力を押さえ込んでしまったのだ。

確かに捻じ曲がっている。しかし、影響はない。

ヒイロはライオンの声帯から王の叫びを上げると、前傾姿勢でディガブロンに飛び掛っていった。

捕まるまいと空間跳躍を繰り返し、衝撃波攻撃を繰り返すディガブロンだが、それを受けて微塵も怯まずヒイロは走った。

今までは常識外とは言え人間的な動きであったのだが、今度は半人半獣、獣じみた動きで追いかけた。

驚くべきことに、ディガブロンの尾びれにその爪をつきたてたとき、8メートルはあるだろうディガブロンに、引けはとるが見劣りしないくらいの巨躯となっていた。

3メートル前後。

確かにまだ差はあるが、それでも巨大化したヒイロはディガブロンの尾を掴むと、ディガブロンを異空間から引きずり出し、そのまま巨木にたたきつけた。そこには身長による差は一切存在しない。巨木は魔力でも通っているのかディガブロンの重量とヒイロの腕力に耐え切ったが、ディガブロンはそうでもない。

声なき悲鳴を上げ、ディガブロンが暴れる。

ディガブロンはその勢いのままに、器用に体を曲げて、ヒイロの足に噛み付いた。

だが、ディガブロンが噛み付いたままであるのに、傷口が再生しようとして煙を上げる。

ディガブロンは困惑した。

逆に歯が肉にはまって抜けなくなったのである。鮫特有の能力で歯をはずして逃れようとするが、ヒイロは口の隙間にヴォーパルソードをねじ込んだ。

ディガブロンは命の危機に震え、強引に、半ば無意識に異空間を開き、ヴォーパルソードを叩き折る。

それに怒りを燃やしたヒイロは、その豪腕を目のない鮫の眉間にたたきつけた。

空間を優雅に泳ぐこともできず、ディガブロンは地面を5メートルは転がって、そこから流れるように泳ぎだした。

一瞬旋回し、逃げるかとも思わせたが、今度は180度旋回して、突撃を開始する。

空間を広げもせず、もぐりもしない。単なる力技である。

空間を削り取るような勢いで突進し、ヒイロの眼前で空間を飛び出した。

ヒイロは雄たけびを上げるとディガブロンの顔面を押さえ込む。

トラックの事故のような巨大な音と衝撃があたりに響いた。

ずるずると地面が抉れるが、鎧を突き破りそうなヒイロの筋肉は、つま先ごと地面に埋まり、やがてぴたりと動きを止める。

8メートルの怪物を押さえ込む3メートルの存在を、どう表現すべきか。

それは正に、神話の戦いにも思えるほど、凶悪で、神秘的な戦いだっただ。

怪物同士の、殺し合いである。2人の傍観者は、静かに、しかし確かに興奮して、ただ終わるのを待った。

ヒロ自身は知らないことだが、彼はレベルで表現すれば10に満たない。

このディガブロンも15程度である。これはゴナールダールの魔物の標準かやや高いレベルに収まる。

だが、ディガブロンは基礎ステータスでいえば最上クラスであり、同レベルでも桁が違う。

力に関しては最上級のミノタウロスと比べても、同レベルならディガブロンはわずかに勝る。それほど存在だ。

ヒロもデュラハンとしてはディガブロンには力、耐久性、いずれも劣っている。

そのままであれば勝てなかっただろうが、運がよかったのは、ディガブロンの衝撃波を一度『だけ』直撃したことであつた。

実質数値でいえば、ヒロのヒットポイントは七割近くが初撃で喪失していた。

そしてそれは今も変わらない。いつてみれば、瀕死だ。

だが、それこそが、ヒロ自身も忘れていたスキル獣化。

この条件『ヒットポイント30パーセント以下・マジックポイント30パーセント以上・スキルポイント30パーセント以上』を期せずして満たすこととなった。

無論、ゲームのようにウィンドウを開きコマンドを選択した結果ではないが、ヒロの悪魔としての意思と生存本能が、自然とこのスキルを選ばせていた。

獣化をすれば、マジックポイントは完全に枯渇してしまう。現実的にいえば、疲労困憊の半暴走状態となり、白兵戦——つまりは戦うコマンドと、2、3の専用コマンドが使用できるのみとなる。

ただしその恩恵は絶大である。『これがわしの真の姿だ!』と言わんばかりの変化は、ステータスを恐ろしいほどに底上げする。レベル10もないヒロは、その基礎能力の高さでレベル20前後の一般プレイヤーの中ボスクラスに匹敵する。だが獣化をしてしまえば、彼はレベル30代のボスクラスの能力に変貌を遂げる。フィロソフィアという極めて長いプレイを前提として作られたゲームは、総じてステータス差というものが大きい。『1』という小さな数字が大きな差を生み出す。

驚くべきことに、ヒロが先ほどから受けている衝撃波によるダメージは、ゲームで言えば『1』だった。チートというなかれ。大悪魔のジョブはすべからくボスなのである。

そして今の彼は、名実共に悪魔だ。

「がああああああ!!」

びちびちと腕の中で暴れる魚の力は凄まじい。

さすがは大海の王者に相応しい力だ。悪魔としての力を存分に振るう私でも、脅威を感じる。

しかし、そこまでだ。

この『ヒロ』のスペックは、既にディガブロンを上回っている。こうして押さえ込めばよくわかる。

まるで先ほどまでの自分が赤ん坊だったのかと思うほどに、力が湧いてくる。

自分の体の全てが作り変わっているのが分かる。

名実共に人間ではなくなってしまったが、今更の話。

幸いにして私は、『バーサーク』状態の一種であるこの獣化状態になっても、冷静な知性を所持しているらしい。

このスキルを使うことに不安があったとすれば、そこだけだ。ゲームではコマンドを制限されるだけだったが、ここではどうか分らない。下世話な話だが、ゲームではトイレに行かないが、ここでは悪魔もトイレに行くのだ。実体験である。間違いない。そういう意味ではゲームに忠実であるという証拠が積もっていくのは、私にはありがたい。

絶対の知識こそ、私の武器であるのだから。

そう、ディガブロンは強い。そして、それが幸いであるのだ。

私が爪の生えた足で、ディガブロンの顎下に蹴りを入れると、彼の巨体はわずかに浮き上がり、ついに地面に倒れた。

びくびくと痙攣し、泳ぎだす様子もない。恐らくだが、彼は『瀕死状態』に入った。

『瀕死』は、いわゆるバッドステータスの一つである。

フィロソフィアのほとんどの生物にはヒットポイントが存在しているが、その多くのものがヒットポイントのある割合を切ることで発動するバッドスキルなのだ。例えばウルフという弱いモンスターは、ヒットポイントが二割を切ると足を引きずり、ステータスのほとんどが下がる。戦闘は基本的にアクションだったフィロソフィアではかなり致命的な状態だ。他にもモンスターによっては攻撃手段が減ったり、スキルが使用できなくなったり、逆に強化されたりする。

ディガブロンの場合は、ヒットポイントが五分を切ると、『暴れる』という原始的な攻撃以外、あらゆる行動ができなくなるのだ。

これはかなりきつめの制約だが、逆に言えばぎりぎりまで肉体的なダメージは何の負荷にもならないという強者の証である。

無論私にも存在するし、ペイモンやパシパも瀕死になれば何らかの制約を受けるだろう。

そして、私は相手が瀕死になった際にのみ使える特別なスキルがある。

私が、ダーク・ヒーローとして猛威を振るった際には、このスキルが不可欠であった。

今、あのころの力の一端を取り戻す。

そう考えると、自然と喉から声が漏れた。

それは笑いであったのだが、ライオンの喉からはごろごろとした音が漏れただけだった。

ディガブロンの最後の悪あがき、びちびちとした痙攣は、一応攻撃にもなる。

暴れる尾びれをさけ、相手の頭に私は手を乗せた。

けむくじゃらで爪の鋭い指を、相手の眉間に合わせる。

感じる。やり方がわかる。私の鋭くなった感受性が、相手の弱った魂を感じる。

目を閉じ、その魂に、鎖をかけるイメージ。

ぐるぐる巻きにして、私のものにする。

体の中にうごめく力の波動——スキルポイントをそこに注ぎ込むと、ディガブロンの黒い魂は、拘束を逃れようと暴れた。

現実に体も暴れたが、そこは力でねじ伏せる。

「さあ、隷属しろ」

スキルの使い方は空気を吸うように慣れてきている。

最早頭に思い浮かべるだけで、その行い方がわかる。私の『ヒイロ』の魂が、優しく私を導く。

『ブラック・レギオン』

瞬間、私の手の平を通して、ディガブロンの魂が流れ込んできた。分かるのだ。その流れが。

恐らくパシパやペイモンには、黒い光が私の中に流れ込んでいるように見えるだろう。

それが、魂。

つまりフィロソフィアにおける『ソウル』であり、『経験値』だ。ある一定以上の格を持つ相手は、倒すとこのようなエフェクトが出る場合がある。

また、『ブラック・レギオン』を使用した際は、どんな相手でも発生したはずだ。

そう、『ブラック・レギオン』。

ディガブロンの魂は、既に私のものとなった。

「御見それしました、ヒロ様。まさか、ディガブロンをレギオンにしてみようとは」

獣化の効力は一戦闘中。ゲームではそのまま、戦闘が終われば戻ったが、ここでは戦闘が終わったと思ってしまえば戻れるようだ。もしかしたら平時でもコントロールは可能かもしれない。だが今はとにかく疲れて、私は思考を働かせずそのまま倒れこんでしまった。その際にデュラハンに戻ったせいで、頭がころんと転がったが、ペイモンはそれを拾い上げながら嘆息した。ついでに言えば、その拾

いかたは慈母のごとくで、私は大層癒されている。

そんなペイモンの横に呆けたような表情で並んだパシパが、分からないといった顔で首を傾げた。

「うーん、色々聞きたいことはあるけど、とりあえず、お疲れ様、ヒロ」

「ああ。ありがとう、パシパ」
「で」

ずいっと抱えられた私の頭に顔を寄せてくるパシパ。ちよっと、近い。

「レギオンって何？」

「ああ……そうか、悪魔でも上位種しか知らないスキルになるのか」
「そうですね。パシパちゃんが知らないのも無理はないと思います。レギオンを持つ魔物さんは少ないですから」

レギオンは、モンスターの中でも悪魔、或いは『ロード』や『キング』といった上位種にしか存在しないスキルだ。

その能力は単純で、瀕死にした相手の魂を奪うことで、自身の配下にするのである。まあかの有名なRPGの、仲間システムとさほど違いはない。

ただし相手に触れる、多少のスキルポイントがかかる、という制約はあるが、言ってしまうえばそれだけである。

また体に保有できる魂には容量の限界があるため、配下にできる相手の数も制限はついてしまう。

だがそれも決定的なデメリットにはならないし、魂を拘束している以上相手は絶対服従である。

仕組みは分からないが、私にとってはとてもありがたいスキルだ。そもそもスキルポイントが何かもよくわからないのだから、そういうものと納得するしかない。

端的に言えば、私はいつでもディガブロンを呼び出せるようになったということだ。それに主の経験値は配下にも分配される。

相当な戦力アップになる、思わぬ拾い物といえる。勝てるぎりぎりの相手が出るというこの試練の条件は、思えば瀕死を起こしやすい状況だっただろう。

「ふーん。じゃああのおつかない鮫さんも、僕らの仲間ってこと？」

ペイモンの懇切丁寧かつ私への賛辞交じりの説明も、パシパにかかればそんなところだ。

むしろレギオンへの興味が爛々と目に光っているのが分かる。

「ああ。ディガブロンは忠実な配下になった。私の中にいる以上、死ぬこともないだろうな」

戦闘中召還して倒されても、私が存命ならば問題ない。しばらくすれば復活する。

それにあまり大きい声で言えることでもないが、魂を私が持つてしまえば、それはつまり絶対的命令権があるということ。ディガブロンは私を実の親よりも大事にするだろう。だからディガブロンのような獣ならともかく、人のような意思と文化のある存在には使いづらい、という点もあるにはある。実際に知性ある魔物や人へのレギオンは、β版の段階で禁止になってしまった。奴隷を自分の意思で作るというのは、さすがに倫理委員会からストップが出たらしい。しかし、今この現実的な世界では可能かどうか。

私がそんな小難しいことを考えていると、パシパはさも重大そうに変なことを言い出した。

「で、名前は？」

「名前？」

パシパはこくと頷いた。

「仲間になったら、名前をあげないと。ディガブロンって、種族名でしょ？」

「ああ、なるほど」

む、これは困った。

私は現実でも、こういったことにセンスを発揮したことはない。もし私が犬や猫を飼うならば、確実にシロとかクロとか、タマになっってしまうだろう。ここが重要。なってしまうのである。

鯨、はさすがにありえない。シャーク、はこの世界の言語がよく理解できていない以上どういう意味を持つかも分からないからつけづらい。

ジョーズ……あの音楽が頭から離れなくなる。
うーん？

「無理だな」

だって、なあ。私は英雄だからヒーローなんていう中学二年生一歩手前のベタな発想しかできない大人なのだ。

「あ、じゃあ僕につけさせて！」

「あ、パシパちゃんずるい！」

急にやいのやいの姦しくなった2人を見て、どこか安心する。
戦闘中は私はただの悪魔だ。でも、この2人といれば人間でしか

感じられないだろう、穏やかないい気分になれる。

私は、人と悪魔と、両者のいいところを得て、得をしている。

「うーん、ミノ太！」

「ダウト！」

「えー！ー！」

「ブロ、ディガ……ブロリーちゃん！」

「なんとなく野生的感觉でアウト！！」

思わず顔がほころぶ。

お前は人気者だよ？

私の中を縦横無尽に駆け回る、小さな魂。

私の問いかけに、それがちゃぽんと、音を立てて沈んだ。
照れているのか。

どうやらこの鮫は、思ったよりも可愛い奴であるようだ。

14話 ブラック・レギオン（後書き）

魂亀甲縛りの話。

ちなみに私はライオンが大好きである。

小学校の時にかめはめ波してくる友だちに、「ふっ、ライトニングボルト！」で返してぽかんされちゃうくらい好きである。

悔しい、でもセブンセンスを感じちゃう。

15話 試練を終えて

ディガブロンを仲間とした直後、私はさすがにその場で膝をつくこととなった。

まったく情けない話だが、完全な気疲れだ。

この身体のスペックは人の頃とは比べ物にならず、減少したヒットポイントもわずかずつだが再生しているというのに、半分は人のままの私の精神がどうにもやられてしまったようだ。

「ヒロ様」

ペイモンが私の肩を支え、自身の体にもたれさせてくれる。

彼女は巨体だが力の値は低く、成長もしにくい。私の身体は重いだろうに、申し訳なくなるが、今は身を任せる。

「いや、大丈夫だ。それより」

それよりも、心配なことがある。

私の視線を察したパシパが、それを拾ってまじまじと眺めた。

「これは……僕と同じ。残念だけど、もう、ね」

耳を垂らしたパシパが謝ってくれるが、決してそんなことをさせていいはずがない。

「悪いのは私の力不足だ。まさか『獣化／バルバス』を使うことになった上に……」

彼女達を切り札を使うほどの危険にさらした。

さらに、パシパの手の中には、一本の剣。

いや、剣だったものの、なれの果て。

「ヴォーパルソードを破壊してしまうとは」

思わずため息が漏れる。

得たものは大きいが、私の戦闘力はぐっと低下したことだろう。

半ばから絶ち折られたこれは、その切断面がぎざぎざになっている。

ディガブロンの不ぞろいの歯のせいだ。味方になってしまえば頼もしいが、しかしこれはまったくの別問題だ。

見た感じでは修理も無理そうであった。

フィロソフィアの基本的なシステムの一つが、武器防具の「疲労度」である。

武器防具の損耗を表すそれは、溜まるたびに能力の低下を招き、やがて破損に至る。

これはゲームで言うならば疲労100。能力低下90パーセント以上の破壊状態だ。

ここまで来ると鍛冶屋にも直せない。最早その武器の命は終わりで。

パシパのグレートアックスも同様である。疲労度は武器に攻撃が当たったときと、武器を使用したときに、相手の防御力と武器の強度の差で発生する。技量値なども関係するが、基本はこのロジックで動く。

私はスレッドのうわさでしか知らないが、世のどこかにいる伝説級鍛冶師なら直せる、らしい。

そこまでして直すものかと言われるとそうでもないし、現状そんな時間もない。

極端な話金や物品さえあれば、これ以上の武器はストームガンでも手に入る。

だが、そんな先立つものすら現状欠いている我々である。

そして、いかにデュランの戦闘力が高くても、武器防具の使用によるステータス上昇は、フィロソフィアにおいては絶対的である。なければ、強力な装備を使用したはるか格下にも劣るだろう。

そんな分不相応な格下は、えてして世界で最も賢い者達――ヒューマン種によくいるものだ。

あの世界は金で大体のことが動く。

今度の戦争に、そんな連中がいないはずがなかった。

戦争は金を生み出す。だからそこに投資する。

なるほど、フィロソフィアは、まさしく現実と変わらない。

疲れだろうか、思考が少し悲観的になり、皆も重苦しい空気になってしまった。

私は気分を切り替えようと無理して立ち上がった。

震える足を叱咤してたった私を、優しくふんわりと柔らかい腕が支える。

「ふふ、それが君の願いなの？」

耳元に息をふき替えられ、鳥肌がたった。

可愛く、鈴のような声。ペイモンの声は、もう少し、シャープだ。では、誰の声だ？

私はその場を飛びのこうとしたが、足はその場に縫いとめられたかのように動かない。

疲労、いや、これは違う。

何か、大きな力が、私を押さえつけている。

正直に、恐怖を感じた。

何者かの手は、私の後ろから包み込むように回されている。

まさしく白魚のような手の持ち主を見ようと、私は手を無理やり動かし、私の首の角度をほんの少しだけずらした。

見えたのは、驚愕するペイモンと、一人の女。

それは、いわゆるチャイナ服を着た、東方の美少女であった。

身長は低く体格は極めてスレンダーだが、出るところは出た体型で、黒髪を二つのお団子で可愛らしくまとめている。

日本人にも見えるし、東南アジアの人にも見えるような、健康的な肌色の容姿をしていた。

目はくりくりとよく動き、瞳は大きくまっつけもちよっとお目にかかれなほど自然に長い。

小さい鼻とぷっくりとした唇は、世の男性の視線を集めて離さないだろう。

そんな少女だった。

瞠目している私をしばらく見つめ、彼女はきやらきやらと笑った。その様子は猫のようでもあり、猫そのものでもあった。

「くふふ、お帰り」

彼女はふんわりと浮き上がるように飛び上がると、砂漠に点在す

る岩の上にあぐらをかいて腰掛けた。

そこで、私は初めて周囲の状況に気づいた。

「な……」

周辺を見回すと、イベントの導入に訪れた砂漠に立っていることに気づく。

ただ、あの森の姿はない。隠れてしまったのか、別の場所なのか。呆然とする。いつ、移動したのか。呆然としてはいけないのだが、理解が追いつかない。私は森にいて、いつの間にか、全員が、砂漠に戻っている。

もう一度視線を女性に戻すと、にっこりと笑って手を振ってくれた。

私は後ずさって、そこでまた気づかされる。

体が自由を取り戻している。手を放されたせいかな、あるいは別の何かだったのか。

唯一分かることは、まるでポケットの携帯のバイブが鳴るように、体の奥にあるディガブロン之魂がずっと震え続けているということだけだ。

まるで何かの危機を伝えるように、ずっと鳴り続けている。もしくは、脅えているのか……。

それとも、震えているのは、私の魂なのか。

私の顔にももしかしたら、脅えが出ていたのかも知れない。

私を見て少女は笑った。くふふという笑いは可愛かったが、少女の黒い目がぎょろりと開いたのには汗が噴き出た。

開いたのはまぶたではなく、瞳孔が、だ。

私の緊張感はいやが上にも高まる。

よく見れば、頭のお団子と思ったものは、そんな装飾具の類ではなかった。

あれは、耳だ。猫の耳だ。

現実では萌えだの何だのと形容される「猫耳」というやつなのだろうが、現実に見るとそうは思えない。

確かに可愛いのもかもしれないし、愛らしくもある。

だが、決定的に違う。

これは、何か違う。

存在が違う。

「どうだったのかな？ この試練は？ 面白かった？ 私は面白かったよ。ずっと見てたよ」

瞳孔がぎよろぎよろと動く。

「それにしても意外と身持ちが固いのね。最近の男子はちょっと押しが弱いなー。あそこで押し倒しても問題なしだったよ！」

少女が拳を握り立ち上がると、それに倣うようにぴよこんと背中から尻尾が現れる。

「でもチューはずいぶん積極的！」

ぴこぴこと尻尾を揺らし、意味もなく足をぶらぶらさせる。

可愛いと思う……だが、それよりも警戒が先立つ。

彼女はにぱっと笑うと、すっと、まるで消えるように私のそばに
よる。

あまりの速さと自然さに、私は反応できない。

そんな私を尻目に、彼女はそっと私の頬に顔を寄せて。

そして舐めた。

ぞくつと悪寒が奔る。

ざらざらとした感触が、彼女の舌がどんなものか教えてくれる。

そしてここまで呆然としていた私の脳も、ここでようやくと再起動を果たす。

「見た目は可愛いが、お前、ナイアルラトホテップ……！」

「わ、照れる」

……ガッデム。

しかも背中からの視線がすごい。

つい私の本音が出てしまったが、本音だとあからさまに分かるのがまづかったか。

最近には本当にこんなばかりである。

「ヒイロ君はやーらしー」

けられらと無邪気に笑う邪悪な神を見て、私はなんとなく、苦笑を抑えられなかった。

しばらくの間、邪神の「端末」であるはずの少女に、私は笑われるはめになったのだ。

「くふふふふ。やっぱり君は、私の期待にこたえてくれるね」

しかし、それにしても彼女は、その身体からあふれ出る愛らしさというものを隠そうともしない。

以前の男姿の時ににじみ出ていた「畏怖」というものがまったくない。

私はディガブロンの魂ですぐにその正体に気づいたがゆえに、その変貌ぶりに恐怖を感じたが、ペイモンとパシパは全く気付いていなかった。

ちなみに気づいた今も二人は全く恐れていない。どうやら感情というのは、時に神への畏怖すらも凌駕するようである。

「あー……とにかく試練はクリアということでもいいのか」

「そうだね、まさか僕もディガブロンの森になるとは思わなかったけどね、くふ」

彼女がこてんと首を傾けて説明するには、この試練は本当にランダムなのだろう。

そう、彼女に対して害悪足りうる存在に対して、ランダムにジャンプする。

体のいい掃除屋というわけだ。

確かに効率のいいシステムなのかもしれないが、一つ疑問が残る。

「あなた自身が戦えば、それでいいのではないか？」

「くふふふ、それじゃあつまらないよ」

彼女はふわりと、先ほどとは別の岩に飛び移る。今度は胡坐をかいたような恰好で、私の視線を誘導しようとする。

「僕が戦ったら、みーんな一瞬で死んじゃうよ？」

無邪気な笑顔で、そういう。

「僕は見ただけなんだ。喜びも、悲しみにも、価値はある。けれど、そのすべては――」

一瞬で彼女の姿は無と消え、代わりに後ろから不気味な男の音が響いた。

目を向けると、そこには一人のアラブ人がいた。つい先日のだ。

「等価。私にとっては、そのすべてが、ただ面白いものだ。いや、私ではない――」

アラブ人の姿も掻き消える。

周りには、誰もいない。ただ声だけが聞こえた。壁もない砂漠に、よく響いた。

「「私たち」」

そして彼らは消えた。邪悪さも、不気味さも、人を惹きつける愛らしさも、何もかもがない。

ただ私たちがそこに立ちつくしていると、私の目の前に影が落ちた。

空を見上げると、光を放つ何かが落ちてくる。

くるくると回転するそれは、やがて砂に柔らかく着地した。

ざくりと切っ先を砂に埋めたそれは、鎌。

人の背丈ほどもある柄と、胴体ほどもある刃。

「……『死神の鎌／ザ・デス』」

装備条件として高い腕力を必要とする、ヴォーパルソードの1.5倍は高い攻撃力を持つ武器である。

どうやら、これがこの試練の報酬であるらしい。

現実と比べれば、この時期にこの装備は破格といっていい。

私が鎌の柄を握り、砂から抜き出すと、柄を握っていた手が急速に透けだした。

後ろを見れば、ペイモンとパシパもあわあわと驚いている。私は口元に微笑が浮かぶのを止められなかった。

「……どうやら、帰るようだ」

自身の手を見ても、ほとんど輪郭しか見えなくなってきた。

多少の不安はあるが、しかしあの神は嘘をつくタイプとも思えない。嘘よりも、たちの悪い真実を言うタイプ。そんな気がする。

帰すといったら、帰すだろう。

だからか、私はつくづくと思ってしまった。

「もう、驚かん」

ふっと私たちの姿は掻き消え、長い長い試練は、ようやくと幕を閉じた。

得たものは大きいけれど、少し厄介なつながりを持ってしまった。そんなことを考えながら、私は向かってくるスフィックスの巨体を何とか受け止めたのだった。

15話 試練を終えて（後書き）

ちよつとパソコンを一ヶ月間開いてませんでした。
何とか頑張ってます！。

16話 宴の席で（前書き）

大層遅れまして、申し訳ございません。

ちよつとパソに問題がありました、ネットを離れておりました。

頑張つて急いで書きましたよ！

16話 宴の席で

「ヒロ！ 心配したぞ！ まったく、こんなに日数の掛かった試練は久しぶりだ！」

「く、苦しい……というかネム！ 頭が落ちる、落ちる！」

私を持ち上げながら上下に揺らすという荒々しい技を行っているのは、グラシャⅡラボラスことネムである。

雄雄しいライオンの下半身、鷲の翼、蛇の尻尾という凶悪な要素を持ちながらも、その上半身は美しくグラマーな女性である。

その肢体と合わせて魅惑的な切れ長の目とぼつりとした唇は、万人を魅了するに十分なものを持っているのだが、あいにくと本日は休業中で、全てのパーツがだらしなく緩んでいた。まあそれだけ心配してくれていた、ということだろう。

彼女は私の慟哭に気づいてくれたのか、はっとして周囲を見回すが、やはりにまっとしてしまう。

私を降ろした後はペイモンやパシパに近づいて、彼女達の腕をちぎれそうなほどにぶんぶんと上下に振り始めた。

パシパがわあと叫んで宙に浮かんでしまった時には、思わず笑みがこぼれてしまう。

このようにクールな見た目と違って、大分愛らしい女性なのだ。

まあ、現実で本当に女性だったのかは知らない。

しかしゲームをしていた時は考えもなかったが――あまり女性人口の多いゲームでも無い――ずいぶん女性らしい仕草をするから、リアル女性だったのかもしれない。

今のように、頬を染めて乱れた髪を耳にかけろしぐさなどは、その、とても可愛い。

結局、彼女の痴態はたっぷり五分ほども続いたのだった。

「あー、んんっ。見苦しいところを見せたな」

わざとらしい咳をして、彼女はそっぽをむいて言った。翼と尻尾がおろおろと動き回っていることから、まだ恥ずかしがっていることがよくわかる。

私は彼女に見えないようにくすりと笑うと、頬の筋肉を総動員して真剣な表情を作って見せた。あまり苛めても、すぐに拗ねてしまうところがある。

だから私は感謝の言葉だけを伝える。

「ああ。それだけ喜んでくれているということだな。ありがとう」
「なあっ!？」

照れる彼女が愛らしくて、つい私がほほ笑むと、ネムは顔を下に
して、か細い声で答えた。

「バカ」

ネムはそのまま顔をこちらに見せないようにして、ゆっくりと宮
殿の奥へ歩き始めた。

彼女の頬が赤いのは、きっと宮殿の灯のせいでもない。

「……まあ、今日はゆっくり休め。部屋を用意してある」

そこで始めて気づいたが、どうやらナイアルラトホテップは私た
ちをネムの宮殿の廊下に送ってくれたらしい。

ネムはなんとなく相手がどこに帰還するかは分かるようで、わざ
わざここで待ってくれたのだろう。

丁度この辺りの廊下は客間のものでもあるから、その準備もしてくれているという歓待振りだ。

ネムはそこで少しだけ振り返ると、気持ちのいい笑顔を見せてくれた。

「中は自由にして構わない」

「……心苦しいが、そうさせてもらおうでしょう。さすがに疲れた」
「気にするな。ここを使わせる客はそうはいない。まあ代わりというては何だが、夜は付き合えよ。久し振りだからな」

少し歩くと、客間が並ぶ部分にたどりついた。壁に飾られた小さくも荘厳な燭台で照らされた薄暗い廊下に、黄金にも見える不思議な金属で出来た扉。まったく素材も装飾も、近代のホテルと遜色がない。

少し啞然とする私たちにネムは小さく微笑をこぼすと、巨体を揺らして去っていった。ゆらゆらと揺れる尻尾が、どこか機嫌のいい彼女の内心を表しているのかもしれない。色々と世話になりっぱなしであるが、友人とは、そういうものでもあるだろう。

だが、借りっぱなしではまっとうな友人関係とはいえない。

「まあ、いずれ力になるとして、今はとにかく、休もう」

「はい。特にヒイロ様は戦いづめでしたから、早くお休みになってください」

「ねー、僕もくたくただよ……」

勝手知ったる他人の家、とりあえず客室で私たちは休むことにした。

もちろん彼女達とは別部屋である。何も不思議はない、ないっただけだ。

部屋の中は簡素なつくりになっていて、あるのはベッドとサイドボード、クローゼットが一つだけである。

だが家具はシックな装飾で造りもしっかりとしており、素人目にも素晴らしいものであると分かるし、ラグが敷かれた石造りの内装は、なかなかにお洒落だ。布団もかなりふかふかで、高級感があった。

私はベッドに倒れこむと、頭を人のように、枕に乗せた。人であった時よりもはるかに頑健な体が、疲れているのがわかった。

目を瞑れば、浮かぶのは、家のベッド。
私の、現実のベッドだ。

「変わったものだな……」

今までならば、そこに家族の顔がおぼろげに浮かんでいたものだ。郷愁、というのか。

だが、今はほとんど思い出せない。

薄情か、それとも、新たなものに塗りつぶされてしまったのか。

この変化は、私にとって、この殺伐とした世界では良とするものだ。だが、一つだけ疑問がある。

「なぜ、私なのだろう」

正確にどれだけの人間がフィロソフィアをプレイしていたのかはわからないが、どうして私のような人間が選ばれたのか。

私が腰の小袋――グリードを手にとって、そこから大鎌を取り出

し、ただ無意味に眺める。

この呼吸をするように行ってしまう行為が、きっとあちら側の多くの人間にとっては垂涎のものであるに違いない。

きつと現世を捨ててもここに来ると考えるものも、少なからずいるだろうに、何故私か。

わからない。私はこれから、何をすべきか。死にたくはない。失いたくない。そのためには？ それからは？

私は取り留めもなく思考を巡らしながら、ゆっくりと眠りにつこうとしていた。

黒く塗りつぶされる頭の中。近づく闇の音。

その中に混ざる、小さな音。

まどろみの中で、その音を聞き取ろうとする。その音を、見る。

それは、暖かさと、冷たさと、残虐さ。

母性と、破壊。美しい女性の体に、蛇の下半身……。

これを、私はどこかで見たな。

答えをくれる、この人は、誰だったのか。

もう少しで答えを得られそうなところで、私は悔しくも眠りについてしまった。

完全に思考は暗黙の向こう側に落ちる。だが、最後に聞いた声だけはよく覚えていた。

起きて、きつと覚えている。

もしかしたら、私は呼ばれたのかもしれない。

人間など及びもつかない、何か、不思議で強大な存在に。

「あなたは選ばれたのよ、私の赤ちゃん」

ずるりと、蛇の舌が私を舐めた。

その日の夜には三人とも目を覚まし、ネムによる豪華な歓待を受けていた。

美しいラグの上に座る私たちの前では、頭から羊の角を生やしたり、エルフのような尖った耳をした美しい女性がエキゾチックな踊りを披露している。

燭台はマジックアイテムなのか、青い光がたかれ、その踊りの幻想性をより豊かなものとしていた。

他にも小さなドワーフやホビットのような恰好の機械人形が、様々な楽器をかき鳴らし、悪魔の美女たちが肉やフルーツを運んでくる。

至れり尽くせりの状況といえる。ペイモンは音楽に合わせて頭と尻尾をふりふりと楽しそうにしているし、パシパはもう食べ物にぞっこんであるようだ。

かくいう私も、音楽やら芸術やらにはさほどの造詣も持たないが、素人でも楽しめる完成された美がそこにはあった。

私は少しうっとりとした気分で、金の杯を片手に、その雰囲気陶醉いしれていた。

隣にはネムがおり、その巨体をクッションに横たえ、どこか満足げな微笑を浮かべている。

無論この酒も、ちよっとそこらではおめにかかれないものだ。

「久しぶりだな」

「ん？」

ネムは顔だけをこちらに向け、とても澄んだ声で話しかけてきた。

「こういう穏やかな時間は。それも、あの頃の面子で」

「大分減ってはいるが……まあいたらいたでうるさいだろうよ、あいつらは」

「ははは。違いない。今のお前の仲間は大人しい。こういうのも、いいな。ペイもパシも私は可愛くて好きだ」

ネムは情熱的な見た目どおり、義理人情に厚い。それは悪魔となっても失われていないのだろう。

だからこそ奇妙に慕われたりする。

「ふっ、そんなことを言うから変な女性に追いかけられる」

「なあ！？ その話はするな！ 私のトラウマだぞ！！」

「ははは」

ネムはその蛇の尻尾を動かして私の顔にめがけて威嚇をしてきた。私は頭を持った手を遠ざけてそれをかわす。

ぐるると獣の声をあげていたネムだったが、やがて小さく笑い、そして少しだけ逡巡した後に、真面目な表情を見せた。

「……ローランドが動くぞ」

「……ほう。どういう情報だ？」

どうやらきな臭い話らしいと体を乗り出した私の前に、ネムが彼女のグリードから取り出したのは、一枚の紙だった。それをひらりと私の前に置く。

「冒険者……100人募集。期限は10日間、報酬……一人頭、金貨七千……条件は、ベテラン以上か」

ベテランというのは冒険者ギルド内での隠語だ。ギルド内にはランクが存在する。

いわゆる『ランク制度』というやつだが、『駆け出し／ルーキー・売り出し／ライジング・熟練者／ベテラン・達人／マスター・殿堂／レジェンド』の五つである。俗称はそれぞれD、C、B、A、Sランクとなり、一般人は大概こちらを用いる。

ベテランの条件はギルドから危険度Cランクの依頼50完遂、総依頼達成数100回以上。そして最終試験の意味合いを持つ特別Bランク依頼の達成である。基本的に依頼の危険度はランク制度のランクのようにAやBで表現され、自身のランクと同等の危険度の依頼までしか受けられない。ギルドがこいつは次のランクに行ける、と判断したときのみ一度上のランクを受けさせられるのだ。依頼内容は様々だが、Cランク依頼からは基本的に戦闘がからまない方が珍しい。また、冒険者登録にはパーティー制度なる集団で登録するようなものもあるが、総じて言えることは、ベテラン以上の冒険者は相当な手練れだということだ。それが集団で強力か、個体で強力か、それはこの場合大した問題にならない。

私がデュラハンになったときは一応マスターであったが、ベテラン相手ならば苦戦はあり得る。

デュラハンになり、悪魔になって、ステータスやスキルでは下がっているとしてもそれほど遜色はないだろうが、ランクが低くとも驚くほど強い奴というのもままいるし、何より相手は冒険者だけではない。

「そして食料や武器の流れから見て、兵士はおよそ三千。率いるのはあの【狂王】と【太陽の王子だ】」

「化け物が、出るか」

やはり、というべきか。

【狂王】 シシュフォスは万能の王と呼ぶべき類いまれな王才を持つ、壮年の男である。その力はローランドを大いに発展させたが、同時に狂ったように侵略戦争を行い、領土拡大を進めるその行状から、他国の人間は悪意と畏怖を込めて【狂王】と呼ぶ。

同時にその息子、第一王子である【太陽の王子】ベレロフォン。父親のように多才ではない、だがその才の総量は同じで、その全てが武才に偏っている青年。まだ年は17歳と若い、ローランドでは一か二の使い手で、もし冒険者ならば殿堂クラスといわれる。性格は父に似ず温厚ゆえに太陽とも呼ばれるが、一旦戦いとなればそこに温情の入る余地はない、といわれる。

現実で王と王子が同時に戦の前線に立つなどありえない話だろうが、この世界ではそれがまかり通るのであり、厄介なことに、そういう手合いほど強いものだ。

「我らが魔王殿はどうするのか？」

「どうにも迎え撃つ気満々らしいな。愚かな、確かに人はテュポーンの子らほど強靱ではないが……」

「人であった私たちとは違う。魔物は基本的に他を知ろうとしない。ロホガレも同様よ。ましてあいつは筋肉馬鹿だ」

「ああ。しかし勝算はあるのだろうか。ロホガレの縄張りにいる強力な魔物は、私たち悪魔と『緑地竜』くらいだ」

ロホガレ領のユニーク悪魔十二人のうち、生き残ったのは4人しかいなかったと私は記憶している。

生憎と彼らが概ね活動している場所ぐらしか私もわからないし、現実とは違う以上彼らが真っ当であるという理由もない。

協力することは視野に入れつつも、それに頼るわけにもいかない。極端に言えば、私は彼らが何の種族かもわからないのだ。ただ後に情報として、悪魔のプレイヤーがそれだけいた、という話である。ユニーク悪魔といえども強いわけではない。

悪魔になれるかはどうかは運だったし、レベルが低ければだれでも弱い。

フィロソフィアは自由であるからこそ、『弱い』も許された。強さではなくそのユニークというものが尊重されたのだ。

しかし、少なくとも戦争において『弱い』は許されない。

「はっきり言って……勝てないな」

ロホガレの問題もあるが、それよりも最大の欠陥は、ゴナⅡダⅡルーで最西端のこの土地にある。

「生息する者たちが弱すぎる。ロホガレがどれだけ有能な魔王であっても、この地では勝てまい。相手にベレロフォンがいなければ、また違ったかも知れんが」

「私自身ベレロフォンを見たことはないが……それほどか？」

あれはフィロソフィア中盤のイベントで、どういう経緯だったか、冒険者に身をやつしたベレロフォンとパーティーを組んだのだ。

多少のレベル差はあっただろうが、その圧倒的基礎ステータスはその辺の怪物などよりよほど高かったし、何よりその装備がすごかった。

「『天馬の宝剣／ペガサスソード』、あれが強すぎる」

「うわさ通りか。神の加護を受けしもの、天然の『申し子』」

ペガサスソードはユニーク装備で、正直私の大鎌や大剣等では一合で破壊されかねない。こういった品なのかはわからないが、相当神の加護を受けたチート装備であることは間違いない。

さらにベレロフォンにはレアスキル、『申し子／ジーニアス』がある。

これは神の加護を受けやすい、ということなのだが、簡潔に表現するなら、それぞれが信奉する神によってステータスやスキルに補助がついたりするということだ。

ゲームで見た感じではベレロフォンはバリバリの戦闘職。まず崇める神も戦闘に類するもの辺りだろうが。

対するロホガレは基礎ステータスならば上回っていそうだが、奴は致命的に捌め手に弱い。

ローランドが冒険者を雇ったのは正解だろう。彼らは魔物に対して抜け目がない。

正直ロホガレではベテランの冒険者は荷が重いだろう。

「ロホガレが負けるのは必定。ならば、大事なのはどう負けるか。そして、私たちが負けないこと」

「どういう意味だ？」

「難しいことじゃない。負けるにしても相手を疲弊させて、ロホガレ達にはともかく、私たちに有利なようにことを運ぶ、ということだ」

「まあロホガレには何の義理もないが、人間たちにここを攻められるのも困る。私は全面的にお前に従うぞ。我らが『参謀』殿」

そう言っ
てネムは一つウィンクをすると、ぐびりと果実酒を一気に飲み干した。

彼女の肌が、ひどくなまめかしく熱を持つのがわかった。

「懐かしいあだ名を持ち出す……」

それを見て私は何かをごまかすように一口、酒を含んだ。
しかしジーニアス相手に悪魔とは言え低レベルでは……。

そこまで考えて、私は何か引かなかったような感覚を覚えた。
何か、忘れているような。

「ん……んん？」

ベレロフォン、ジーニアス、加護……。

「『加護／レベルアップ』お!？」

「わあっ!？」

なんというテンプレートな悲鳴、ではない。

隣で金の杯をお手玉しているネムを横目に、私は自分の愚かさを
呪っていた。

いくらこんな世界で内心アップアップしていたとしても。しても
だ。

まさか。

「まさかレベル上げに行つて、レベルアップするのを忘れていたな
んて……」

「熱いー!!」

ばしゃつと床にこぼれた熱いお酒を被つてうろたえるネムにも気
づかず、しばらく私は呆然とし続けたのだった。

16話 宴の席で（後書き）

内容ちょっと雑かもしれませぬ。

17話 母神（前書き）

おひさしぷりーぷ。

17話 母神

人はもちろん、魔王から犬ところまで、全ての存在は修練し、習練する。その結果、学び、強くなり、賢くもなる。

それは当然のことだが、しかし、努力の結果としては果てしなく微細で、割に合わないものだ。

特に人はよく学ばない。エルフよりも、ドワーフよりも、あるいは、魔物よりも。

そんな人——ヒューマンがなぜフィロソフィアでこれほど幅をきかせられるのか。その理由は、小賢しくも神々の力を持って己を強化しているからである。無論遍く全ての種族は多かれ少なかれ神々の手のひらで包まれてはいるが、それも産まれたときから己の父を選べないことと同様に、限定された選択肢である。

だが、人にはその枷がない。彼らは自動販売機でジュースを選ぶように、選択の自由に祝福されているのである。

それが『加護／レベルアップ』である。加護には過程だけでなく結果も必要であり、その逆もまた成り立つ。

例えば小さな少年が立派な剣士になろうとすれば、まず剣を振る。剣の神はそれを見ている。

そして少年がやがて剣において戦いに勝ったとき、神はその過程と結果を総括し、見合った加護を与える。

それは剣士の先を望む少年の肉体をわずかに改編し、強化をするのである。或いは、剣の神の技を伝えることもあるかもしれない。つまりは、経験値のため、神の祝福を受け、ステータスアップとスキルを得る。

まあ既存のゲームのそれと何も変わらない。内実を話せば、リア

リティを重視する製作者が、何かレベルアップにそれらしい解釈をつけようとしてこうなったらしい。

各々の職業・種族に母神がいて、彼らに『宣誓』をし、母神の要求を満たす度に祝福を受ける。

芸術の神であれば芸術作品をいくつも作らせて、その中で神をうならせるようなものができれば祝福し、次のステップへ移す。

ただし母神は全て自由に選べるわけではない。農民が剣士にはなれても、ナイアルラトホテップの使いにはなれない。同時に、ネムが大悪魔にはなれても、彼女がただの剣士になることはもはや不可能である。

それは、ソード・ラインとゴナⅡダⅡルーの世界の違いでもあるし、魅力のない人間を認めないナイアルラトホテップのえり好みと、スフィンクスを嫌う剣の神の性格にもよるものである。

例えば貪欲なヒューマンであれ、その選択肢が多いということ以上の自由は許されないのである。

ともかく、フィロソフィアの加護は複雑なシステムの一端でしかないが、何せこちらは本物の神だ。

神。

不謹慎ながらも私は、神という存在を目の当たりにすることに、人の心として純粋に興奮してしまっていた。

前世というのかどうかはわからないが、以前の私は多少の読書家であった。

もっともその知識のほとんどはすでに記憶の墓場送りとなってしまうている。私はどちらかといえば頭も要領も悪い。

それでも読書を趣味としたのは、知識への探求心の強さであると自負している。

ここまで悪魔としてやってきたのも、常人なら腰を抜かすような大冒険をやってきたのも。

すべては、このささやかな欲望のなせる業かもしれない。

私は内心の興奮が現れないように心を落ち着かせようとあわてていた。

だがネムにはお見通しだったらしい。

私の前を歩く彼女の表情はうかがえないが、恐らく笑われているのだろう。時折小さな声が漏れた。

「まあ、無理もない。今まで加護を忘れていたなんてなあ」

相変わらずこちらを見ないが、その声はとても嬉しそうだ。

いつもは私が笑ってやる側であったので、いい機会とも思っているのだろう。

……悔しく恥ずかしくもあるが、たまには笑われてやらねばならないだろうな。

それに、本当の理由を言うわけにもいかないこともある。

「くくく、お前ほどの男も、たまにはこういうことがあるか」

機嫌よさげに歩く巨体からの攻撃を甘んじて受け止めていると、突然彼女の歩みが止まった。

彼女の脇から先を覗いてみると、そこは広い円形のホールだった。何もない、行き止まりのホール。

ただどこか肅々と、厳かな空気がある。それは、このホールにたった一つだけ置かれた、それが原因かもしれない。

何も装飾のない、のっぺらぼうの、白い石。人よりも少し大きい程度で、ネムのほうがかなり大きい。

神像。

ネムは巨体を揺らしながら、そう呟いた。

「加護には神々が認知する『神石』が必要なのはわかるな？ 人の時と同じだ。この石像は、一般的な神石よりもいいもので出来ている。普通は一石数神が限界だが、これはもっと多くの神々と交信することができる」

「それはすごい」

これには素直に感嘆した。

ゲームでネムがこれをもっていたかは分からない。以前は私のホームに私の母神を奉る神石があったから、頼む必要がなかったのである。

フィロソフィアの持つシビアさのうちの何割かを担うといわれていたのは、この加護の条件であった。

神石は希少であるがゆえに、それを独占されてしまうとレベルアップすら難しくなってしまうのである。

神石ビジネスと言われるほどその利権争いはどろどろとしていたが、運営の力か有志の個人の力なのか、いつしか神石はギルドや国で所有するのが通例となっていた。

だが、複数の神々と交信できる神石はそう多くはない。

ソード・ラインでは加護を受けるために三つ隣の国に行く、などというのはオーソドックスな旅の理由の一つだった。

「まあ、私は悪魔としての特殊能力でいつでも自由にナイアルラトホテップ様と交信することができるから無用の長物だな……怖いから、あんまりやらないけど」

ちよつとこつちを見ながら身を縮こまるようにして言ったネム。

私も声を掛けようとして――言葉に詰まった。

とびっきりの美少女が、ネムの背後に、首だけで浮いていたからだ。いや、正確には、空間に入った切れ目から美少女が首だけ出し

ていたのだ。

私は驚きのあまり声も出なかったが、あれが何かはすぐ分かった。にやりと不気味な笑いを残して首は消えていった。ネムがそちらを向こうとしたからかもしれない。

ネムは明後日の方向を見る私を不思議そうに見ていた。

「どうした？」

「いや、ネム……強く生きろよ」

「？ 変な奴」

いや、まあ、何も言うまい。

或いはこういう迂闊なところが、ナイアルラトホテップも気に入ったのかもしれない。

主に、いじりやすく、いじめ甲斐があるという理由で。

ともかく、私にできることは黙っておくことだけだ。こちらに被害がこないようにという意味で。

「さて、加護は初めてでもないだろう。とつととやれ」

「ああ、まあヒューマンを辞めてからは初めてだから、少し緊張はするな」

「ん？ そうだったのか？ それにしてはたった二人でここまで来ている……さすがは『デュラハン』、並の戦闘力ではないな」

道を空けてくれたネムの前を通り、神石の前へと立つ。

デュラハンは確かに強力だが、加護なしでは限界がある。

それに、加護には素晴らしい特典がある。それは、自分の能力や、次のレベルに必要なものを、己にとってもっともわかりやすい形で、神々が我々に示してくれるのだ。

ゲームでいうならばRPGのステータス画面だ。フィロソフィアはコマンド画面はあっても、詳細なステータス画面はない。レベル

アップの際に神々に頼み、その画面をメモしておく、というのが基本的な攻略テクニックの一つだった。

或いは、神というもつとも非現実的で、超常的な存在が、私に何か答えをくれるのではないか、という淡い期待も、ないではなかった。

性格的にはアレだったが、ナイアルラトホテップも、正直驚愕するに値する存在であることは間違いないのだから。

私はネムに見守られながら、そっと、白い石の中心に手を当てる。すると私の手は泥に沈むように、硬いはずの石の中に埋まっていく。

かき分けるように、手を進める。

そこで、私の意識は現実からかい離れた。

ネムの目の前では、時間が停まったかのように停止してしまったヒロがいた。

左手に乗せた頭も、目を開いたまま、微動だにしない。

「神に会えたか……さて」

ネムはヒロが無事に『神の座』へと飛べたことを確認して、ヒロに背を向けた。

彼女にも仕事はあるし、神によってはこの邂逅がとても長くなる場合があるのだ。

特にヒロなど、いかにも神の関心をかいそうではないか。

「しかし、ヒロの母神は誰かな？」

そういえば聞き忘れていた。

まあヒューマンの時と同じでないのは確かだ。ソード・ラインの神々を裏切って、こちら側に来たようなものであるし。

そうになると、デュラハンを司る神が母神で間違いはないのだろうが、さすがに博識であるネムも、ゴナⅡダⅡルーには知の及ばぬところも多い。

「デュラハンは悪魔の一種、死神の眷属……不死性の怪物、か」

悪魔なら、【暗黒神オⅡバⅡゴア】あたり、死神ならば【ハデス】や【蠅の王】もありうる。不死性の怪物ならば……。

「その母は一人しかない、か」

史上最強の母。母なる大地神【アーリマ】すらせせら笑う、破壊と慈しみの異なる性格を刻む堕ちた神。

怪物の神、【テュポーン】の血の一滴を飲み干し、幾多の怪物を孕んだ鬼神母。

【蛇姫のエキドナ】。

ネムの思い描いた彼女こそ、正しくデュラハン族の母神たる存在であった。

18話 蛇姫（前書き）

閑話のお話。

18話 蛇姫

不思議な空間だった。

何もない、真っ白な空間。

普通の人間ならば、恐怖とか、嘔然とか、そういった感想を抱くだろう異質な空間で、私が感じたのは「退屈」だった。

何もない、はつまらない。

心が踊らない。神とは、こんな場所にいるのだろうか。

空との境目もわからない、白い地面をつま先でけりつける。かなり強めに蹴ったが、傷一つつかない。

神すら、籠の中の鳥なのか。そう思うと、少し、哀れに感じる。

「うふふ、やはりあなた、面白いわぁ」

ずるりと、目の前の真白い空間に、黒い切れ目が奔った。

私の身長ほどもありそうなそこから、一人の女が這い出てきた。

さすがにこれには驚いた、が、予想もできていた。神が突然出てくるなど、所詮二度目である。

「賢いわね、坊や。あなたのような子、好きよ」

女性は尾の先まで這い出ると、空間の切れ目を閉じて、その場に立ちあがった。

尾はとぐろを巻き、それでバランスを取っているのだろう。

彼女は、蛇だった。

しかしそれは、下半身だけ。

上半身は、美しい女性だった。

ネムと同じだと思ったが、また違ふとも思う。

ネムはきれいだが、この人は、いや、これは、別のものだ。

言葉にできない、完璧な「淫靡」と「妖艶」。

布きれ一つまとわない人の型をなす上半身は、完璧な形をしていた。

乳房も、くびれも、まるでコンピュータグラフィックスの造形であるかのように、人間味がない。

顔は、なぜか、美しすぎて逆に印象がない。たれた目は艶やか、大きな唇は妖しくねっとりとして、紫の髪は乳房にかかり淫猥である。

それでも、そこに下心は抱けない。

美しすぎることで、おそらく、私が本能で理解したからだ。

勝てない、ということ。そして、私の【母】であるということ。

彼女の天使の歌声を淫らに歪ませたような声が、空間に響き渡る。

「安心して、ここは神々の待合室。気に入った者や、私達との面会を希望する者と会うためだけの場所」

彼女はとぐろを巻いた体を解き、私の体にそれを巻きつけた。

ぎちぎちと苦しくない程度に私は拘束され、彼女の体は私の目の前に来た。

倒錯するほどの香りが、私の鼻に届く。

そこで気づいた。今の私は、新山、英雄？

「ごめんね。本当はあなたをこちらに呼ぶつもりはなかったのだけれど、こちらの『あなた』が魂の欠損をおこして、その時にどうしてもってね？」

彼女の唇が私の首筋につけられる。

身震いするような快感に、私の中の男性が鎌首を少しもたげた。

「もともとのあなたはこっちの仕組みを知ったの。神々のこと、戦いのこと、加護のこと。そして」

彼女の爪が、私の心臓付近をなでた。

「強くなるために、悪魔になろうとした。そこで、やつらに襲われた。あなた、何でデュラハンにチェンジしたか覚えてる？」

どうしてだったか。

確か、アップデートされて、いや、やつらが仲間を襲ったから、あ、あいつが倒されてしまって、アップデート前に皆でイベントに参加して――。

白痴のように思考の鈍くなった私を見て、彼女は母の微笑みをこぼした。そこに淫靡さはない。

あるのは凄絶なまでの、母である。

「まだ魂の融合は不完全よ。でも、いずれ思い出す。あなたは呼ばれたのではない。望んで、来たのだということを」

びしり、と空間が割れた。

私の視界の奥に、彼女が現れた時より巨大なひび割れが見える。一本が人一人分ほどの指が、強引に空間を割ろうとしている。

「時間切れね。最近は奴らもしつこいわ。こうして息子たちと語らうことも、満足にできない」

彼女は一つ溜息をついて、そして、急に私に口づけた。くらくらするような甘い香りと同時に、湧き上がる力。造り替え

られる体。

「強くなって。私でも及ばないほど、強く、強く、そして、守って。私たちの子供たち、貴方たちの、兄弟を」

彼女は消えていく。そこにいながらにして、まるで陽炎のように、薄く薄く、消えていく。

「しばらくは会わないわ。あなたがやつらに見つからないように。あなたがもっともっと強くなったとき、もう一度、会いましょう」

彼女はひらひらとその手を振って、消えていった。

「ばいばい、ヒロ」

私の意識も闇に消えた。

だが、消える直前に見えた。

空間を割る、巨大な手。

人ではない、何か。

空間を覗く、五つの目玉。

それを見た瞬間、湧き上がった憎しみは、私のものと思えぬほど、巨大で、熱い。

必ず貴様らを、殺してやるぞ――。

「ヒロ？」

「ああ……」

戻ってきた、という感覚があった。

不思議な場所だった。

生ぬるいお湯につかっているような、母の羊水に浸されているような、夢見心地、というのだろうか。

起こったことはすべて覚えている。それでも、どこか現実であったとは思えない、不思議な世界だった。

目の前にいるのは、パシパだった。

その巨体ゆえに、腰をかがめて私の頭を覗き込んでいる。

少し見つめた後、彼女らしい、いつもの快活な笑顔をくれた。

「おかえり。どうだった、加護？」

「あ、そうか」

そういえば、私は加護を受けていたのだった。衝撃的で、麻薬でも打たれたのかというほどの夢見心地に、その主目的を忘れていた。恐らくは、あの口づけが今回の加護なのだろう。

確かに、体が恐ろしいほど調子がいい。いや、調子がいいというよりは、持て余す、というのか。

例えるなら、朝起きたらいきなりマッチョになっていたというか、少し例えがたいがそのような感覚がある。

これが、加護。

体を造りかえる、というのはこういうことか。

しかし、残念なことに、今の自分のステータスを見ることはかなわなかった。

ステータスを知るのは、この世界においても基準を作ることになり、今後の展開を有利に過ごせると思ったのだが。

頼む暇もなかった。やはりゲームとは違う、ということか――。

「なっ」

「ん？」

ステータス、そう考えたとき、私の網膜に何かが映った。

「こ、これは……？」

「ん？ ……もしかして『今の自分』を見てるの？ 人によって違うらしいけど、ヒロはどう表現されてるのかな？」

なるほど、ステータスチェックのことをここでは『今の自分』と表現している。

これはあくまでパシパが言っているだけで、正確な表現ではないのだろうが、それでもこの世界の人間なら誰でもできることだとわかったのはありがたい。しかしなんだ、最初から誰かに聞けば早かったのだ。迂闊である。

「ああ……数字だ」

「数字？ ふーん、ヒロはやっぱり変わってるなあ」

「……そうかもしれないな」

思わず笑みがこぼれる。

本当は、変わっている、などというものでもないのだが。

それは、私の目に映るものからも、明らかで。

「それじゃ、次は僕だね！ 村以来だから、結構強くなっちゃうかな」

鼻歌を歌いながら、パシパは私と入れ替わりに神石の前に立ち、そして光の中に消えていった。

私はしばらく、パシパの消えた後を見ていたが、その実、パシパ

を追っていたわけではなかった。

私は、網膜に焼きついた数字と、文字に、魅入られていた。

ヒロ。

バルバス。

デュラハン。

レベル、13。

『魔法』、『魔法剣』、『獣化』、『テロメア』、『状態異常無効』、『ヴォーパル』。そして『ブラックレギオン』。

要約すればそのようなことが、私の網膜に現れている。

特に、最後の文章を見て、私は小さな笑いが止められなくなった。随分とレベルが高い。そう思って驚いていたのだが、何も驚くことはなかった。

あの粹な蛇、いや、私の女神は、大層なものを与えてくれたようだ。

追加スキル、『蛇姫の加護／ジーニアス』。

これで、私はあのニンゲンの英雄と、同じ土俵に上がれるというわけだ。

私の笑いは止まらない。

悪魔になって以来、凶暴性を増した実感のある私は、頭のない右手を壁にたたきつけた。

ネムの創り上げた要塞とも言うべき超硬度の宮殿の壁を、私は蜘蛛の巣状に叩き割った。

フィロソフィアにあっては、多くのステータスがある。

話術や、善性、悪性、魅力等に代表される特殊ステータス。

しかし、もっとも大事なものは、この戦いの世界で大事なものは、特殊ステータスではなく、基礎ステータスである。

即ち、器用(dex)、頑丈(vit)、俊敏(agi)、知性(int)、精神力(soul)、信仰(rel)、魅力(chr)。

そして――。

「この、パワー……」

筋力(str)。

それは、この世界でヒューマンとモンスターの間に横たわる深い溝のようなものである。

人は、モンスターを打ち負かす。

それは、精神や知性、そしてそれを力に変える装備があつてこそである。

いわゆる、『魔道具』と言われるものだ。

では、魔道具を持ち、圧倒的な筋力を持ったモンスターは。人も、モンスターも、越えるではないか。

圧倒的筋力に加え、魔道具を操り、そしてジーニアス。

「く、くくく、はは、ははは」

私は狂ったように笑った。

何が嬉しいのか、何が悲しいのか、よくわからないが、笑いだけは漏れた。

もう、人であろうとすることはしない。

私は、力に酔ったのだ。

ここにあるのは、数字。でも、私は知ってしまったのだ。

この体と、数字の関係を。
私は、人の段階を超えた。

「……いい区切りだ」

そう、いい区切りだった。

私は、日本人を捨てる。

甘えを捨てる。常識を捨てる。過去を、捨てる。

「行けるところまで」

私は歩き出す。

この新しい体を、動かしたい。試したい。
うづく。魂がうづくんだ。

人を超えるとは、こういうことか。

この、高揚感！

「絶対に、勝つ！」

「壁を壊して何を狂っとるか！ 馬鹿者！」

ばきいっと板の割れるような音を残して、私の首は廊下をボールのように転がっていった。

私の首の目の前に立つ怒りに満ち満ちたネムの笑顔と、野球バットのようにひゅんひゅんと振られる尻尾を見て、私はシリアスになりきれないことを悟ったのである。

18話 蛇姫（後書き）

遅筆で焦られていたようだからやった。後悔はしていない。
ツ （キリ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5928p/>

フィロソフィア／Philosophia

2011年10月20日23時24分発行